令 和 ４ 年 度

研究 ゆ り

第２４号

本校研究主題

「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成

道川分教室研究主題

一人一人の笑顔があふれ、
きらり輝く授業を目指して

－道川分教室のこれまでの実践を生かしながら－

秋田県立ゆり支援学校

巻　　頭　　言

昨年度までの２カ年研究で、学習評価に焦点を絞った研究として、「児童生徒による学習評価の充実」を主題に、教科指導の場面に焦点を絞った実践に取り組みました。

１年目は、「資質・能力の三つの柱」を元にした「めあて」の設定と、「学習評価の三つの観点」での「振り返り」を行うことを主とした【共通実践事項】に取り組みました。さらに、２年目では、児童生徒自身が学びを実感し、学びをつなげることができる支援に着目した授業改善や指導計画の見直しを、小学部から高等部までの各学部の職員が入った縦割りの教科別ワーキンググループ（以下ＷＧ）を編成してすすめました。この研究実践を通して、児童生徒が「学びを自分事としてとらえる」ためのポイントを明らかにできたとともに、研究の過程で取り組んだＷＧが、特別支援学校で小中高の一貫した教育に取り組むために有効な手段だと実感でき、「学びの積み重ね」の視点の重要性に改めて気づくことができました。

今年度は、これまでの成果と課題を受け、「『児童生徒が学びをつなぐ』教育課程の編成」を主題に、教科ＷＧを柱とした研究を進めました。児童生徒自身が学びに見通しを持ち、学んだことを様々な場面で活用したり、次の学びに生かしたりする姿を目指した日々の実践を通して、教育課程の改善に取り組むものです。この実践で大切にしてきたことは、学びをつなぐ主体が児童生徒自身であることです。児童生徒自身が、学びのつながりを実感し、学びを広げたり、深めたりしながら、次の学びへの意欲を高めていくための実践です。教師の支援はどうあればよいのか、題材設定や指導計画はどう改善したらよいのか、多くの取り組むべき課題にじっくり取り組んできました。

１年目の成果としては、縦割りＷＧでの取組は、単なる研究推進にとどまらず、教員が学部の枠を超えて授業に参加し合う体制作りにつながったことや、小学部から高等部までの一貫性のなかに、各学年での学びの積み重ねの意識が加わり、教育課程全体の見直しにつながったことが挙げられます。次年度は、今回明らかになったことや、新たな課題の改善に取り組んでいきたいと考えています。

最後に、事前・事後と合わせて年３回の授業提示をした本校教員に対して、貴重な御助言をいただきました中央教育事務所指導主事 久米美樹 先生、潟上市立天王中学校教頭 小松徹 先生、秋田大学大学教育文化学部准教授 前原和明 先生に心より感謝申し上げます。

令和５年３月
秋田県立ゆり支援学校
校長　髙橋　譲

◇　目　次　◇

＜巻頭言＞・・・・・・・・・・・・・・・・・・　校　長　　髙　橋　　譲

【本校の取組】

○全体研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成

○教科ＷＧ（ワーキンググループ）での研究

音楽科ＷＧ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

職業・家庭科ＷＧ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１

保健体育科ＷＧ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４９

○寄宿舎研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６７

－日常の生活指導－

【道川分教室の取組】

○全体研究及び研究の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７５

一人一人の笑顔があふれ、きらり輝く授業を目指して

－道川分教室のこれまでの実践を生かしながら－

本校の研究の歩み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９３

研究同人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９４

全体研究

研究主題

「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成

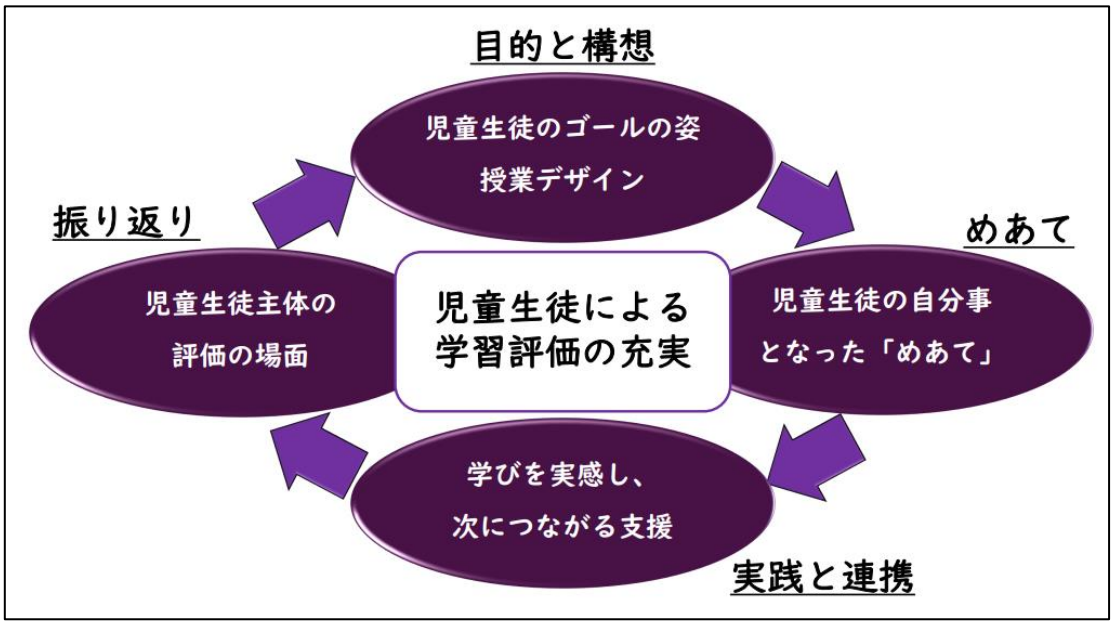
（１年次／２年計画）

１　問題と目的（主題設定の理由）

(1) 本校の目指す学校像と昨年度までの研究の取組

本校は、目指す学校像を「地域と共に歩み、地域で育ち、地域に必要とされるゆり支援学校」とし、児童生徒の自立と社会参加を目指し、明るく豊かな心の育成と教育的ニーズに応じた適切な教育活動を展開している。平成 30 年度からは学校運営協議会を設置し、特色ある教育活動を推進するとともに、地域交流・地域貢献を通して地域を元気にする学校づくりを推進している。

この目指す学校像を具現化するために、令和２年度から研究主題を「児童生徒による学習評価の充実」とし、各教科の授業づくりに取り組んできた。平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申では、児童生徒に「何が身に付いたか」（学習評価の充実）を改善すべき課題として挙げている。児童生徒自身が何を学び、何が身に付いたかを実感し、学びを次の学習や様々な生活場面につなげていくための授業づくりを推進していくことで、児童生徒の様々な成長や変容とともに、図１にある４つの観点での支援のサイクルが効果的であることが明らかとなった。



＜図１＞児童生徒による学習評価を充実させるための支援のサイクル

また、令和３年度の研究のまとめでは、成果と教育課程編成に向けての提言が示された（表１）。

＜表１＞令和３年度 研究の成果と教育課程編成に向けての提言

学部	対象教科	成果〇　教育課程編成に向けての提言●
小学部	国語科	〇各教科等を合わせた指導と連携した授業づくり ●目指す姿に迫る基盤づくりと情報の共有
中学部	保健体育科	〇授業づくりの５つの視点の活用 ●３年間を見通した学習内容表の活用
高等部	職業科・家庭科	〇学びをつなげる家庭や寄宿舎との連携の充実 ●各教科等との関連や系統性の整理

さらに、学部研究を中心に行ってきた研究体制の一部（年間１３回の学部研究会のうちの４回）を教科ワーキンググループ（以下、教科ＷＧとする）にしたことで、学部を越えた視点から検討を重ねることができ、小学部、中学部、高等部の教育課程の系統性や、学部間のつながりが見えてきたことが成果として挙げられた。しかし、教科ＷＧの中で教育課程の編成や改善に至るまでは十分に検討できなかったり、教科ＷＧで行った内容を各学部で情報共有することが不十分であったりする課題が挙げられた。

なお、全体の研究を通して、教育課程編成に向けての提言として、以下の３点が挙げられた。

・児童生徒が自分事になる授業と学びをつなぐ環境作り
・教科ＷＧの継続と弾力的な校内職員の活用
・学習履歴（スタディ・ログ）の活用による児童生徒の学びのつながり

２年間を通して、「児童生徒による学習評価の充実」を目指し、「何が身に付いたか」という研究を進める中で、多くの学部、教科ＷＧで検討し、これらの提言に挙げられたのが、学習内容表の検討などの「何を学ぶか」の部分であった。「何を学ぶか」の部分は、「学習指導要領」や「教科等を学ぶ意義」、「教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成」にあたると考える。

(2) 社会的背景

今年度から全校種、そして特別支援学校の全学部で全面実施される学習指導要領では、「生きる力 学びの、その先へ」と示され、学校で学んだことが、明日、そして将来につながるように、育成を目指す資質・能力の三つの柱に基づき整理されている。その際、特別支援学校では学びの連続性を重視し、各学部や各段階、小・中学校の各教科及び高等学校の各教科・科目とのつながりを大切にしている。これまで領域・教科を合わせた指導が教育課程の中心として行われてきた知的障害特別支援学校においても、各教科の指導の充実は、今後取り組むべき喫緊の課題であることが示唆された。

平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申では、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」が求められている。また、令和３年１月中央教育審議会から出された「令和の日本型学校教育の構築を目指して」の答申の第Ⅰ部総論「急激に変化する時代の中で育むべき資質・能力」では、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0 時代」の到来と、新型コロナウイルスの感染拡大などの先行き不透明な「予測困難な時代」を受けて、新学習指導要領の着実な実施とＩＣＴの活用の２点を重点項目として挙げている。

そこで、本校の目指す学校像、昨年度までの研究の取組、社会的背景を踏まえ、本研究主題「『児童生徒が学びをつなぐ』教育課程の編成」を設定した。

２　仮説

児童生徒が学びをつなぐことを目指した各教科等による授業づくりにおいて、全校縦割りのＷＧを中心とした研究体制にすることによって、児童生徒の学びを俯瞰的な視点（教育課程の編成）で捉えることができるであろう。その視点の変化は、児童生徒自身が学びを見通したり、学んだことを活用し、次の学びに生かしたりすることにつながると考える。学びがつながる経験は、家庭や地域社会へ生かされ、今後の予測困難な社会の中で生きる力や、生涯に渡って学び続ける児童生徒の育成につながるであろう。

「児童生徒が学びをつなぐ」とは、児童生徒自身が学びを見通したり、学んだことを活用し、次の学びに生かしたりしている状態を指している。また、児童生徒が学びをつなぐために、教師は学びをつなげる様々な支援を行う。
「学びをつなぐ対象」は、次の学び（学習）、他の場面（家庭や寄宿舎、地域社会）、他教科等、学年や学部間、キャリア教育の視点などを想定している。

３　内容と方法

本研究は、教科ＷＧを中心とした研究体制の下、以下のＡＰＤＣＡサイクルの視点で２年計画の研究期間で検証する。なお、１年次の年間の研究計画を資料１に示す。

１年次

Ａ：実態把握
- 「学びをつなぐ」ワークショップの実施（各分掌）
- 各学部の各教科ＷＧに関わる実態把握
- 授業づくりに関するアンケートⅠ（教職員）の実施

Ｐ：計画
- 授業デザインミーティングⅠの実施 ⇒年間指導計画、単元・題材計画の作成

Ｄ：授業実践と研究推進
- 全校授業研究会と各ＷＧ授業研究会の実施
- 教科ＷＧの研究の推進

Ｃ、Ａ：評価、改善
- 授業デザインミーティングⅡの実施 ⇒年間指導計画、単元・題材計画の評価と見直し
- 授業づくりに関するアンケートⅡ（教職員）の実施
- 教科ＷＧの研究の検証と、教育課程討委員会やキャリア推進委員会への反映
- 全校、各学部の教育課程の改善

２年次

- １年次のＡＰＤＣＡサイクルの継続
- １年次の研究の成果を受けて編成した教育課程の内容の検証
- 小中高の学びの連続性を重視した教育課程の改善

４　研究対象の教科ＷＧと授業

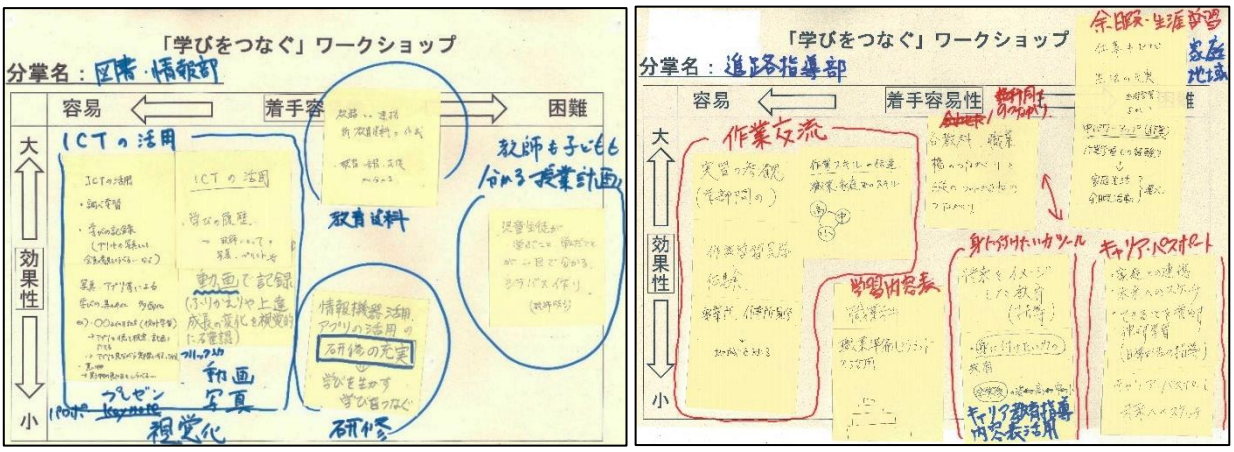
音楽科ＷＧ：小学部、中学部、高等部ともに音楽科が研究対象の授業
職業・家庭科ＷＧ：小学部、中学部は、各教科等を合わせた指導が研究対象の授業
　　高等部は、職業科、家庭科が研究対象の授業
保健体育科ＷＧ：小学部は、体育科が研究対象の授業
　　中学部、高等部は、保健体育科が研究対象の授業

※昨年度までの研究の成果と課題、そして児童生徒の今後の社会生活を見据えた生涯学習の観点などを総合して、上記の３つの教科ＷＧを設定した。

５　研究の実際

⑴　「学びをつなぐ」ワークショップの実施（各分掌）

年度初めの全校研究会の際に、「学びをつなぐ」について共通理解を図るワークショップを実施した。研究主題を全校の職員に浸透させ、研究に対して一人一人が自分事となるように考えた。研究主題の「学びをつなぐ」という言葉には、多様な意味があり、捉え方ができる。それぞれの分掌の立場で、「学びをつなぐ」について考え、その言葉を意味付けた上で、研究の推進や分掌経営に反映させることを期待した。図２は、ワークショップで使用した模造紙の一部である。



＜図２＞「学びをつなぐ」ワークショップ記録（各分掌）一部抜粋

⑵　各学部の各教科ＷＧに関わる実態把握

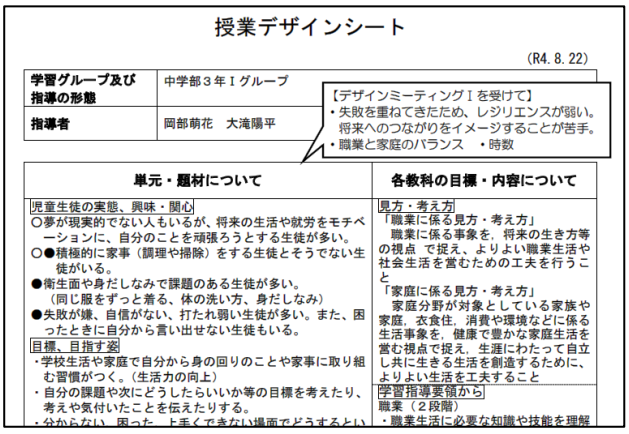
教科ＷＧで研究を進めるにあたり、各学部の各教科ＷＧに関わる実態把握を行った。年度初めに、各教科ＷＧに関する各学部の現状と課題を確認することで、各教科ＷＧ、各学部で目指すゴールが明らかとなった。各学部の各教科ＷＧで確認した内容は、表２の通りである。

⑶　授業デザインミーティングⅠ・Ⅱの実施

研究対象の単元・題材の構成や計画及び他の指導の形態との関連を検討し、年間指導計画や日々の授業実践に反映させるために、授業デザインミーティングⅠ（年度初めの１、２回目）を実施した。

１回目（５月前半まで）は、授業担当者と各学部の研究部員で大まかな計画を立て、２回目（５月末まで）に授業担当者、学部主事、授業アドバイザー、研究部員、ＷＧメンバーでさらに検討した。年度途中の授業デザインミーティングⅡ（夏季休業時の３回目）では、評価と見直しを図り、その後の学習内容や指導内容、方法の改善に生かした。授業デザインシート（図３）には、その都度加筆修正を加えた。

教育専門監を含む授業アドバイザーだけでなく、学部の枠を越えたＷＧメンバーが参加することで単元・題材計画を設定する際の留意点や授業づくりのアドバイスが様々な視点であり、評価・改善を図る貴重な機会となった。



授業デザインシート

(R4. 8. 22)

学習グループ及び指導の形態	中学部３年Ｉグループ
指導者	岡部萌花　大滝陽平

【デザインミーティングＩを受けて】
・失敗を重ねてきただため、レジリエンスが弱い。
　将来へのつながりをイメージすることが苦手。
・職業と家庭のバランス　・時数

単元・題材について	各教科の目標・内容について
児童生徒の実態、興味・関心 ○夢が現実的でない人もいるが、将来の生活や就労をモチベーションに、自分のことを頑張ろうとする生徒が多い。 ○●積極的に家事（調理や掃除）をする生徒とそうでない生徒がいる。 ●衛生面や身だしなみで課題のある生徒が多い。 （同じ服をずっと着る、体の洗い方、身だしなみ） ●失敗が嫌、自信がない、打たれ弱い生徒が多い。また、困ったときに自分から言い出せない生徒もいる。 目標、目指す姿 ・学校生活や家庭で自分から身の回りのことや家事に取り組む習慣がつく。（生活力の向上） ・自分の課題や次にどうしたらいいか等の目標を考えたり、考えや気付いたことを伝えたりする。 ・分からない、困った、上手くできない場面でどうするとい	見方・考え方 「職業に係る見方・考え方」 職業に係る事象を，将来の生き方等の視点 で捉え、よりよい職業生活や社会生活を営むための工夫を行うこと 「家庭に係る見方・考え方」 家庭分野が対象としている家族や家庭，衣食住，消費や環境などに係る生活事象を，健康で豊かな家庭生活を営む視点で捉え，生涯にわたって自立し共に生きる生活を創造するために、よりよい生活を工夫すること 学習指導要領から 職業（２段階） ・職業生活に必要な知識や技能を理解

＜図３＞授業デザインシート

＜表２＞各学部の各教科ＷＧに関わる実態と主な目指すゴール　　〇実態　▲課題

教科ＷＧ／学部	音楽科 ＷＧ	職業・家庭科 ＷＧ	保健体育科 ＷＧ
小学部	〇手遊びや身体表現など身体を使った表現遊びが得意（好き）。まねが上手。 〇ジャンルなどには偏りがあるが、経験する（繰り返す）ことで好きになる、身に付く。 ▲一人一人の実態や学年の段階に合った学習内容、指導体制（活動スペース等の制限）。 ▲専科の先生に頼ってしまっている。ＴＴの連携。	〇挨拶や返事、清掃など基本的な生活習慣、生活態度を大事にしている。 〇繰り返しの活動に強い。 〇自分の役割があると果たす活動を通して、働くイメージを育んでいる。 ▲対人意識が薄い。 ▲指導内容表や指導要領を参考に、職員の研修がもっと必要。	〇走る、回るなど体を動かすことが好きな児童が多い。 〇にこにこタイムなど繰り返しの運動には時間いっぱい取り組むことができる。 ▲運動好きではあるが、体力や体の細かい使い方、チームプレイやルール理解などに課題がある。 ▲学習指導要領の内容に沿った題材設定。
中学部 〇実態 ▲課題	〇知識や経験の不足。内容に偏りがある。 〇合奏で音を「合わせる」ことが難しい。 ▲学年の積み重ねが必要。各学年での学習内容の整理。学部間での指導内容の確認。 ▲スキル面の積み重ね。知識よりも体験を。 ▲時数と楽器がもう少しあればよい。 ▲高等部や将来の趣味につながるとよい。	〇生活単元学習内の職業・家庭科に関する内容が少ない。 〇授業で学んだことを宿題として家庭にも。 〇学級単位→グルーピングはねらい別か。 ▲指導内容表をもとに、生徒の実態に合わせた、必要な「学ぶべき内容」を具体的に整理し、共通理解して高等部へつなげたい。 ▲自立活動が中心の生徒のねらいはどうすべきか。	〇年間を通じて授業の流れを一定に。技能のポイントを明示している。 〇経験不足の競技でも、繰り返すことで伸びが見られる（水泳、整列など）。 ▲各学年の積み重ね。学習内容の整理。 ▲環境（場所、器具、待ち時間多い）。 ▲保健の学習が少ない。
高等部 〇実態 ▲課題	〇歌うのが好き、鑑賞も好き、器楽も好き。 ▲コロナ禍で歌唱が十分にできず、内容に偏りが見られる。 ▲人数に見合った楽器の数が足りない。 ▲卒業後を考えた時、生徒の興味関心がある題材を取り上げたいが、音楽的指導（学習指導要領）との兼ね合いを考えた題材の選定が難しい。	〇２、３年生は、実態（想定される進路先）に応じた能力別のグループで実施。 〇中学校から進学した生徒の中には、自己肯定感や将来に対するイメージが低い生徒がいる。中学部から進学した生徒との実態差。 ▲実態差に応じた押さえるべき内容の精選。 ▲家庭での般化の難しさと生活に生かせる技術の習得。	〇運動が好きな生徒が多い。また、苦手な生徒も周囲と一緒に取り組んでいる。 〇実態別グループや自己選択種目を設定。 ▲学習用具不足（高校生用の跳び箱、マット、武道に必要なものなど）のため、十分な活動ができず、達成感が得にくい。 ▲小・中・高の学びをつなげる学習内容（保健分野も含め）の検討。
ＷＧで目指す主なゴール	①学習指導要領に沿った授業づくりの検討 ②各学部、学年の段階に合った学習内容の整理 ③各学部における音楽科と各教科等を合わせた指導とのつながりの検討	①学びの積み重ねが見える学習履歴 ②学習内容参考一覧の活用と改善 ③未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）における小学部、中学部、高等部の学びのつながりの検討	①学びの積み重ねが見える学習履歴 ②学習指導要領に基づく各学部における学習内容の押さえ ③全校での体力テストの実施 ④校内、地域資源の活用と学部、学年間のつながりの検討

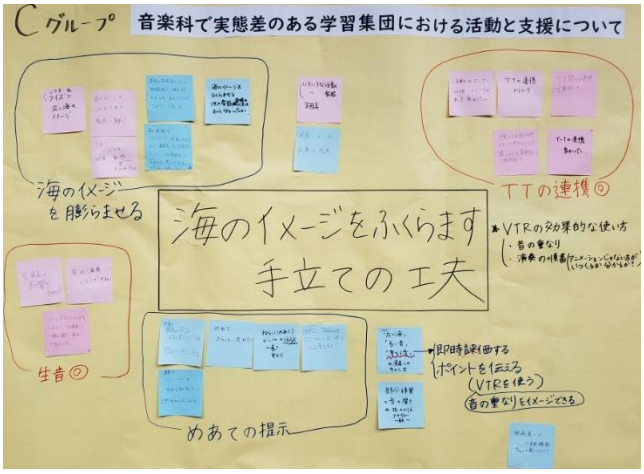
(4) 全校授業研究会の実施と授業映像の配信

研究主題に沿った授業づくりや授業改善を進めるため、教師の手立てや評価の仕方を全職員で検証し、各ＷＧや各学部の授業実践に生かす機会として、全校授業研究会を３回（各ＷＧ、各学部１回）実施した。各学部の期日、指導助言者については表３に示した。また、授業の様子と協議で使用した模造紙を図４に示した。

さらに、授業映像について視聴の希望を募り、オンデマンド配信した。視聴後のアンケートでは、約８割の教員から「とても参考になった」、約２割の教員から「まあまあ参考になった」の回答が得られた。

＜表３＞全校授業研究会の日程

教科ＷＧ	音楽科ＷＧ	職業・家庭科ＷＧ	保健体育科ＷＧ
学部・提示授業	小学部・音楽科	中学部・生活単元学習	高等部・保健体育科
全校授業研究会 期日	授業提示・研究会 7 月 19 日（火）	授業提示・研究会 11 月 15 日（火）	授業提示・研究会 9 月 13 日（火）
指導助言者	天王中学校 小松徹 教頭	秋田大学 前原和明 准教授	中央教育事務所 久米美樹 指導主事



＜図４＞授業の様子と協議で使用した模造紙

(5) 指導案の様式の変更（夏季休業中）

本校の指導案では、目標に対する評価規準を観点別学習状況の評価の３観点で記載している。その際、「特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料」（令和２年４月　文部科学省）と「特別支援学校高等部学習評価参考資料」（令和４年３月　文部科学省）を参考にしている。しかし、「内容のまとまりごとの評価規準」、「〔指導項目〕ごとの評価規準」を作成する際の手順に従うと、目標の文末を「～している」と記すことで「知識・技能」の評価規準を作成できることになるが、場合によっては十分ではないと感じていた。この点について、秋田県総合教育センターでの茨城大学新井英靖先生の講義内容を参考にし、改善を図った。

単元の目標に対しては、これまで通り学習指導要領に準拠した「評価規準」を設定し、本時の目標に対しては、授業者が「評価基準」を設定することとした。そのことで、より具体的な児童生徒の姿がイメージでき、本時の授業の中でどのように評価すれば良いかが分かりやすくなった。

(6) 教育課程検討委員会、キャリア推進員会での研究の検証と提案

今年度の研究を教育課程編成に生かすために、教育課程検討委員会、キャリア推進委員会において各教科ＷＧの研究部員も参加し、研究の検証をしたり、次年度の提案をしたりする機会を設定した。そのことで、研究の成果を教育課程編成につなげるという意識をさらに高めることにつながった。なお、表４、５は、キャリア推進委員会で示された「未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）」についての職員アンケート結果の抜粋である。

＜表４＞「未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）」職員アンケート設問結果（一部抜粋）

設問内容：目標設定の成果と課題で当てはまるものに〇を付けなさい	小学部	中学部	高等部
児童生徒が目標を意識している	成果：４名 課題：10名	成果：６名 課題：５名	成果：12名 課題：２名
保護者との連携に役立つ	成果：９名 課題：９名	成果：４名 課題：２名	成果：８名 課題：３名

＜表５＞「未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）」職員アンケート自由記述結果（一部抜粋）

- 今年度が初めての取組であったが、今後積み重ねていくことで目標を意識することにつながると感じる。（小）
- 小学部１年の保護者が「理解する」に至るまでは、もう少し積み重ねが必要である。根気強く積み重ねて（面談や連絡帳でのやりとり）いきたい（小）。
- 学級の児童全員が同じ「未来へのスケッチ」の型は使えないため、活用するにあたり担任の工夫が必要と感じる。小学部の様式は、もう少し簡単にしてもよい（小）。
- 様式が実態に合っているか、合っていないかは半々であるため、柔軟な対応が必要である（中）。
- 未来へのスケッチを作成したり、評価したりする期間を教務部と連携し、明確に年間計画の中に示していけるとよい（高）。
- 生徒本人、保護者、担任、学年間でも確認でき、次年度の引き継ぎなどにおいても大切な手掛かりとなる資料になる（高）。

(7) 教科ＷＧを中心とした研究の推進

学部を越えた教育課程という視点で各学部の一貫性や系統性を図るために、全校縦割りの教科ＷＧを年間６回、教科ＷＧを学部に分けた「学部ＷＧ」を年間３回、学部研究会を年間６回実施した。教科ＷＧメンバーには、各教科の免許保有者や各学部の担当者などを配置したのち、全体のバランスを考慮して構成した。

教科ＷＧを中心とした研究の進め方に変えたことで、学校評価の自由記述では、「ＷＧなどの研修により、様々な指導方法やアイディアを研修できた」「教科ＷＧでは、学部を越えて多面的な視点で協議ができて良かった」「ＷＧの研究は、各学部の授業について知ることができ、系統的な指導につなげることでできた」「他学部の専門教科の教員が授業に加わることで、良いアドバイスをいただけた」などの肯定的な意見が挙げられた。一方で、課題としては、「所属するＷＧ以外の授業研や指導案検討にも参加することで負担感があった」「研究会が多く、煩雑で分かりづらかった」「研究で学びをつなぐためには、職員が他学部を知ろうとする意識を高める必要がある」などの意見が挙げられた。

なお、今年度の主な取組内容と成果、課題、次年度の教育課程編成に向けた提案を表６に示した。

＜表６＞主な取組内容と成果、課題、次年度の教育課程編成に向けた提案

	取組内容	○成果、▲課題	教育課程の編成の提案
音楽科 ＷＧ	・授業研究会　２回実施 （小：全校　中：ＷＧ） ・年間指導計画の書式の改善案作成（小） ・パワーアップ市での太鼓の演奏披露（中） ・中から高へのつながりを意識した楽器演奏（中） ・校内人材の活用（小：歌唱　中：太鼓） ・本物に触れる機会（高：和楽器、小、高：コンサート） ・学部合同音楽会（高） ・他学部での歌唱披露（高）	○授業を見合う会を設けることで他学部の児童生徒の様子を知る良い機会となった。 ○他教科や合わせた指導と関連付けた指導をすることで、音楽科以外の学習の広がりにつながった。 ▲時数と学習指導要領の内容とのバランス。 ▲学部内での「つながり」が弱い。 ▲年間指導計画を今後の指導や指導内容の検討に生かせていない。	・年間指導計画の様式の改訂 （項目等、学部の実情に応じ） ・校内外の人材活用の継続 ・音楽免許保有者の他学部での弾力的な活用
職業･家庭科 ＷＧ	・授業研究会　３回実施 （中：全校　小、高：ＷＧ） ・全学部：児童生徒が学びをつなげる授業づくりのための支援の共通理解・実践 ・中学部学習指導内容参考一覧の活用と検討 ・中学部「職業・家庭科」の新設に向けた検討 ・高等部：学習シートの活用と蓄積 ・未来へのスケッチの活用方法の共通理解 ・小学部：未来へのスケッチの様式の検討と、効果的な活用方法の検討 ・令和４年度　中学部学習内容参考一覧の作成と検討	○小学部：職業・家庭科につながる学習内容や系統性、児童の姿の確認。 ○中学部「職業・家庭科」新設を意識したことにより、学習内容や指導が具体的になった。 ○中学部学習内容参考一覧を他学部の視点から検討できた。 ○職員間での学びのつながりの意識付け。 ▲各学部：学びの積み重ねが見える学習履歴の方法の再検討。教師間の共通理解。 ▲未来へのスケッチにおける小学部、中学部、高等部への学びのつながりの検討。	・【中】「職業・家庭科」の新設 （週２時間） ・未来へのスケッチの個人ファイル化（小学部から高等部卒業まで学びの積み重ねやつながりを児童生徒が意識して取り組むために） ・【小】未来へのスケッチの様式の改訂
保健体育科 ＷＧ	・授業研究会　２回実施 （高：全校　小：ＷＧ） ・学びの積み重ねが見える学習履歴の実践（ワークシート・段階表の活用→自己評価の積み重ね、教師側の記録） ・体力テストの実施と結果の分析、体力向上・運動習慣を意識した授業づくりと実践 ・集団行動、ラジオ体操の共通理解と学部に応じた実践 ・校内・地域資源（人材）の活用 ・３年間を見据えた年間指導計画の作成	○体力テストの結果から、意識させたい動きを授業や体トレに反映。運動機能や意欲の向上。体トレで毎日継続することでさらに成果があった。 ○高等部の集団行動をＷＧ全職員で共通理解。高の動きに準じて小中も実践。 ○小の授業に中の専科の職員が入ったことで効果があった。 ○武道の実施。 ▲体力テストの内容や時期の検討。 ▲全校授業研究会（授業の検討の仕方…▲学部、○ＷＧ）	・【高】体トレ（日指）→保健体育科の扱いに（学習指導要領に沿った領域・内容の実施） ・３年間を見据えた学習内容の検討 ・保体免許保有者、校内資源（人材）の他学部での活用

(8) 授業づくりに関するアンケートⅠ・Ⅱの実施

・研究の成果と課題を幅広く、かつ分析的に見取ることができるように、教職員に対して授業づくりに関するアンケートⅠ（１回目：５月）・Ⅱ（２回目：12 月）を実施した（図５）。それぞれの項目の評価基準は、「よくしている」「よくできている」（４点）、「ときどきしている」「ときどきできている」（３点）、「あまりしていない」「あまりできていない」（２点）、「ほとんどしていない」「ほとんどできていない」（１点）とし、いずれかの選択で回答を求め、結果を数値化した。アンケートの結果ⅠとⅡを各ＷＧ（一部、各学部）、全体、全体の増減に分けて表７に示した。またアンケートⅡでは、カテゴリーごとに自由記述の欄を設け、その結果については表８に示した。

⇒２回目の評価が高い平均値（3.30 ポイント以上）になったのは、「①学びの履歴、興味・関心など、子どもの実態を把握している」「②単元（題材）で目指す子どもの姿を明らかにしている」「③教師は、各教科の指導内容に見通しをもっている」「⑧「めあて」と「振り返り」の整合性を意識した授業をしている」「⑨教師は、児童生徒が学びをつなぐための支援を工夫している」の５項目であった。（昨年度、全 17 項目中１項目）

⇒１回目に比べ２回目の平均値が大幅（0.30 ポイント以上）な伸びになったのは、「④児童生徒は、各教科の学習内容に見通しをもっている」「⑨教師は、児童生徒が学びをつなぐための支援を工夫している」「⑪児童生徒は、他教科に学びをつなげている」「⑫児童生徒は、家庭生活や寄宿舎生活に学びをつなげている」「⑬未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）を使って児童生徒とねがいやがんばりたいことを共有している」「⑭未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）を使って児童生徒とがんばりを評価している」の６項目あった。

⇒２回目の評価が低い平均値（3.00 ポイント未満）になったのは、「⑫児童生徒は、家庭生活や寄宿舎生活に学びをつなげている」「⑬未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）を使って児童生徒とねがいやがんばりたいことを共有している」「⑭未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）を使って児童生徒とがんばりを評価している」「⑮日頃から教育課程の編成を意識している」の４項目あった。

⇒２回目の平均値で各ＷＧや各学部間で大幅（0.50 ポイント以上）な差になった項目は、「⑬未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）を使って児童生徒とねがいやがんばりたいことを共有している」「⑭未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）を使って児童生徒とがんばりを評価している」の２項目であった。

当てはまるものに○をしてください。
なお、ご自身の所属するＷＧの研究対象の授業（音楽科、保健体育科、職業・家庭科）を想定しながら、各学部の授業の現状を評価してください。

音楽科ＷＧ			保健体育科ＷＧ		職業・家庭科ＷＧ	
小学部	中学部	高等部	２０代	３０代	４０代	５０代以上

＜評価＞4：よくしている　3：ときどきしている　2：あまりしていない　1：ほとんどしていない
（よくできている　ときどきできている　あまりできていない　ほとんどできていない）

実態把握	1	学びの履歴、興味・関心など、子どもの実態を把握している	4　3　2　1
	2	単元（題材）で目指す子どもの姿を明らかにしている	4　3　2　1
	＜自由記述欄＞		
	3	教師は、各教科の指導内容に見通しをもっている	4　3　2　1
	4	児童生徒は、各教科の学習内容に見通しをもっている	4　3　2　1
	5	年間指導計画を適宜、見直しながら授業づくりをしている	4　3　2　1

＜図５＞授業づくりに関するアンケート

＜表７＞アンケートⅠ・Ⅱ結果

カテゴリー	項　目	音楽WG	職家WG	保体WG	全体 平均値	全体 増減
実態把握	①学びの履歴、興味・関心など、子どもの実態を把握している	3.35	3.00	3.40	3.27	＋0.07
		3.10	3.48	3.43	3.34	
	②単元（題材）で目指す子どもの姿を明らかにしている	3.30	3.00	3.20	3.16	＋0.17
		3.25	3.35	3.38	3.33	
授業づくり・授業改善	③教師は、各教科等の指導内容に見通しをもっている	3.15	3.06	3.35	3.18	＋0.18
		3.20	3.48	3.38	3.36	
	④児童生徒は、各教科等の学習内容に見通しをもっている	2.85	2.61	2.90	2.79	＋0.34
		3.10	3.09	3.19	3.13	
	⑤年間指導計画を適宜、見直しながら授業づくりをしている	3.15	2.83	3.25	3.10	＋0.13
		3.25	3.17	3.29	3.23	
	⑥発問や板書を意識して授業づくりをしている	2.90	3.11	3.25	3.10	＋0.13
		3.15	3.43	3.10	3.23	
	⑦「めあて」の提示の仕方を工夫している	3.10	2.83	3.30	3.10	＋0.13
		2.90	3.48	3.29	3.23	
	⑧「めあて」と「振り返り」の整合性を意識した授業をしている	3.00	3.17	3.20	3.13	＋0.17
		3.30	3.43	3.14	3.30	
	⑨教師は、児童生徒が学びをつなぐための支援を工夫している	2.90	2.89	3.25	2.98	＋0.35
		3.20	3.35	3.43	3.33	
	⑩児童生徒は、学んだことを次の学習に生かしている	3.05	2.83	3.15	3.02	＋0.20
		3.15	3.09	3.43	3.22	
	⑪児童生徒は、他教科に学びをつなげている	2.75	2.61	2.70	2.69	＋0.33
		2.75	3.13	3.14	3.02	
	⑫児童生徒は、家庭生活や寄宿舎生活に学びをつなげている	2.45	2.50	2.60	2.53	＋0.39
		2.70	3.00	3.05	2.92	
その他	⑬未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）を使って児童生徒とねがいやがんばりたいことを共有している	**小学部**	**中学部**	**高等部**	**全体平均**	**全体増減**
		2.48	2.56	2.74	2.60	＋0.31
		2.29	3.00	3.39	2.91	
	⑭未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）を使って児童生徒とがんばりを評価している	2.19	2.50	2.57	2.42	＋0.47
		2.43	2.90	3.30	2.89	
	⑮日頃から教育課程の編成を意識している	2.67	3.00	2.61	2.74	＋0.21
		2.90	2.90	3.04	2.95	

※上段は１回目（５月）平均値、下段は２回目（12 月）平均値の結果
５月　音楽科WG：２０名、職業・家庭科WG：２２名、保健体育科WG：２０名
12 月　音楽科WG：２０名、職業・家庭科WG：２３名、保健体育科WG：２１名
※⑫、⑬、⑭の項目のみ、各学部で集計した平均値の結果
５月　小学部：２１人、中学部：１８人、高等部：２３人
12 月　小学部：２１人、中学部：２０人、高等部：２３人
※赤枠：3.30 以上、0.30 以上の伸び　青枠：3.00 未満（2 回目）　黄枠：0.50 以上の差

＜表８＞アンケートⅡ 自由記述 結果　　※○成果　▲課題　☆提案

WG	学部	内容
音楽WG	小	【授業づくり・授業改善】 ▲他教科や家庭生活への学びのつながりについては、評価できる場面が少なく低くなった。
	中	【実態把握】 ▲他学部の教師がＴ１だと、子どもの実態把握が難しい。また、打ち合わせもなかなか行うことができないため、ＴＴ間での情報共有も難しい。 【授業づくり・授業改善】 ○「学びをつなぐ」は教師、生徒ともに少しずつ意識できるようになってきている。

		継続できると良い。 ▲TT 間の情報共有が必要
	高	なし
職家 ＷＧ	小	**【授業づくり・授業改善】** ▲10、12：これから期待したい部分と、家庭との協力が難しく学びがつながらない可能性がある。 ☆12：連絡帳だけでは分からない部分もあり、今後面談等で把握していきたい。
	中	なし
	高	**【実態把握】** ○年計→デザインシート→略案を作成することで教えやすい。 ○学習指導要領の内容の押さえが、生徒の実態把握にもつながっていると感じる。 ☆生徒たちからのつぶやき、日常の中で興味のあることに心を向けて、生徒主導になれる授業づくりを工夫していく。 **【授業づくり・授業改善】** ○Ⅱ期現場実習で路線バスが遅れているときに、すぐに学校に電話できた。→Ⅰ期現場実習の他生徒のエピソードでどんな対応ができるか考え、実践につなげた。 ○生徒が学んだことを次の学習や他の教科、教育課程等に学びをつなげることができてきた。また、そのための準備を教師が意識して行えるようになった。 ○寄宿舎を使っての掃除、洗濯、整理収納の学習（家庭科）に参加できた。 ☆年間指導計画の見直しや軌道修正などさらに行って、担当間で共有したい。
保体 ＷＧ	小	**【実態把握】** ○ＴＴや学部職員同士で情報共有を密にすることを心掛けている。 **【授業づくり・授業改善】** ○前時の振り返りや教師の言葉掛けを受けて、学んだことを実践しようとする姿が出てきたと思う。 ▲児童にとって分かりやすいめあてになっているか、児童の思考の流れを意識した学習活動を展開できているかが課題である。
	中	**【実態把握】** ○運動能力ごとのグループに分けるなど、工夫している。 **【授業づくり・授業改善】** ○板書やプリントによって継続性をもたせているが、なかなかつながらない生徒（場面）が見られる。
	高	**【授業づくり・授業改善】** ○体育の授業で行った種目について、家で YouTube などを活用して運動している生徒がいる。

【その他】（カテゴリー）

小	▲13：願いや頑張りたいことを読み取ろうとしているが、判断が難しい児童もいる。 ▲未来へのスケッチを掲示したのみで活用ができていない。児童との目標の立て方や、保護者と共通理解を図ることについて検討が必要である。
中	▲未来へのスケッチについては、授業者と担任との情報共有が必要である。 ☆各教科等と合わせた指導とのつながりを見直して、つながりのある教育課程になるようにしていきたい。
高	○授業研等を通して「他学部をよく知る」「知る努力をする」ことがとても大事だと感じた。 ○高等部や中学部では、未来へのスケッチの目標の共有と評価が十分できている。 ○研究主題の中に「教育課程の編成」という言葉があるということで多く先生方の意識付けにつながったと感じた。 ▲今後は、授業間の引き継ぎや蓄積について検討する必要がある。 ☆未来へのスケッチを使って振り返りの項目を挙げて毎日取り組んでいるが、担任だけでなく児童自身の見直しの機会を作っていきたい。 ☆保護者に配付して共有したが、これからさらに充実させたい。 ☆他教科とのつながり、関連をもう少し意識しながら進めていくようにしたい。

7　まとめ

(1) 教科ＷＧを柱とした研究の推進の効果と今後の課題

教科ＷＧを柱として研究を推進したことで、各教科の免許保有者や学部を越えた多面的な視点からアドバイスをもらえたなどの成果が挙げられた。また、各学部を知ることができ、系統的な指導につながったという声も多くあった。しかし、教科ＷＧ、学部ＷＧ、学部研究会と様々な研究会があり、煩雑で見通しがもてなかったという課題が挙がった。体制面については、次年度に向けての課題の１つである。

アンケート結果Ⅰ・Ⅱの全体を比較してすべての項目の数値が上昇しているこのことからも、「児童生徒が学びをつなぐ」ために全校で研究に取り組んだことは一定の効果があったと推察される。特に、項目の４、９、11、12 は、0.3 ポイント以上の数値が増加したことから、次の学習や他教科、家庭生活等に学びを生かす児童生徒の姿が増えたことが分かる。また、項目３の各教科等の指導内容の見通し（教師）の２回目の平均値は 3.36 ポイントと一番高い数値であること、項目４の各教科等の学習内容の見通し（児童生徒）において１回目に比べ２回目の平均値が大幅に伸びたことから、教師が行った「学びをつなぐ」支援は、児童生徒と教師の様々な「見通し」につながり、児童生徒の「何を学ぶか」を明確にしたと考える。このことから、「見通し」は、児童生徒の学習意欲の向上と教師の指導の充実につながることが推察されました。一方で、児童生徒の学びを生かす、つなげる姿はまだまだ十分な状況とは言えないことがアンケート結果の数値から推察される。さらには、キャリア・パスポートに関するアンケート結果と学部の数値の差、自由記述からも、今後は全校での活用の充実と、小学部を中心とした目標と評価の共有が課題として挙げられる。今後は、教師と児童生徒のさらなる「見通し」をもたせるしかけ（様々な工夫）が求められる。

(2) 学習指導要領の着実な実施に向けた学習内容の押さえ

今年度は、３つの各教科を柱とした教科ＷＧを設定して、研究主題に沿った研究を推進してきた。その中で、次年度（２年次）に向けて以下の提言が示された（各教科ＷＧの研究報告の統括）。

音楽科ＷＧでは、「各学部の系統性を図る学習内容の検討」と「校内外の人材を効果的に生かす工夫の検討」が挙げられた。職業・家庭科ＷＧでは、「中学部職業・家庭科の実践と検証」と「学部間の学びのつながりの検討」が挙げられた。保健体育科ＷＧでは、「運動習慣や生涯学習へ学びをつなげる学習内容の工夫」と「校内・地域資源（人材）の活用の充実」が挙げられた。このことからも「児童生徒が学びをつなぐ」ためには、学習指導要領を根拠にしながら、本校の児童生徒の実態あった指導内容を系統立てていくことが必要である。今後は、児童生徒が「何を学ぶか」を明確にしながら、児童生徒が「何が身に付いたか」という学びの履歴を積み重ねていく必要があると考える。

(3) 児童生徒が学びをつなぐための２つの視点の活用

本研究を通しては、２つの視点が効果的であると考える。それは、俯瞰的な視点と仰望的な視点である。「仰望」とは、「仰ぎ望むこと」と広辞苑で記されている。今年度の第３回全校授業研究会での指導助言者、秋田大学の前原和明准教授からは、仮説検証型（トップダウン）の考え方と仮説生成型（ボトムアップ）の考え方について示された。また、昨年度の小学部国語科の第１回全校授業研究会での指導助言者、由利本荘市教育員会の大庭珠枝指導主事（現東由利中学校教頭）は、物語を読むときに、「鳥の目」と「虫の目」で解釈していくという考え方をお話された。さらに、「令和の日本型学校教育の構築を目指して」の答申では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」がキーワードとして示されている。

これらの共通する点は、対極にある２つの視点を活用していることである。今年度の研究の主題である「児童生徒が学びをつなぐ」ためには、計画や目標という俯瞰的な視点と、児童生徒の思いや願いという仰望的な視点が大切であることが分かった。また、学習指導要領という根拠となるものと、現在の児童生徒の実態や学習の履修状況といった現状についても大切な要件であった。次年度は、この２つの視点を効果的に取り入れることで、「学びをつなぐ」状況づくりにつなげていきたいと考えている。

８　教育課程編成に向けての提言

学習指導要領の着実な実施に向けた年間指導計画の内容と活用の検討

現在の使用している年間指導計画の様式は、学習指導要領とのつながりが明確に示されておらず、各担任や各担当の裁量で指導する内容が決定されることが散見される。児童生徒が学びをつなぐために、各学部内で学びをつないで行くことができ、次年度に活用できる内容に変える必要がある。そのことで、年間指導計画をベースとして、指導の系統性を図っていくことや教科等横断的な視点を取り入れていくことができると考える。年間指導計画の内容と活用を検討していくことで、今年度の研究の成果として挙げられた児童生徒と教師の様々な「見通し」につながるとともに、児童生徒の「何を学ぶか」を明確にし、児童生徒の学習意欲の向上と教師の指導の充実につながることを期待している。

学部間のつながりを意識した弾力的な校内職員の配置と活用

各教科ＷＧの成果として、校内職員の活用による様々な効果が挙げられている。特に、体育や音楽の授業を中心として他学部の職員を活用する場面が増えた。そのことによって、児童生徒は専門的な指導を受ける機会が増えた。さらには、教師にとって他学部の指導の実状を知ったり、児童生徒のことについて学部を越えて他学部の教師と話したりすることができるようになった。

学校運営協議会での人材ボランティア等の外部専門家の支援を継続して活用するとともに、さらに弾力的な校内職員の配置と活用を進めていくことで、学部間のつながりを意識し、全校の指導の充実につながると考える。

児童生徒と教師の見通しを高める計画、目標、評価の共有

昨年度の研究では、「個別の指導計画の目標・評価を生徒と一緒に共有している」というアンケートの設問の平均値が低い結果となった。今年度は、キャリア・パスポートについて「児童生徒と願いや目標、評価の共有」の項目は、まだまだ十分な状況ではないという結果となった。

キャリア・パスポートは、「児童生徒が，小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について，特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として，各教科等と往還し，自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら，自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのことである。」と示されている。また、児童生徒が、「生涯にわたる学習とのつながりを見通す」ためにも大切なものであると学習指導要領の前文に示されている。そういった目的からも本校にとって今後より必要な事項であると感じている。今年度の研究の成果から、「児童生徒の学びをつなぐ」ためには、児童生徒と教師がともに見通しをもち、児童生徒の願いや思いという視点と、教師と生徒が目標や評価，計画を共有するという視点が大切になると考える。今後は、指導計画立案の段階から長期的スパンで生徒の学びたいことやこれから学ぶこと，学んだことや課題を生徒と共有していく授業の構築が必要であろう。

＜資料１＞研究計画

月	全体としての流れ	具体的な取組		
		全校	教科WG・学部WG・学部研	その他
4月	○全体の研究主題、研究内容及び方法の検討、共通理解 ○WG、学部の研究内容、方法の検討 ○児童生徒一人一人の目指す姿の明確化（個別の支援計画） ○単元、題材計画の検討 ⇒授業デザインミーティングの実施	□全校研①（４月２０日） ・全体研究の共通理解	□学部研①（４月２７日） ・学部における研究対象教科の実態把握と課題の確認	□拡大研①（４月１３日） ・研究内容・方法の検討
		□授業デザインミーティングの実施　～５月末 ⇒ ①授業者間、②関係者間での検討（授業アドバイザー、教科ワーキンググループメンバー含む）		
5月	○全校、教科WG、各学部、寄宿舎の研究内容及び方法の共通理解 ○授業実践及び評価、改善	□全校研②（５月１０日） ・各WG、各学部、寄宿舎の取組の共通理解 ・学習指導案の様式の共通理解	□教科WG①（５月１８日） ・各WGにおける研究のゴールの設定と計画、内容・方法の確認	□クォーター研修会の実施（月１回程度）
6月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施		□学部WG①（６月２２日） ・学部WGの実践	
7月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施 ○単元構成や支援の評価、見直し ○児童生徒の変容を検証、評価、目標の見直し	□授業デザインミーティングの実施:評価、改善 ～８月末	□教科WG②（７月６日） ・研究対象の授業の授業実践、評価、改善 □学部研②（７月２７日） ・WGの成果の共有と評価	研究成果配信 １次案内 配付 ○全校授業研究会（年３回） 小：　７月１９日（音楽） 中：１１月１５日（生単） 高：　９月１３日（保体） ○WG授業研究会 小：　９月　６日（生単） １１月１７日（保体） 中：１１月１０日（音楽） 高：　９月２６日（職・家）
8月	○前期の教科と後期に向けた単元構成、支援の検討、共通理解 ○学級及び学部内で児童生徒の目標の共通理解		□教科WG③（８月２４日） ・児童生徒の変容の検証 ・目標に対する評価、改善・後期の研究、単元計画や教師の支援の共通理解	
9月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施		□学部WG②（９月１４日） ・学部WGの評価と改善点の反映	研究授業配信 案内 配付
10月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施		□教科WG④（１０月１２日） ・授業実践、評価、改善 ・各学部の一貫性の検討	○年次研修 ・対象者と調整 ○他校（特別支援学校、由利本荘・にかほ地域の小・中学校）の授業研究会、公開研究協議会等への参加
11月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施 ○今年度の取組の成果と課題、児童生徒の変容の検証		□学部研③（１１月２２日） ・授業実践、評価、改善 ・WGの情報共有 ・児童生徒の変容の検証	
12月	○今年度の成果と課題、児童生徒の変容の明確化 「研究ゆり」の執筆	教育課程検討委員会 キャリア推進委員会 との連携	□教科WG⑤（１２月７日） ・成果と課題、児童生徒の変容の検証 □学部WG③（１２月２１日） ・研究のまとめ	研究授業配信 ※オンデマンド配信 予定（１２月９日）～ 研究成果配信 ２次案内 配付
1月	○今年度の成果と課題の共通理解 ○次年度の方向性の具体化		□教科WG⑥（１月１２日） ・研究のまとめ □学部研④（１月１８日） ・研究のまとめの共通理解 ・今年度の成果と課題、児童生徒の変容の共通理解	□拡大研①（１月２５日） ・各学部、寄宿舎の成果と課題の共通理解 ・研究成果の配信に向けて
2月	○今年度の成果と課題の共通理解 ○次年度の方向性の具体化	□全校研③（２月６日）	□学部研⑤（２月２１日） ・教育課程の編成に向けての検討 ・次年度の取組の検討	研究成果配信 ※オンデマンド配信 予定（２月１３日）～
3月	○次年度の方向性の共通理解	□全校研④（３月３日） ・教科WG、各学部、寄宿舎の成果と課題の共通理解 ・次年度の取組の検討 □出張報告会（同日）	□学部研⑥（３月１５日） ・教育課程の編成に向けての検討 ・次年度の取組の共通理解	

＜参考・引用文献＞

・秋田県立ゆり支援学校　研究紀要「研究ゆり」第 23 号　令和４年３月
・「キャリア・パスポート」に関するＱ＆Ａについて　初等中等教育局児童生徒課　令和４年３月
・特別支援学校幼稚部教育要領　小学部・中学部学習指導要領　文部科学省　平成 29 年４月
・特別支援学校高等部学習指導要領　文部科学省　平成 31 年２月
・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　総則等編（幼稚部・小学部・中学部）文部科学省　平成 30 年３月
・特別支援学校学習指導要領解説　各教科等編（小学部・中学部）文部科学省　平成 30 年３月
・特別支援学校学習指導要領解説　知的障害者各教科等編（高等部）文部科学省　平成 31 年２月
・「特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料」文部科学省　令和２年４月
・「特別支援学校高等部学習評価参考資料」文部科学省　令和４年３月
・「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」中央教育審議会　令和３年１月
・「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」中央教育審議会　平成 28 年 12 月

音楽科ＷＧ

研究主題

「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成（１年次／２年計画）

１　児童生徒の実態

小学部は、手遊びや身体表現など身体を使った表現遊びや歌を歌ったり、聴いたりすることが好きな児童が多いが、好きなジャンルに偏りがあり、興味・関心が限られている児童もいる。

中学部は、音楽好きな生徒が多いが、歌唱や楽器演奏など知識や経験が不足しており、既習の学習内容に偏りが見られる。また、合奏などの演奏では、全員の音を聞いて「合わせる」等、技能面での課題も見られる。

高等部は、歌唱や鑑賞、器楽など音楽全般で好きな生徒が多い。しかし、コロナ禍により歌唱が十分にできず、器楽も限られた楽器の演奏に限られてしまうなど内容に偏りが見られる。

どの学部においても歌唱や器楽、鑑賞など好みの違いはあるものの、音楽が好きな児童生徒が多く、経験することでさらに好きになったり、音楽的な技能が身に付いたりしている。一方で、好きなジャンルに偏りがあったり、興味・関心が限られていたりするなどの課題がある。

２　教育課程上の現状と課題

音楽科の授業は、小学部は１～３年生の低学年、４～６年生の高学年の２グループで週２単位時間相当、中学部は、１年生、２・３年生の２グループで週１単位時間相当、高等部は各学年の３グループで隔週２単位時間相当、実施している。

小学部は、複数学年での学習グループの編成となっており、実態や生活年齢などに違いがある中で、実態や学年の段階に合った指導内容であるか、適切な指導体制であるか、学習内容が学年をまたいで重複していないかなどを検討することが課題となっている。

中学部は、学習グループ間のつながりや学習内容の系統性、整理が課題となっており、各学年での学習が積み重ねられるように､学習履歴を基にした系統的な指導計画の作成が課題となっている。

高等部においては、卒業後の豊かな生活の一つになる音楽ではあるが、生徒の興味・関心と学習指導要領に沿った指導との兼ね合いを考えた指導計画の作成が課題として上げられている。

また、どの学部にも共通して時数が少ないことが課題として上げられ、音楽科だけでなく、日常生活や他教科等とのつながりを意識した授業づくりをしていくことが求められている。

児童生徒の実態と、教育課程上の現状と課題から、今年度（１年次）の目指すゴールを設定した。

３　今年度（１年次）の研究の目指すゴール

(1) 学習指導要領に沿った授業づくりの検討
(2) 各学部における音楽科と各教科等を合わせた指導とのつながりの検討
(3) 各学部、学年の段階に合った学習内容の整理

４　主となる研究対象の各教科等

小・中学部、高等部：音楽科

５　内容と方法

(1) 学習指導要領に沿った授業づくりの検討

①実態把握（４～６月）

・「音楽」に関する児童生徒の実態

「音楽科」に関する授業の実態

～指導内容のチェック【熊本大学附属特別支援学校「指導内容表」】をツールとして活用

②授業実践

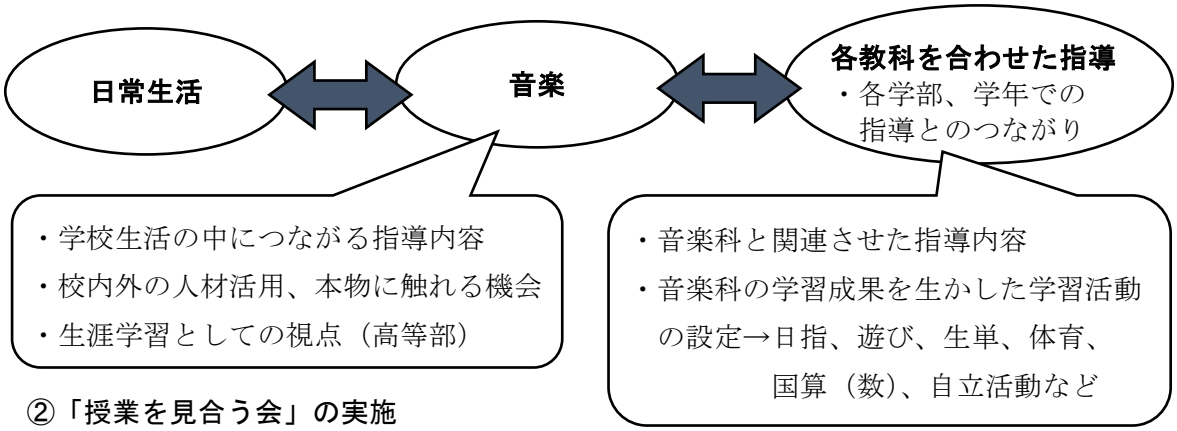
・授業デザインミーティングⅠ（５月）、年間指導計画の作成（５～６月）

・授業研究会

（全校授業研究会：小学部４～６年／７月、音楽科WG授業研究会中学部２・３年／11 月）

(2) 各学部における音楽科と各教科等を合わせた指導とのつながりの検討

①音楽科と日常生活や他教科等との関連の検討



②「授業を見合う会」の実施

・音楽科の授業や音楽科に関連した学校生活の様子などについてのビデオ参観、情報交換

(3) 各学部、学年の段階に合った学習内容の整理

①授業デザインミーティングⅡ（８月）、年間指導計画の評価、見直し

②年間指導計画の様式検討

・指導内容の整理、小学校の年間指導計画や小学校、特別支援学校の教科書を参考にした様式の検討

６　研究の実際

(1) 学習指導要領に沿った授業づくりの検討

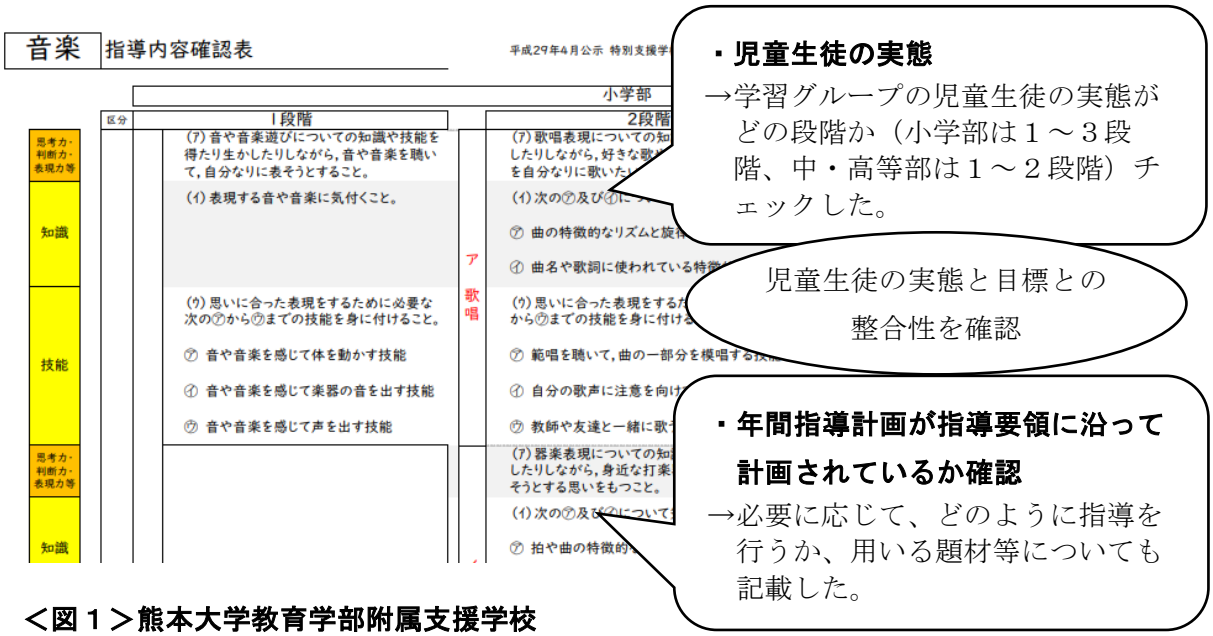
①音楽に関する実態把握

児童生徒の実態

「音楽科」の児童生徒の実態や課題等について情報交換を行い、共通理解を図った。

指導の実態（学習内容、指導体制など）

「音楽科」に関する教師側の授業の実態や課題について情報共有を行った。また、指導内容が学習指導要領の「内容」に沿って計画されているか、【熊本大学教育学部附属支援学校「指導内容確認表」2019】と年間指導計画を照らし合わせてチェックした（図１）。



＜図１＞熊本大学教育学部附属支援学校「指導内容確認表」2019

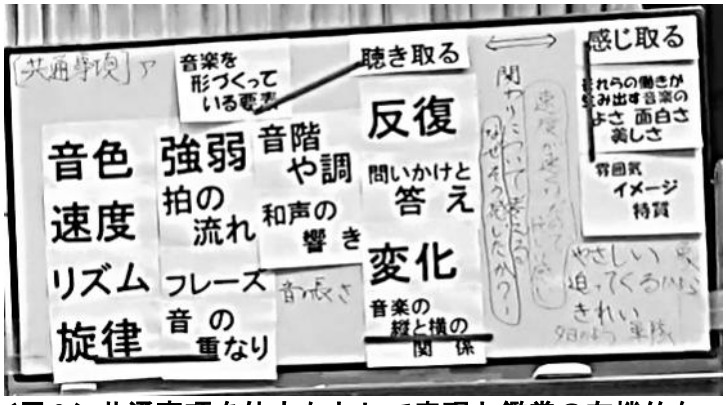
②授業実践

授業デザインミーティングⅠ（５月）、年間指導計画の作成

実態や目指す姿をもとに目標と年間の指導内容の検討を行った。また、実態や授業の実際についてより深めるため、いつでも授業を見合える体制を作った（授業を見合う会）。

授業研究会の実施

７月に全校授業研究会（小学部）、11 月に音楽科ＷＧ授業研究会を実施した。７月の全校授業研究会で「共通事項ア」を意識した授業づくり、「表現領域同士または、表現領域と鑑賞領域をつなぐ題材構成」が話題に上がり、11 月の授業研究会では、この２点について意識した授業づくりの検討を行った（図２）。

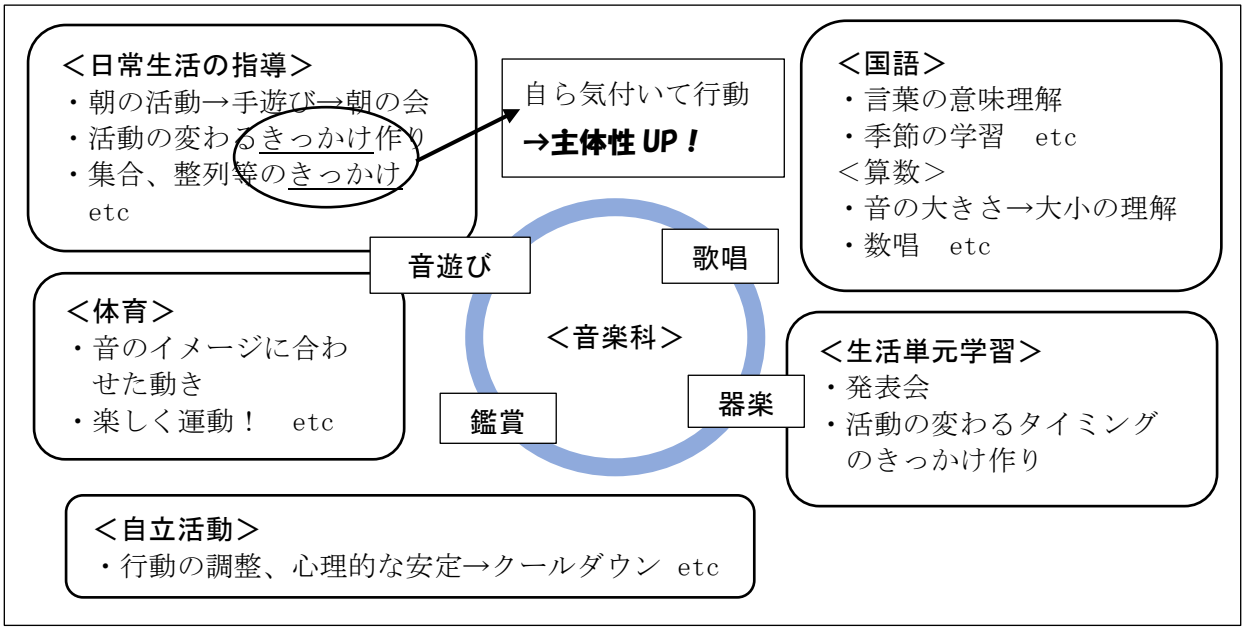


＜図２＞共通事項を仲立ちとして表現と鑑賞の有機的な関連を図った例（７月全校授業研究会、指導助言より）

(2) 各学部における音楽科と各教科等を合わせた指導のつながりの検討

①音楽科と各教科等との関連の検討

各学部で日常生活や他教科等とどのように関連付けて指導を行っていくか意見を出し合い、指導内容について検討した（図３）。

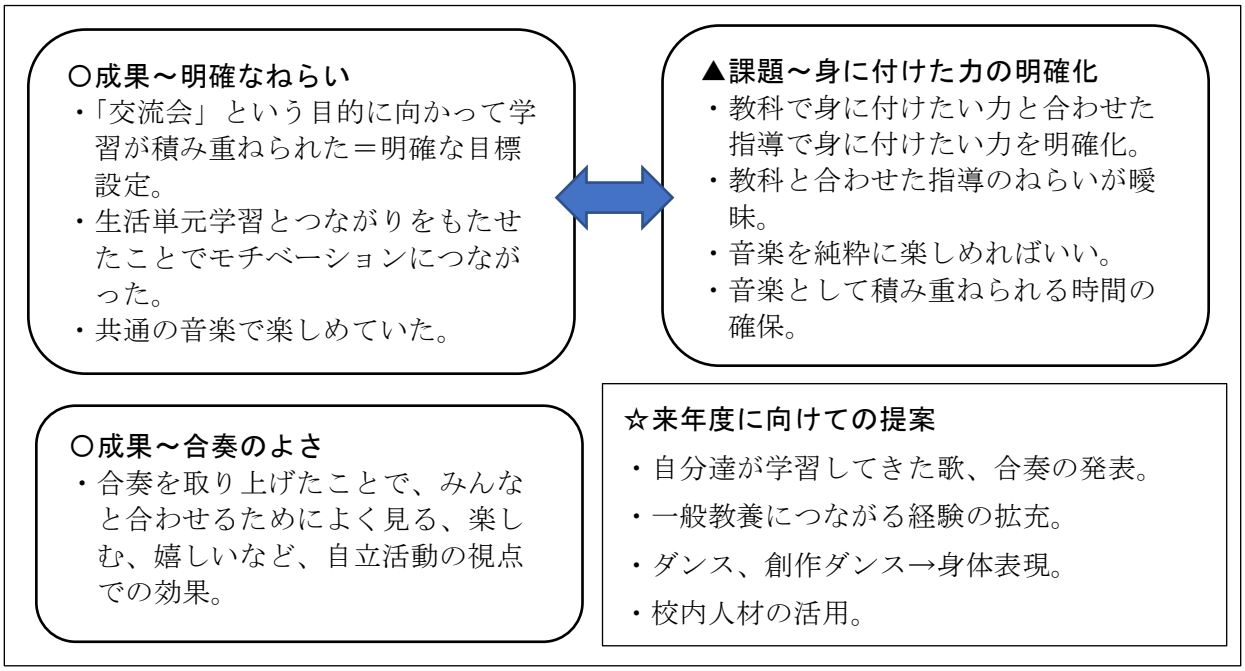


＜図３＞小学部低学年の音楽科と各教科等とをつなぐ検討例

②「授業を見合う会」の実施

各学部の音楽科の授業を見合う日を音楽科担当職員と調整し、自由に参観できるようにした。特に、研究授業対象の学部、グループの授業参観では、他学部や音楽科専門の教師のアドバイス等をすぐに授業に生かすことができ、授業改善に役立った。

高等部の授業実践を動画で視聴し「音楽科と合わせた指導とのつながり～効果的な指導方法～」についてグループ協議を行った（図４）。



＜図４＞高等部の「音楽科と合わせた指導とのつながり～効果的な指導方法～」の検討例

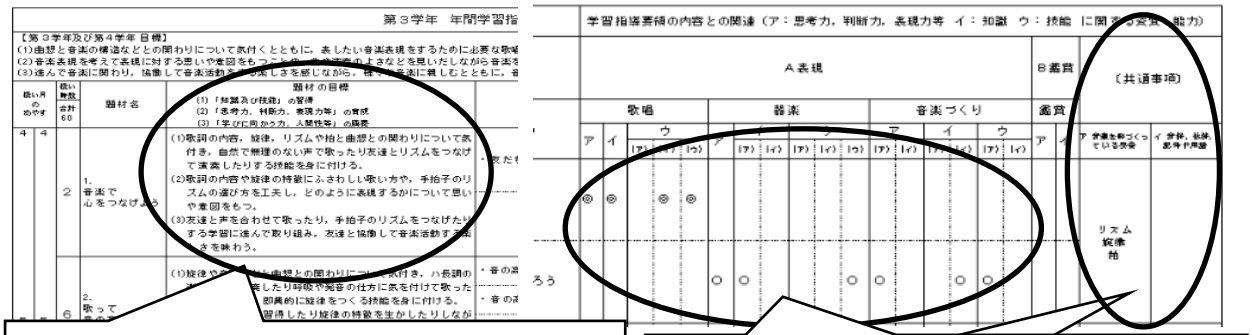
(3) 各学部、学年の段階に合った学習内容の整理

①授業デザインミーティングⅡ（８月）、年間指導計画の評価、見直し

小・中学部を主に前期からの児童生徒の変容について情報共有した。また、中学部の授業提示に向け、「表現と鑑賞との関連」を意識した題材構成を検討した。

②年間指導計画の様式検討

小学校の年間指導計画や小学校で使用している教科書、特別支援学校で使用している☆本の音楽の教科書を参考にして、年間指導計画後期分の見直しや様式の変更に向けて検討を行った（図５）。



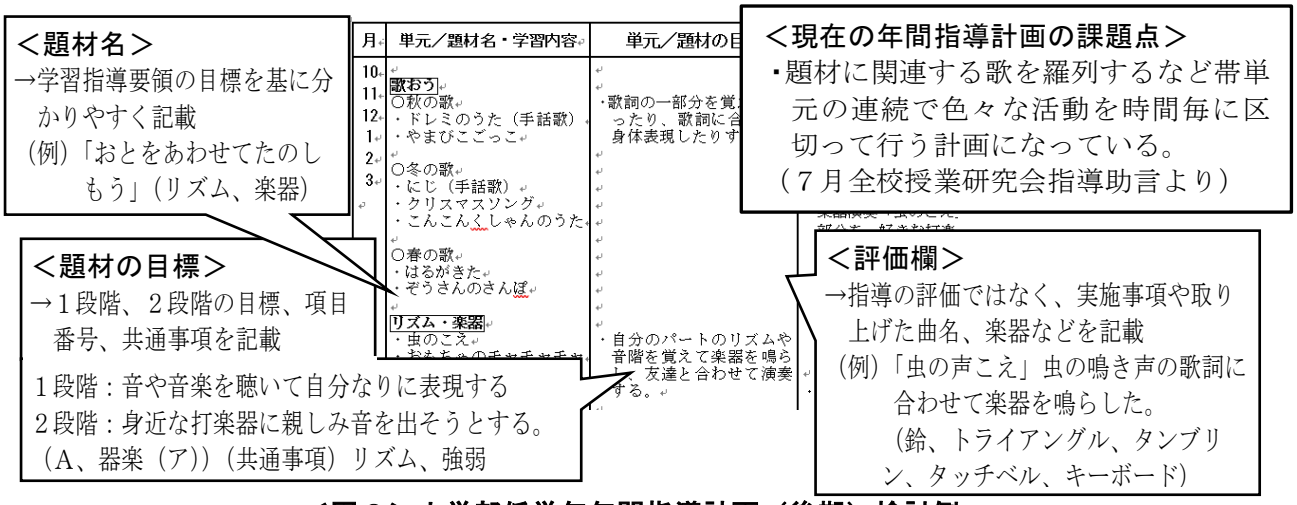
＜題材の目標、評価について＞
- 学習指導要領に示されている育成を目指す資質・能力（知識及び技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力・人間性等）の３つの柱の視点に基づき作成されている。
- 評価欄はなく、題材や使用した楽器等が記載されると学習内容の整理にもつながる。

＜学習指導要領の内容との関連＞
- 題材の目標が学習指導要領に示される内容のどの項目と関連しているかを明確に記載されており、分かりやすい。
- 各題材の中で「共通事項」を要として教材同士がつながり、往還しながら指導されるように配慮されている。

＜図５＞小学校第３学年の年間学習指導計画の例より

（引用元：「令和２年度用小学校音楽　年間学習指導要領作成資料」株式会社　教育芸術社より）

小学校の年間指導計画を参考にして、検討を進め、現在の年間指導計画にどう生かしていくのか検討を重ねた。学習指導要領の内容との関連の記載については、学習内容の整理にもつながり分かりやすいという意見がある一方で、実態差があるグループ編成で必ずしも、小学校のよう学習指導要領の内容に沿って順を追って指導できるかどうか難しさもあるのではないかという意見が出された（図６）。



＜図６＞小学部低学年年間指導計画（後期）検討例

【授業実践１】小学部　音楽科　高学年（４～６年生）合同　：　全校授業研究会対象授業

児童の実態（授業デザインシート、音楽科に関する実態把握より）	
・音や音楽に注意を向けて、音楽活動を楽しんでいる。 ・多様な音や音楽、表現の形態に関心をもち、音楽表現を楽しむために必要な身体表現、器楽、歌唱、音楽づくりにつながる技能を身に付けようとしている。 ・器楽の演奏に関して、視覚的な支援の他に、教師による動作的な支援が必要な児童がいる。	
目指す姿（授業デザインシートより）	**年間目標**（音楽科）
・曲想と音楽の構造との関わりから、音楽の特徴に気付く。 ・音楽表現を楽しむために必要な技能を、友だちや教師の動きを模倣しながら身に付ける。 ・曲や演奏のよさを知って、音や音楽を聴く。 ・思いや意図をもって、音楽表現をする。 ・進んで音や音楽に関わり、協働して音楽活動をする。	・音楽表現を楽しむために必要な身体表現、器楽、歌唱、音楽づくりの技能を友だちや教師の動きを模倣しながら身に付ける。 ・音楽表現の工夫や、曲や演奏のよさを知って、音や音楽を聴く。 ・進んで音や音楽に関わり、協働して音楽活動をする楽しさを味わう。

題材名	音の重なりを楽しもう　　主教材：「海」（作詞：林柳波、作曲：井上武士）	
題材の目標	・身近な打楽器の演奏や教師のピアノ演奏により、楽器の音色の違いに気付くとともに、海の大きさや広がりのイメージを音で表すために、響く音を鳴らしたり、友達や教師と一緒に音を重ね合わせたりして、器楽表現をする技能を身に付ける。【知識及び技能】 ・海の大きさや広がりのイメージを音で表すために、どのように楽器を鳴らしたらいいかを考えて音を出したり、身近な人の演奏を聴いたりして、音の重なりや音楽表現の変化などが生み出す面白さ、美しさを感じ取り、興味をもって音楽を聴く。【思考力、判断力、表現力等】 ・音の重なりや音楽表現の変化に興味をもち、友達や教師と一緒に身近な打楽器を演奏したり、音楽を聴いたりする学習に取り組み、様々な音や音楽に親しむ。【学びに向かう力、人間性】	
指導計画	①教材曲の演奏で使用する楽器を鳴らし、音色の違いを感じ取る。 ②海の大きさや広がりを表すには、楽器をどう鳴らしたらいいかを考えたり、実際に音を出したりする。 ③海の大きさや広がりを表現するために、音の出し方を工夫したり、楽器の音を重ね合わせたりして、教材曲を演奏する。	④教師によるピアノ演奏を聴き、同じ曲による音楽の変化を感じ取る。 ⑤ジャズの音楽様式に触れる。 ⑥学んだことを振り返りながら、まとめの演奏をして、音の重なり楽しんだり、好きな音を見付けたりする。

＜７月７日＞

教師の主な支援	児童の様子・エピソード
①　音楽の要素を骨組みとした授業構成 ・音クイズコーナー （音楽の要素：音色） ・楽器演奏 （音楽の要素：音の重なり）	・音クイズでは、身を乗り出すようにして音を聴いていた。また、楽器の音色の違いや音の長さ（余韻）の変化について感じ取ったことを、積極的に発表していた。 ・トーンチャイムの演奏で「〇〇さんと一緒」と口にしながら音を出すなど、音の重なりを意識している様子が見られた。 **〈音クイズコーナー〉** **〈楽器演奏〉**

② 広い海のイメージを膨らませる場の設定 ・海の映像の視聴 ・海（波）の様子の身体表現 ・「海」の歌唱 ・オーシャンドラムの音色の聴取と演奏	・両腕を前後左右に動かしたり、体体全体を揺らしたりして、イメージした情景を自由に表現している様子が見られた。 ・「海」の曲が気に入って、授業以外の場面でも、身体表現を交えながら口ずさんでいる児童が複数名いた。 〈イメージを体で表現〉

＜授業改善ポイント＞
・ＴＴの連携を一層強化し、児童にとっての学びが多面的で深まりのある場となるように、授業の構成を工夫する。
・「拍の流れ」や「長い音」をイメージしやすいように、ＩＣＴによる視覚的支援を工夫する。

＜７月 19 日＞

教師の主な支援	児童の様子・エピソード
① ＴＴの機能を生かした授業展開 ・身体活動、音クイズ、鑑賞コーナー等を各Ｔで分担する、変化のある授業展開 ・全員Ｔの合奏による模範演奏の提示（録画映像）	・授業場面の切り替わりを楽しみながら、全員が飽きずに、それぞれの活動に向かっていた。また、一人の児童に複数の教師が関わる機会が今まで以上に増えた。 ・「（模範演奏を）もう１回みたい。」と口にする児童がいるなど、演奏に対する興味・関心が高まった。 〈授業の各コーナーを教師が交代しながら担当〉
② 視覚的な支援の工夫と生演奏の提示 ・拍の流れをイメージしやすいプレゼンテーション画面 ・同じ音楽の要素を、表現領域と鑑賞領域で同時に取り扱う授業構成	・画面切り替えの設定を「フェード」から「回転」に変更したところ、拍の流れを感じて演奏していた。また、教師の合図に頼らない主体的な演奏にも近付くことができた。 ・ジャズアレンジの演奏を聴いた後、「長い音」を意識するようになった。また、ジャズ様式特有の「音の重なり」を楽しみながら生演奏に聴き入っていた。 〈拍の流れを示す画面〉 〈ピアノの生演奏〉

成果と課題（○成果　▲課題）

○音楽を形づくっている要素「音の重なり」に焦点を当てた題材構成により、児童が音の重なり合いの面白さを感じ取り、楽しんで演奏をすることができた。また、器楽と鑑賞の活動を関連付けた授業展開により、曲想の違いについて学びを深め、音楽に親しむことができた。
○楽曲の難易度や使用楽器を考慮して教材曲の編曲を行い、児童の特性に応じて多様な活動場面を設定したことが、実態差のある学習集団における活動の支援として効果的だった。また、教師による模範演奏を提示は、目指すところを明らかにする上で大変効果があった。
▲「音楽科における見方、考え方」は「共通事項ア」を意識して指導することが大切である。音楽を形作っている要素を仲立ちに表現領域同士、あるいは表現領域と鑑賞領域を有機的につなぐ題材計画の作成し、授業改善につなげたい。
▲児童生徒の学びをつなぐ教育課程の編成のために、めざすゴール、学習指導要領に沿った授業づくり、取り扱う教材の研究について、今後もチームで話し合いを継続していくとよい。

【授業実践２】中学部　音楽科　２・３年　：　音楽科ＷＧ授業研究会対象授業

生徒の実態	
本学習グループは、男 13 名、女７名、計 20 名で構成されている。全体的に周囲と合わせる経験が不足してはいるが、歌ったり、演奏したりすることが好きな生徒が多い。大きい音を苦手とする生徒もいるが、事前に伝えることで授業に参加できる。ほとんどの生徒が、意欲的に段ボール太鼓をたたいている。今は四分音符や八分音符を組み合わせたリズムを練習しており、速くなってしまうなど、周りの友達と合わせることが難しい生徒もいるが、テンポ、リズムともにほとんどの生徒が正しくたたける。	
目指す姿（授業デザインシートより）	**年間目標**（音楽科）
・友達の様子を見たり、音や声を聞いたりして、自分から歩み寄ったり、合わせたりする。 ・友達と相談したり、自分の意見を発表したりして問題解決する。 ・正しいリズムや強弱、音の違い、体全体を使った表現を楽しむ。	（１）様々な音楽に親しみ、歌唱や合奏などの音楽表現をするための技能を身に付ける。 （２）様々なジャンルの音楽があることを知り、それぞれの音楽のよさを感じながら鑑賞する。 （３）自分から音楽に関わることで様々な音楽活動の経験の幅を広げ、協働して音楽活動する楽しさを感じる。

題材名	太鼓を演奏しよう Part１～段ボール太鼓～		
題材の目標	（１）四分音符、八分音符、四分休符の名前や音価を覚える。【知識及び技能】 （２）四分音符、八分音符、四分休符で構成された短い簡単なリズムを正しく打つ。 【思考力、判断力、表現力等】 （３）リズム合奏を楽しみながら主体的・協働的に太鼓演奏をする。 【学びに向かう力、人間性等】		
指導計画	**時数**	**めあて**	**学習活動**
	１・２	①四分音符と八分音符の違いを知ろう	・昨年度の音符の名称と音価についての学習の振り返り ・段ボール太鼓作り
		②急がずにしっかり休もう！	・段ボール太鼓作り ・リズム打ち
	３・４	③音の違いを見付けて！	・段ボール太鼓でのリズムうち
		④おもしろい演奏は？	・学習した音符を自分たちで組み合わせて、簡単なリズム作成 ・リズム打ち
	５～８	⑤⑥左右のバチを使って打つ	・バチを左右交互に動かす
		⑦休符で休もう！	・休符をしっかり休む
		⑧みんなで合わせよう	・リズム合奏

＜７月＞

教師の主な支援	**生徒の様子・エピソード**
ワークシートの活用	・学習履歴が残るよう、ワークシートを活用した。前時の学習を自分のワークシートを見ながら振り返った。 ・ワークシートで学習した内容を思い出しながら自分たちで音符を組み合わせ、オリジナルのリズムを作り練習したことで、「正しく演奏したい」という思いをもつようになり、学習意欲の向上につながった。

題材名	太鼓を演奏しよう Part2
題材の目標	（１）太鼓を演奏する基本的な姿勢や腕の振り方が分かり、友達とタイミングを合わせて正しいリズムで打ったり、強弱を付けて打ち分けたりする。 【知識及び技能】 （２）リズム、拍、強弱や音の重なりに気付いたり、太鼓の音の重なりを感じ取ったりして、強弱に合わせた腕の振りを考えて表現する。 【思考力、判断力、表現力等】 （３）和太鼓独特の音色や演奏方法に興味をもち、友達との合奏を楽しみながら主体的・協働的に太鼓演奏をする。 【学びに向かう力、人間性等】

指導計画	時数	めあて	学習活動
	1	注目ポイントは？	・高等部３年生の和太鼓練習の見学での注目ポイントについて学ぶ
	2	違いはどんなところ？	・注目ポイントを踏まえて、高等部３年生の和太鼓練習の見学
	3	基本を覚えよう	・バチの持ち方、構え方、打ち方の実践。
	4	友達とタイミングをそろえるには？	・リズムごと、パートに分かれて練習。
	5	強弱を付けて演奏しよう	・腕の振り幅や打ち方の違い
	6	合奏しよう	・パート練習⇒全体合奏
	7	和太鼓を演奏しよう	・全体合奏⇒発表本番の動き練習

＜11 月＞

教師の主な支援	生徒の様子・エピソード
・校内資源の活用	・本校に和太鼓の指導ができる職員がいた。バチの持ち方や構え方、太鼓の打ち方など、基本についての指導を受けたり、実際に太鼓の音を聞いたりしたことで、学習意欲の向上につながった。
・ＩＣＴの活用（動画）	・練習の様子を動画で撮影し、振り返りに活用した。 ・動画で自分の姿を客観的に見ることで、「できたこと」や「むずかしかったこと」を自分なりに捉えられる生徒が増えた。
・振り返りシート	・「振り返りの視点」を提示し、付箋に簡単な文章で振り返る活動を繰り返した。提示された「振り返りの視点」に沿って考え「できたこと」だけではなく、「むずかしかったこと」や「次時の課題」に自分から気付き、短い文で表現できる生徒が増えた。

成果と課題（○成果　▲課題）

○音楽の表現領域（太鼓練習）と鑑賞領域（高等部の練習見学や太鼓の先生の模範演奏、動画での振り返り）を意識した題材設定や授業構成によって、生徒の具体的な目標設定や振り返り、高等部での学習や発表への期待感につながった。

○ＩＣＴ（動画）を活用し、即時評価したことで、できていると思っていたことにまだ課題があった等、自分の姿を客観的に捉られた。また、客観的に捉えた自分の姿を、付箋に簡単に書く活動を繰り返したことで、「できた」「難しかった」だけではなく「どこが・どんなふうに・どうだった」と具体的に書く振り返り文の書き方や、「振り返りの視点」を自分で考える生徒が増えた。

○付箋に一言程度に簡単にまとめ、振り返りシートに貼ることを繰り返したことで、生徒が書き方を覚え、回数を重ねるごとに短い時間で振り返られるようになった。

○振り返りシート一枚にまとめて貼り付けたことで、前時の振り返りや課題点が分かりやすかった。

○「振り返りの視点」を変えることで、他教科での学習でも取り入れられる。

▲実態によっては、選択肢を用意する等の振り返りが必要な生徒がいる。

▲中学部３年間を通して、系統性のある太鼓指導ができる指導計画の立案が必要である。

▲「共通事項ア」や系統性を意識した学習内容の教師間での共通理解や次年度へのつながりの検討。

【授業実践３】高等部　音楽科　１年

生徒の実態	
・音楽が好きな生徒が多く、特に歌唱、歌が好き。 ・それぞれの生徒がすきなジャンルの音楽があり日常的に聴いている。 ・鑑賞にも興味を示し、曲の感想を自分の言葉や表現で表す。	
目指す姿（授業デザインシートより）	
・思い切り歌い歌う楽しさを味わう。 ・長調と短調が分かり、曲想に合った伴奏や演奏をする。 ・一人一人の個性や良さを生かし合奏する。	
年間目標（音楽科）	**年間目標（生活単元学習）**
・口の開け方や表情、歌詞の表現等に留意して合唱をする。 ・メロディーやお互いの音をよく聴いて、伴奏や合奏をする。 ・様々音楽を鑑賞して曲や楽器に興味をもったり、日本の伝統音楽、作曲家や曲の背景等に関心を高めたりする。	・様々な人と関わりながら、社会生活に必要なルールやマナーを身に付ける。 ・自分の役割を意識し、考えや意見を伝えながら活動する。 ・地域や学校のために自分たちができることを考えたり、計画したり、実践したりする。

題材名	○音楽科：（歌唱・合奏）	○生活単元学習：（小学部１年との交流）
題材の目標	・強弱や盛り上がりを意識しお互いの歌声を聞きながら合唱する。 ・演奏する相手を考えて楽器や演奏を工夫し、お互いの音を聴きながら合奏する。	・交流の意義を考えたり、相手を意識したりして活動内容や計画を立案する。 ・交流相手を知り、よりよい交流のために必要な事柄について考えたり、意見を出し合ったりして活動する。
指導計画	小学部１年生の歌 ・歌詞に合わせた振り付け ・歌 ・合奏	小学部１年生との交流 ・自己紹介 ・小学部での見学、インタビュー ・交流会

＜実践：６月～９月＞

生徒の様子・エピソード	
＜身振りを付けて楽しく歌う＞ ＜お互いの音を聞いて合奏＞ 	・小学部１年の授業の様子を実際に参観したり、小１担任にインタビューをしたりする機会を設けた。小１の児童の実態を知り、「笑顔で明るい声で歌う」「身振りを付けて歌う」などのアイデアが生徒たちから出た。 ・歌唱練習では、校歌を歌い発声と同様にポイントを提示しながら練習をした。組や列、２～３人等少人数で発表し合ったことでより大きな声で歌う意識をもちながら人前で歌う経験を重ねた。 ・生徒それぞれが希望した楽器で練習を重ねたことで、一つにまとまった演奏となった。交流会で小１の友達に発表することが明確な目標になり、練習するべき細かい点にも気付き演奏のスキルアップにつながった。 ・交流当日は、会場準備、出迎えから司会進行まで生徒たちが主体となって行った。生徒一人一人が笑顔で明るい笑顔で歌うこと全員が意識した。小学部１年生の児童が喜ぶ様子を間近で見て、大きな達成感を得た交流会となった。

＜実践：11 月～12 月＞

題材名	○音楽科：季節を歌おう合奏しよう	○生活単元学習：(小学部１年との交流)
題材の目標	・賛美歌の意味や歴史を知り、曲調に合った歌い方を工夫する。 ・楽器の響きを感じながらクリスマスソングを合奏する。	・小学部に向けたクリスマスコンサートを企画する。 ・交流学習に必要な事柄や、準備を知り、場面や関わる人に応じた話し方やマナーなど学んだことを生かして交流する。
指導計画	Ｓilent　Night ・歌（英語の歌詞） ・合奏　　※学部合同発表会	小学部１年との交流 ・クリスマス音楽会に向けて ・クリスマス会の企画、運営、発表

生徒の様子・エピソード

＜司会、進行も自分たちで＞

＜一緒に歌おう！＞

＜新たな楽器に挑戦＞

＜11 月：準備、練習期間＞

・様々な学習を通しての音楽発表（ゆりフェス、道川分教室との交流など）を経験したことで、歌ったり、演奏したりすることを楽しめるようになってきた。

・「Ｓilent　Night」の歌唱では、英語で歌った。初めは英語での歌唱に戸惑う生徒もいたが、全体をリードする生徒の歌声が中心となり少しずつ音程が合い、声量も増していいった。

・「Ｓilent　Night」の合奏の楽器決めでは、前期の経験を生かし同じ楽器を選択し、友達に教えたり、新たな楽器にチャレンジし楽器に合った演奏の仕方を覚えたりする生徒が多かった。同じ楽器同士でタイミングを合わせたり教え合ったりする姿が増えた。

・１年生の児童が楽しめるように、クリスマスにちなんだ仮装やイラスト、装飾を準備し発表会に向けての企画や運営なども生徒が主体的に取り組んだ。

＜12 月：交流＞

・小学部交流の前に、小学部１年生の児童に届招待状やポスターを届けた。交流当日も会場の準備や児童の誘導なども個々の生徒が自分の得意なことを生かしながら積極的に行った。小学部１年生、高等部１年生が一緒に「にこにこげんき１年生」を歌った。

・「Ｓilent　Night」の歌唱と合奏の発表では２回目の交流ということもあり静かな雰囲気の中で聞き入っていた。

・生徒が準備した装飾やイラストにも目を向けたり、指差しをしたりしながらクリスマスの雰囲気を楽しんでいた。また、２回目の交流ということもあり、お互いリラックスした雰囲気で楽しめた。

来年度に向けて

・音楽科の授業のねらい（発表会）やゴール（「○○のために」）を明確にしたことで、生徒のモチベーションや活動への目的意識が高まった。来年度も合わせた指導とのつながりを大切にしながら、交流会での音楽発表などを継続していく。

・高２と合同歌唱を小学部集会で披露した経験がとても良かった。お互い発表し合うことに加え、合同で練習する、発表するという機会も生徒のみならず担当職員にとっても他学部を知ることができた。

7　まとめ

(1) 成果

児童生徒の興味・関心の広がり～校内外の人材活用や本物に触れる機会の設定

音楽の授業へ専門性のある他学部の教師や地域の外部講師を積極的に活用した。外部講師等の活用の際には、児童生徒の実態について伝えるだけでなく、年間指導計画に沿った内容を取り上げてもらうようにした。専門的な指導や本物の音楽に触れることで、児童生徒の興味・関心が広がり、学ぶ意欲にもつながった。また、教師側は、専門的な指導に触れることで、指導方法についても学ぶ機会となった（表１）。

＜表１＞校内外人材の活用例、児童生徒の様子

学部	校内人材の活用例	児童生徒の様子
小学部	・歌のコンサート （高等部の教師） ・音楽教室 （音楽療法の外部講師）	・声楽専門の教師のコンサートでは、これまでの学習の中で取り上げた曲などをリクエストし、一緒に楽しみながら歌う様子が見られた。生の歌声の迫力に集中して聴いたり、まねして歌ったりする様子が見られた。 ・音楽教室では、魅力あふれる教材に目を輝かせ、音楽の楽しさを体全体で味わう様子が見られた。
中学部	・太鼓の鑑賞 （寄宿舎指導員） ・ヒップホップ （外部講師）	・高等部３年生や寄宿舎指導員の太鼓の鑑賞をしたことが、生徒の太鼓演奏の意欲につながった。自分の思いを表現するために技能面での上達も見られた。 ・ヒップホップダンスを学ぶ中で「講師の先生のようにかっこよく踊ってみたい」という思いが意欲になり、技能を身に付けて楽しく踊る様子が見られた。
高等部	・琴の鑑賞 （小学部の教師）	・曲の演奏のみならず、琴や奏法の説明をよく見て聴き関心の高さが伺えた。アトリオンでも聴いていたが、間近で鑑賞したことで、生の迫力や美しさを体全体で感じている様子が見られた。

教師の授業づくりへの意識の高まり～「共通事項」を意識、「表現と鑑賞」を関連付けた題材構成

音楽の授業づくりを行うにあたり、児童生徒の丁寧な実態把握や教師側の授業づくりに対する現状の把握を確認した。好みの違いはあるものの音楽好きな児童生徒が多い一方で、音楽科の指導に苦手意識をもつ教師が多いことが分かった。音楽科の専科の教師の授業づくりや授業を見合う参加体制をとったことで、音楽科に関わる授業者やワーキンググループの職員全員が自分事と

して授業改善に参加した。そして、普段の授業からこの題材で何を身に付けさせたいか、学習指導要領のどの部分にあたるのかなどを考えながら授業づくりをすることへつながった。

授業研究会において、「共通事項」を仲立ちとして、「表現領域同士または表現領域と鑑賞領域を関連付けた題材構成」が大切であると確認した。中学部の授業づくりにおいては、じっくり聴いて（鑑賞）、お客さんの前などで発表することで表現することの面白さに気付くのではないかと考え、表現と鑑賞を関連付けた太鼓を題材とした授業づくりに取り組んだ。高等部の先輩の演奏の練習の見学や太鼓経験者の太鼓の鑑賞を取り入れたことで、生徒の興味・関心の高まりや意欲につながった。

音楽科と各教科等を関連付けた授業の充実

音楽科で身に付けたことをどのように日常生活や各教科等とリンクさせていくか指導内容や具体的な指導・支援方法について検討を重ね、各教科等とのつながりを意識した指導計画を考えることができた。

高等部においては、授業が隔週で行われており、指導に対する時数が少なく、学習指導要領の目標にせまる指導ができないことが課題として上げられていた。しかし、音楽科と生活単元学習をリンクさせ、指導計画を立てたことで、音楽科の指導だけでは難しい部分を生活単元学習の時間の中で補い、取り組むことができた（表２）（表３）。

＜表２＞児童生徒のエピソード

小学部	・低学年では、日常生活の主体的な行動へつなげることができるように、リトミックを取り入れた。体の動かし方を意識するだけでなく、準備や整列、行進などにつながる曲も取り入れたことで、音楽を聴くだけで児童が気付き、行動へ移すことができるようになってきた。 ・高学年では、いろいろな地域の音楽を鑑賞で取り上げた。音楽をきっかけに日本地図や地理などへの興味・関心の広がりが見られた。
中学部	・中学部作業製品販売会のオープニングで太鼓演奏をした。人前で発表することが「お客さんに聴いてもらいたい。だからもっと上手になりたい。」というモチベーションにつながった。これまで練習を積み重ねてきたことが自信となり、観客からの拍手が達成感につながった。
高等部	・高等部１年生が小学部１年生や道川分教室と音楽を通して交流をした。互いを理解し合ったり、相手のことを思いやったりする機会となった。

＜表３＞音楽科ＷＧ職員に対する授業づくりに関するアンケートより　～一部抜粋～

項　目	小学部	中学部	高等部	全体	増減
⑧教師は、児童生徒が学びをつなぐための支援をしている。	3.00	2.83	2.83	2.90	＋0.30
	3.25	3.17	3.17	3.20	
＜アンケート（記述より）＞ ・音楽科と生単を関連させた授業が充実した。他学部の実践を見て、現段階での取組みを考えたり、今後を見据えた内容を取り入れたりできたのではないか。 ・他学部の授業を見合う会を通して、他学部の実践を知ることができ、小中高の学習の流れが見通せるようになった。					

※評価基準　4：よくしている　3：ときどきしている　2：あまりしていない　1：ほとんどしていない　　（上段）5月（下段）12月

(2) 課題

学部内、学年間のつながりの強化～学習内容の系統性、年間指導計画

学部内において、学年や学習グループ間のつながりが弱く、学習内容の系統性に課題が見られた。児童生徒がより学びを実感し、学習したことを積み上げていくためには、各学部での学習に見通しをもって取り組むことが必要である。今年度、小学部１年生と高等部１年生、中学部２・３年生と高等部３年生の実践のように他学部と音楽を通しての交流や生活単元学習など他教科等とリンクさせた授業などが充実してきており、児童生徒の意欲や興味・関心などが高まってきた。児童生徒が学びを次の学習、活動へ生かすことができたとさらに実感するためには、音楽発表会など学んだことを表現して、認められる活動を学部間で調整して年間指導計画へ計画的に反映させていくことも必要である。

年間指導計画の様式の検討では、小学校の年間指導計画や教科書、特別支援学校の教科書を参考に検討した。具体的に現在の年間指導計画に学習指導要領の項目の番号や共通事項を入れる、評価ではなく、実施事項のみ記入する、題材名はねらいを基にわかりやすく記載するなどの具体的な改善案が出された。

校内人材、外部講師の活用の仕方を具体的に

音楽科の免許保有者の授業づくりや授業実践を見ることで教師の授業づくりに対する意識の高まりが見られた。また外部講師等の専門的な指導に触れる機会を通して、児童生徒の音楽の興味・関心がさらに広がった。しかし、一方で音楽科の免許保有者の他学部での活用の際に、ＴＴ間での情報共有や校内外の人材の指導への生かし方などに課題が見られた。児童生徒が興味・関心の幅を広げるためだけでなく、学びをつなげ、より充実させていくためにも音楽科の免許保有者や校内外の人材の活用についてより丁寧に計画していく必要がある。

８　次年度への提言

各学部の学習内容の系統性の検討

今後は音楽科の授業が更に充実していくように、各学部の６年間や３年間を見通した学習内容の整理や学部内でのつながりを意識した学習内容の系統性を検討していく必要がある。また、学部を超えて取り組む発表会等の活動についても、学部間で活動時期やねらい等について検討し、年間指導計画へ反映させていくことが求められる。

年間指導計画の様式については、今年度、検討したことを試行し、学習履歴のツールとして活用できるようさらに検討を重ねていきたい。

校内外の人材を指導へより生かしていくための検討

校内外の人材を指導へより効果的に活用するために、実態やねらい、指導方法のより丁寧な情報共有を行うこと、具体的な入り方や指導の時期などについても年間指導計画へ反映させるなど明確にしていくことが必要である。さらに学部間の連携や教科横断的な視点から他教科等との関連を充実させるために、音楽科ＷＧ研究会で今年度、取り組んだ授業を見合う会や授業づくりの検討などの実践についても継続して取り組んでいきたい。

＜資料１＞熊本大学教育学部附属支援学校「音楽指導内容確認表」２０１９（抜粋：小学部１～３段階）

区分			1段階		2段階	3段階
思考力・判断力・表現力等	A 表現	ア 音楽遊び	(ア) 音や音楽遊びについての知識や技能を得たり生かしたりしながら，音や音楽を聴いて，自分なりに表そうとすること。	ア 歌唱	(ア) 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら，好きな歌ややさしい旋律の一部分を自分なりに歌いたいという思いをもつこと。	(ア) 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら，歌唱表現に対する思いをもつこと。
知識			(イ) 表現する音や音楽に気付くこと。		(イ) 次の㋐及び㋑について気付くこと。 ㋐ 曲の特徴的なリズムと旋律 ㋑ 曲名や歌詞に使われている特徴的な言葉	(イ) 次の㋐及び㋑について気付くこと。 ㋐ 曲の雰囲気と曲の速さや強弱との関わり ㋑ 曲名や歌詞に使われている言葉から受けるイメージと曲の雰囲気との関わり
技能			(ウ) 思いに合った表現をするために必要な次の㋐から㋒までの技能を身に付けること。 ㋐ 音や音楽を感じて体を動かす技能 ㋑ 音や音楽を感じて楽器の音を出す技能 ㋒ 音や音楽を感じて声を出す技能		(ウ) 思いに合った表現をするために必要な次の㋐から㋒までの技能を身に付けること。 ㋐ 範唱を聴いて，曲の一部分を模唱する技能 ㋑ 自分の歌声に注意を向けて歌う技能 ㋒ 教師や友達と一緒に歌う技能	(ウ) 思いに合った歌い方で歌うために必要な次の㋐から㋒までの技能を身に付けること。 ㋐ 範唱を聴いて歌ったり，歌詞やリズムを意識して歌ったりする技能 ㋑ 自分の歌声の大きさや発音などに気を付けて歌う技能 ㋒ 教師や友達と一緒に声を合わせて歌う技能
思考力・判断力・表現力等				イ 器楽	(ア) 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら，身近な打楽器などに親しみ音を出そうとする思いをもつこと。	(ア) 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら，器楽表現に対する思いをもつこと。
知識					(イ) 次の㋐及び㋑について気付くこと。 ㋐ 拍や曲の特徴的なリズム ㋑ 楽器の音色の違い	(イ) 次の㋐及び㋑について気付くこと。 ㋐ リズム，速度や強弱の違い ㋑ 演奏の仕方による楽器の音色の違い
技能					(ウ) 思いに合った表現をするために必要な次の㋐から㋒までの技能を身に付けること。 ㋐ 範奏を聴き，模倣をして演奏する技能 ㋑ 身近な打楽器を演奏する技能 ㋒ 教師や友達と一緒に演奏する技能	(ウ) 思いに合った表現をするために必要な次の㋐から㋒までの技能を身に付けること。 ㋐ 簡単な楽譜などを見てリズム演奏などをする技能 ㋑ 身近な打楽器や旋律楽器を使って演奏する技能 ㋒ 教師や友達の楽器の音を聴いて演奏する技能
思考力・判断力・表現力等				ウ 音楽づくり	(ア) 音楽づくりについての知識や技能を得たり生かしたりしながら，次の㋐及び㋑をできるようにすること。 ㋐ 音遊びを通して，音の面白さに気付くこと。 ㋑ 音や音楽で表現することについて思いをもつこと。	(ア) 音楽づくりについての知識や技能を得たり生かしたりしながら，次の㋐及び㋑をできるようにすること。 ㋐ 音遊びを通して，音の面白さに気付いたり，音楽づくりの発想を得たりすること。 ㋑ どのように音を音楽にしていくかについて思いをもつこと。
知識					(イ) 次の㋐及び㋑について，それらが生み出す面白さなどに触れて気付くこと。 ㋐ 声や身の回りの様々な音の特徴 ㋑ 音のつなげ方の特徴	(イ) 次の㋐及び㋑について，それらが生み出す面白さなどと関わって気付くこと。 ㋐ 声や身の回りの様々な音の特徴 ㋑ 簡単なリズム・パターンの特徴
技能					(ウ) 気付きを生かした表現や思いに合った表現をするために必要な次の㋐及び㋑の技能を身に付けること。 ㋐ 音を選んだりつなげたりして，表現する技能 ㋑ 教師や友達と一緒に簡単な音や音楽をつくる技能	(ウ) 気付きや発想を生かした表現や，思いに合った表現をするために必要な次の㋐及び㋑の技能を身に付けること。 ㋐ 音を選んだりつなげたりして表現する技能 ㋑ 教師や友達と一緒に音楽の仕組みを用いて，簡単な音楽をつくる技能
思考力・判断力・表現力等				エ 身体表現	(ア) 身体表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら，簡単なリズムの特徴を感じ取り，体を動かすことについて思いをもつこと。	(ア) 身体表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら，簡単なリズムや旋律の特徴，歌詞を感じ取り，体を動かすことについて思いをもつこと。
知識					(イ) 次の㋐及び㋑について気付くこと。 ㋐ 拍や曲の特徴的なリズム ㋑ 曲名と動きとの関わり	(イ) 次の㋐及び㋑の関わりについて気付くこと。 ㋐ 曲のリズム，速度，旋律 ㋑ 曲名，拍やリズムを表す言葉やかけ声，歌詞の一部
技能					(ウ) 思いに合った動きで表現するために必要な次の㋐から㋒までの技能を身に付けること。 ㋐ 示範を見て模倣したり，拍や特徴的なリズムを意識したりして手足や身体全体を動かす技能 ㋑ 音や音楽を聴いて，手足や身体全体を自然に動かす技能 ㋒ 教師や友達と一緒に体を動かす技能	(ウ) 思いに合った体の動きで表現するために必要な次の㋐から㋒までの技能を身に付けること。 ㋐ 示範を見たり，拍やリズム，旋律を意識したりして，身体表現をする技能 ㋑ 音や音楽を聴いて，様々な体の動きで表現する技能 ㋒ 教師や友達と一緒に体を使って表現する技能
思考力・判断力・表現力等	B 鑑賞	ア 音楽遊び	(ア) 音や音楽遊びについての知識や技能を得たり生かしたりしながら，音や音楽を聴いて，自分なりの楽しさを見付けようとすること。	ア 鑑賞	(ア) 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら，身近な人の演奏を見たり，体の動きで表したりしながら聴くこと。	(ア) 鑑賞についての知識を得たり生かしたりしながら，曲や演奏の楽しさを見いだして聴くこと。
知識			(イ) 聴こえてくる音や音楽に気付くこと。		(イ) 身近な人の演奏に触れて，好きな音色や楽器の音を見付けること。	(イ) 曲想や楽器の音色，リズムや速度，旋律の特徴に気付くこと。
知識 思・判・表等	共通事項		ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り，それらの働きが生み出すよさや面白さ，美しさを感じ取りながら，聴き取ったことと感じとったこととの関わりについて考え イ 絵譜や色を用いた音符，休符，記号や用語について，音楽における働きと関わらせて，その意味に触れること。			
区分			1段階		2段階	3段階
			小学部			

＜資料２＞【共通事項】に示された音楽を形づくっている要素の一覧および関連する学習活動例（抜粋：小学校１・２年生）

	１　年	２　年	
音 色	・いろいろな打楽器で音探し，音遊び［15,25,50,52,57］ ・声の出し方や発音［18,30,45,60］ ・身の回りの音をもとにした声遊び［30］ ・楽器の音色を楽しむ鑑賞［33,54］ ・鍵盤ハーモニカで音遊び［34,36］	・声の出し方や発音［20,50,54,56］ ・楽器の音色を楽しむ表現や鑑賞［22,44,46,48,66］ ・身の回りの音をもとにした声遊び［28］ ・口唱歌［41］	・声 ・リ ［ ・金 ・重 ［ ・打 音 ・お ［
リズム	・簡単なリズムの演奏［14,18,20,24］ ・言葉でリズムづくり［26］ ・リズム伴奏［68,70］	・リズムの常時活動［15,17］ ・２拍子や３拍子のリズム伴奏［32,34,36］ ・リズムの組み合わせによる音楽づくり［40,46］	・リ ・各 ・リ ・器 ・リ
速 度	・歌詞の内容に合った表現［60］ ・速度に注目したわらべうたの手遊び［64］	・歌詞の内容に合った表現［54］	・速
旋 律	・音の高さの違いに注目した階名唱［38,40,42,56,70］ ・簡単な旋律づくり［46］ ・旋律の呼びかけ合いに注目した鑑賞［48］	・音の高さの違いに注目した階名唱［20,22,24,26,56,64］ ・簡単な旋律づくり［27］ ・旋律の反復に注目した歌唱や鑑賞［38,42］	・音 ・簡 ・音 鑑 ・旋
強 弱	・場面や歌詞の内容をもとにした表現［58,60］ ・強弱に注目した鑑賞［72］	・歌詞の内容に合った表現［12,54,56］ ・強弱を工夫する音楽づくり［28］	・旋 ・強 ・曲
音の重なり	・音の重なりを楽しむ音楽づくり［58］ ・歌声や楽器の音の重なりを楽しむ表現［68,70］	・歌声や楽器の音の重なりを楽しむ表現［26,32,34,36,48,62,64］ ・声や音の重なりを楽しむ音楽づくり［28,61］	・歌 ［ ・音 く
和音の響き			
音階，調			・ハ （ト ［
拍	・鑑賞曲の拍に合わせた手拍子，リズム打ち［12,20,72］ ・拍を感じた表現［14,18,22,24,26,52,62,64］ ・拍打ちを伴った「なまえあそび」［16］	・２拍子や３拍子の拍子感の感得［14,16,18,32,34,36］ ・拍を感じた表現［58,60］	・メ の ・拍
フレーズ	・リズムのまとまりの感得［18,20,22,24］ ・歌詞のまとまりを感じた表現［28］	・旋律のまとまりの感得［24,38］ ・歌詞のまとまりを感じた表現［58］	・旋 （ト
反 復	・反復を用いた音楽づくり［26］	・反復を用いた音楽づくり［28,40］ ・反復に注目した表現や鑑賞［38,42,52,68］	・反 ・反
呼びかけとこたえ	・「なまえあそび」「まねっこあそび」［16,41,45］ ・呼びかけとこたえを用いた音楽づくり［26,30,46,58］ ・呼びかけとこたえに注目した表現や鑑賞［44,48,66］	・呼びかけとこたえに注目した表現や鑑賞［6,12,66］ ・呼びかけとこたえを用いた音楽づくり［46］	・呼
変 化			・変 ・曲
音楽の縦と横との関係		・旋律の追いかけっこ［24,62］	・旋

職業・家庭科ＷＧ

研究主題

「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成（１年次／２年計画）

１　児童生徒の実態

小学部児童は様々な活動に意欲的に取り組む中で、自分の役割を果たそうとする児童が多い。一方、友達とのやり取りの中で、自分の気持ちをうまく表現できない等人との関わりに課題がある。そのため、係活動などの役割を果たす活動を通して、楽しさやうれしさを感じながら他者への意識や適切な関わりを育んでいる。

中学部生徒は、将来の生活や就労をモチベーションに目標に向かって頑張ろうとするが、将来への見通しが曖昧な生徒が多い。身近な高等部の先輩に憧れはあるが、基本的な生活習慣など自分から見習おうとする意識には個人差がある。

高等部生徒は、将来の社会生活を見据えた学習や体験活動を通して「働こう」という意欲があり、課題を出すと積極的に取り組む姿が見られる。一方で、自己肯定感が低く、将来に対する具体的なイメージがもちにくいなどの課題がある。

２　教育課程上の現状と課題

【現状】

・職業・家庭科は、昭和 37 年度版の学習指導要領（知的障害を対象とする）から示された中学部で設けることができる教科である。本校の中学部では、職業・家庭科の内容を生活単元学習や作業学習などの各教科等を合わせた指導の中で取り扱っている。

・昨年度までの２年間、「児童生徒による学習評価の充実」の研究主題の下、高等部では職業科、家庭科の授業実践に取り組んだ。その中で、中学部段階からの職業教育の充実が必要であるという観点から、学習指導要領と中学部の生活単元学習で行っている学習内容を基に「令和３年度　中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧」を作成した。

・キャリア教育全体計画やキャリア教育指導内容表の小学部、中学部、高等部の各学部段階における育てたい力を参考に「未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）」（以下、「未来へのスケッチ」とする）や個別の指導計画等を作成している(今年度から小学部でも「未来へのスケッチ」を作成)。

【課題】

・小学部段階でのキャリア教育を推進するために、中学部や高等部での指導内容や授業について教師が知るとともに、未来へのスケッチの様式やよりよい作成、活用の方法を検討する必要がある。

・中学部では、生活単元学習の中で、職業・家庭科に関する学習内容を取り扱っており、多くが学級担任の裁量となっているため偏りがある。「令和３年度　中学部 職業・家庭科に関する学習内容参考一覧」を活用し、学ぶ内容を系統的に整理する必要がある。

・高等部では、昨年度までの研究の課題として挙げられた「実態差に応じた指導内容の精選」、「家庭での般化の難しさ」、「生活に生かせる技術の習得」について具体的な取組を進める必要がある。

児童生徒の実態と教育課程上の現状と課題から、今年度は、職業・家庭科に関わる学習を通して、社会生活を見据えた生活をする上で必要な力を身に付け、主体的に次の学びや日常生活に生かそうとする児童生徒の育成を目指していきたい。

３　今年度（１年次）の研究の目指すゴール

①学びの積み重ねが見える学習履歴の蓄積と活用
②学習内容参考一覧の活用と改善
③未来へのスケッチにおける小学部、中学部、高等部の学びのつながりの検討

４　主となる研究対象の各教科等

小学部、中学部：生活単元学習　　高等部：職業科、家庭科

５　内容と方法

（１）実態把握、単元計画の共有、作成

・児童生徒の実態→児童生徒の実態や課題について、各学部での情報交換
・「職業・家庭科」に関する授業の実態→授業の実態や課題についての情報共有、学習指導内容一覧を元に中学部全学年、高等部１年の授業内容の整理
・授業デザインミーティングⅠ、年間指導計画の検討、作成

（２）教科ＷＧでの検討

①学びの積み重ねが見える学習履歴の蓄積と活用
○児童生徒が学びをつなげる授業づくりのための教師の支援（共通実践事項）

（小）前時とつなぐための導入の工夫、児童への見える化、言語化
（中）学びを実感できる体験（ワークシートにこだわらない）
学んだことを生かせる場面設定（→やれる、できるという思いを育てる）
常に意識できる掲示物（キーワード化、時期（タイミング））
※「令和３年度中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧」を基に、今年度の学習内容表を各学年で作成（次年度の引き継ぎ資料として活用）
（高）学習シートの蓄積　日常のあらゆる場面に学びのチャンス　つなげる意識をもつ
生徒との面談による成果と課題のすり合わせ

②学習内容参考一覧の活用と改善

・３年間を見据えた年間指導計画の作成
・「令和４年度中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧（案）」の検討、作成
・中学部「職業・家庭科」新設を見据えた取組み

③未来へのスケッチ（キャリア・パスポート）における小学部、中学部、高等部の学びのつながりの検討

・未来へのスケッチ（１学期段階）の活用方法等について情報交換
・事例の共有

（３）授業実践

職業・家庭科 WG 授業研究会（小学部３年：９／６、高等部１年：９／26）
全校授業研究会（中学部３年：11／15）

（４）評価、改善

・授業デザインミーティングⅡの実施
・年間指導計画の評価・改善
・授業実践の評価・改善
児童生徒が学びをつなげる授業づくりのための教師の支援の成果、課題、及び児童生徒の変容
・職員に対するアンケート

６　研究の実際

(1) 実態把握、単元計画等の共有、作成

授業デザインミーティングⅠの実施、教科ＷＧによる話合い

児童生徒の実態や課題を基に、単元構成や展開の工夫、教師の手立てなどを検討し、年間指導計画や日々の授業実践に反映させるために、教科ＷＧを中心にデザインミーティングを行った。教育専門監や各学部縦割りの教科ＷＧのメンバーと授業づくりについて話し合うことで、学部を越えた系統的な視点から評価・改善を図ることができた。

(2) 教科ＷＧでの検討

①学びの積み重ねが見える学習履歴の蓄積と活用

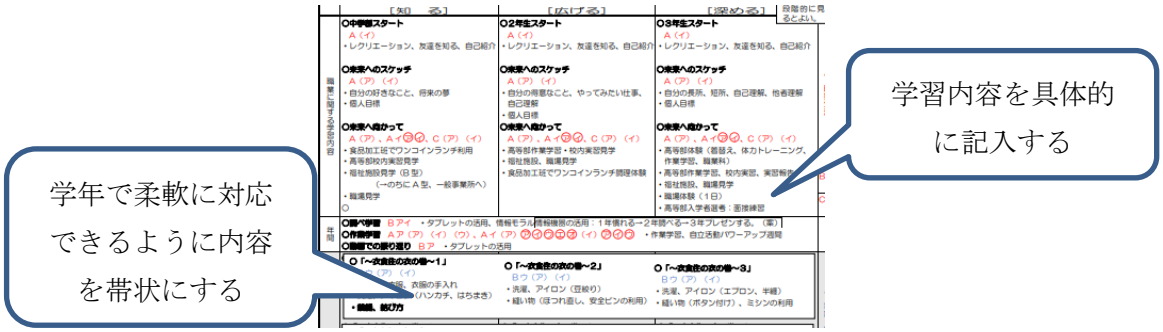
昨年度の高等部の成果として、学びの積み重ねが見える学習履歴が大切であることを確認し、今年度小学部、中学部でも実践に取り入れた。「児童生徒が学びをつなげる授業づくりのための教師の支援」を学部内で確認し、共通して実践することにした。そのことが学びの積み重ねが見える学習履歴に結び付くと考え、日々の授業づくりに活かし、評価・改善をした（児童生徒の変容と成果、課題については(4)評価・改善で記す）。また、高等部の具体的な実践の一つとして、高１学年通信を掲載する（資料１）。

②学習内容参考一覧の活用と改善

「令和４年度中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧（案）」の検討・作成

中学部では、「令和３年度中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧」を基に、各学年の実態に応じて、年間指導計画を作成した。特に、２，３年生では、これまで未履修の内容を確認できたため、バランスよく学習するための大きな指針となった。

また、「令和４年度中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧（案）」（図１）（資料２）を検討し、使いやすさを模索した。その後教科ＷＧで話し合い、学部を越えた視点でも検討できた。「学習内容を具体的に記入する」「帯状にして学年で柔軟に対応できるようにするとよい」「内容や目的が段階的に見えるとよい」「どうステップアップしているのか、系統性が分かるとよい」などの意見が出された。



＜図１＞「令和４年度　中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧（案）」

さらに、各学年で何を学んだか、次年度に引き継ぐ資料として、年間指導計画と共に活用できるように、学年ごとの職業・家庭科に関する学習内容参考一覧を作成した。

中学部「職業・家庭科」新設に向けた取組

これまでの学習内容参考一覧の話合いから、生徒が職業・家庭科の内容をバランスよく系統的

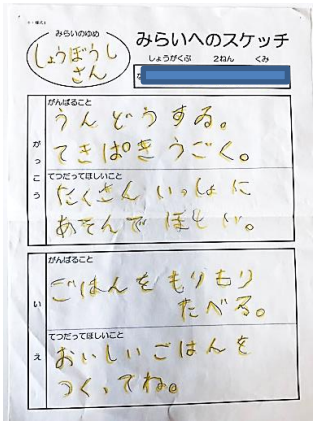
に学ぶためにも、中学部「職業・家庭科」が必要であることを学部内で確認し、メリットについて話し合った。新設のメリットとして、生徒にとっては「『何を学ぶか』が明確になる」、「見通しをもちやすい」、「保護者とも情報共有がしやすい」などの意見が挙がった。教師にとっては、「年間を通して計画的な指導ができる」「高等部での学習につなげやすい」などが挙げられた。また、運用については、中学部のこれまでの生活単元学習の中で、職業・家庭科に関する進路学習等の割合と、学習内容参考一覧の年間の学習内容からも、週２時間が妥当なのではないかと考えた。現在、週７時間の生活単元学習のうち、職業・家庭科に関わる内容を２時間程度、曜日を固定して行うことで生徒が学習に見通しをもつことができるのではないかと考え、各学年で実施した。学年によっては曜日ではなく、期間を固定することで、生徒たちが集中し、学びを深めることにもつながった。今後は、各学年の実態に応じた取組みを検討する必要がある。また、各学年の職業・家庭科の年間指導計画を作成し、検討した。効果的な指導ができるように、学習内容や時数、曜日の設定など、今後も継続して話合いを重ねる必要がある。

③未来へのスケッチにおける小学部、中学部、高等部の学びのつながりの検討

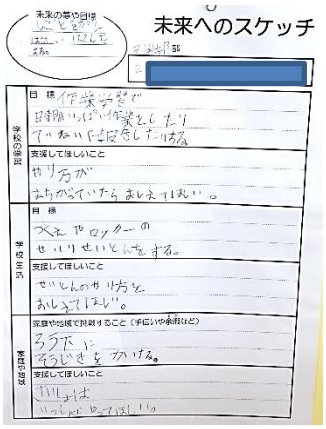
次年度に各学部の学びのつながりを検討するために、今年度は各学部での活用方法や記載方法を共有、実施することにした。

未来へのスケッチ（１学期段階）の活用方法等についての情報交換

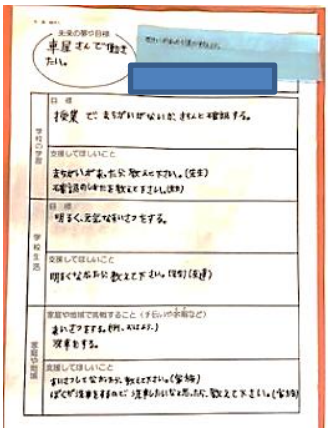
今年度から、小学部で未来へのスケッチ（キャリアパスポート）の作成を始めた。効果的な活用を目指して、２学期が始まるタイミングで、全学部で、実際のシートを見合いながら、具体的な記入例、授業での活用方法、掲示の仕方、保護者との連携、成果や課題などについて共有した。目標設定や評価の際には、面談による対話を通して、学びや育ちへの気付きを促すなど、細かな配慮や工夫が必要であることが確認できた。同時に児童生徒の実態によっては、教師が目標や課題の共有が難しいなど課題も挙げられた。また、様式についても、小学部でわかりやすい表現について話し合った。以下の図２は、各学部の未来へのスケッチの様式である。



小学部



中学部



高等部

＜図２＞各学部の未来へのスケッチの様式

事例の共有

12 月の教科ＷＧでは、毎日の取り組みが児童の変容へとつながった事例として、小学部２年生の取組みを共有した。児童生徒が日々意識して生活するための工夫について、教師が改めて未来へのスケッチの活用の仕方を見直す機会となった。

【事例】　小学部２年　「未来へのスケッチの作成と活用」（日常生活の指導、生活単元学習）

児童（生徒）の実態	
・男子５名の学級である。４人は、概ね身辺自立し、自分のことは自分で取り組む。一人は、教師の支援が必要である。 ・学習意欲が高く、友達や教師と言葉を掛け合いながら、様々なことに取り組む。家庭では、家族やきょうだいの支援を手厚く受けている反面、生活経験の少なさがうかがえる。 ・自分の気持ちや考えに合った選択肢を選んだり、簡単な言葉や身振りで表現したりする。	
年間目標	
日常生活の指導	**生活単元学習**
（１）基本的な生活習慣を身に付け、一人でできることを増やす。 （２）自分から挨拶をしたり、挨拶を返したりする。 （３）一日の学習予定を知り、見通しをもって学習に向かう。	（１）活動に見通しをもち、簡単な手順を知って活動する。 （２）友達や教師との活動を通して、言葉や身振りで自分の気持ちや要求を伝えたり、適切な伝え方を覚えたりする。 （３）興味や関心を広げ、友達や教師と協力して活動する。

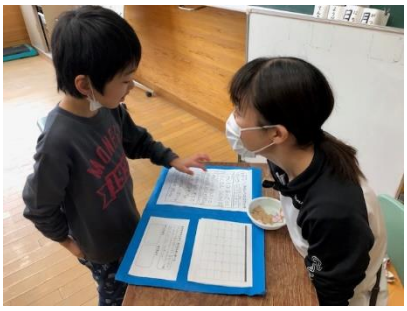
＜５月＞　未来へのスケッチの作成：生活単元学習「大きくなったら何になろう？」

教師の主な支援	
○自分事として考えるための支援 ・身近な職業のイラストを提示し、なりたい職業を選ぶ場面を設ける。 ・担任とやり取りしながら、「未来へのスケッチ」に書くことを一緒に決めていく。	
児童の様子・エピソード	
≪消防士になりたい児童Ａ≫ Ｔ「消防士さんになってどんなことしたいの？」 Ａ「火を消す（ホースをもって消火する様子を身振りで表現）」 Ｔ「消防士さんってててきぱきしているよね。それに力持ち。Ａが消防士さんになるためには何を頑張ればいいかな？てきぱき動くことかな？運動かな？」 Ａ「てきぱき！（指差しで）」 Ｔ「分かった。学校ではてきぱき動くことを頑張ろう。お家では何を頑張ろうか？」 Ａ「ご飯！！」 Ｔ「じゃあ、消防士さんみたいに何でももりもり食べようね」	≪消防士になりたい児童Ｂ≫ Ｔ「消防士になってどんなことしたいの？」 Ｂ「うーん・・・」 Ｔ「どうして消防士さんになりたいの？」 Ｂ「消防士さんの服が着たい」 Ｔ「かっこよく服を着られるようにならないとね。シャツが出ているのはかっこいい？」 Ｂ「だめ」 Ｔ「まずはそこを頑張ってみたら？」 Ｂ「うん」
考察	
将来の夢について、児童Ａは自分事として考えることができたが、児童Ｂは自分事として考えることが難しい様子だった。Ａは自分の中にある消防士のイメージ（てきぱき動く、たくさん食べて体力がある）に対し、自分に必要なことを自分なりに考えたり選択したりできていた。「身支度に時間が掛かる」「好き嫌いが多い」など、Ａが自分の課題をよく理解していると感じるやり取りだった。一方のＢは、担任がＢの思いを聞き取り、やり取りしながら目標を具体化していった。「これはできた方が良い」と担任とＢの思いが一致し、Ｂの生活課題に見合った目標設定に結び付けることができた。	

＜９月～３月＞　未来へのスケッチの活用：日常生活の指導、生活単元学習「パワーＵＰ大作戦」

※夏休み明け、未来へのスケッチを児童と作成。保護者から応援メッセージを書いてもらう。３月、担任と保護者がコメントを書き、児童、担任、保護者で思いを共有する。

方法	
①日常生活の指導 ・生活習慣の定着に向けた実践。 ・帰りの会の前に頑張りを評価する。 方法：◎、○、△のシールによる評価	②生活単元学習「パワーＵＰ大作戦」 ・今月の目標設定、振り返りをする。 方法：プリントへの記入 （できたこと、次に頑張りたいことなど）

教師の主な支援	児童の様子・エピソード
①頑張りの見える化、蓄積 ・毎日カレンダーに評価シールを貼り、教師と頑張りや出来具合を確認する ・児童が、自分の目標や前月までの評価を確認できる様式を準備する	≪シャツをしまうことを目標にした児童Ｂ≫ ・担任と相談し、未来へのスケッチの評価をする前に自分でシャツが出ていないことを確認することにした。 ・未来へのスケッチをやる前にシャツの確認をすることが習慣になり、自信をもって◎のシールを選ぶようになった。 ・まだきちんとしまうことは難しいが、トイレや着替えのあとも、自分でシャツをしまうようになった。
②成長を実感できる手立て ・実践場面を限定する ○○の時間、○○のあと ・具体的な言葉で、担任の評価を受ける場面の設定 「○○のとき、△△ができていたね」 「もっと○○ができるといいね」	≪挨拶を目標にした児童Ｃ≫ ・玄関に入るときと教室に入るとき、担任と目を合わせて挨拶をした。 ・動きを止めることが苦手だったが、担任が目の前に立つと、顔を上げて挨拶をするようになった。 ・担任や友達、教頭先生など、身近な相手に自分から挨拶をすることが増えた。 

成果と課題（○成果　▲課題）

○毎日評価することで、日々の頑張りが「見える化」され、実践意欲が高まった。（児童）

○担任と一緒に評価することで、児童が自分の頑張りや出来具合を適切に評価した。「◎＝よい評価」が分かるようになった児童、△の評価を受け入れることができるようになった児童もいた。（児童）

○望ましい生活習慣、学習態度の土台作りを支援するためのツールになった。担任の意識が高まり、普段の生活の中で場面を捉えてピンポイントに関わることができるようになった。（教師）

○毎日評価すること（児童の頑張り、出来具合の見える化）で、月の評価、学期の評価もしやすくなった。具体的な場面を目標とすることでステップアップにつながる児童もいた。（児童、教師）

▲児童が成果と課題を実感できるよう、未来へのスケッチと学期ごとの目標を連動させるなど、より明確で分かりやすい目標設定に向けた工夫や配慮が必要である。

▲目標の立て方や評価のスパンなど、児童一人一人の実態に合わせた指導の充実が必要である。

▲家庭と協働するためのツールとして、面談で思いを共有する、共に評価するなど効果的に活用していく。

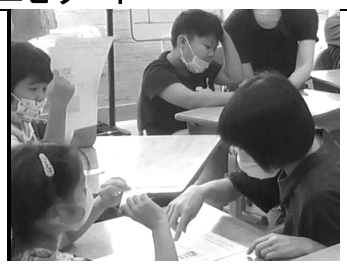
⑶ 授業実践

【授業実践１】小学部３年　生活単元学習　：教科ＷＧ授業研究会　対象授業

児童の実態	
・写真、手順カードなど視覚的支援が有効。見通しがあると、落ち着いて活動できることが多い。 ・制作活動を好み、余暇にビーズ作りをしている児童もいる。 ・クラスの友達の名前を呼ぶ、朝の会で次に話す人に声を掛けるなどの関わりがある。友達同士の関わり、やり取りは少ない。	
目指す姿（授業デザインシートより）	**年間目標**（生活単元学習）
・学級の友達や、学級の中での役割に関心を持ち、簡単なやり取りをしながら活動する。 ・身近な教師、先輩、家族に教師の援助を求めながら挨拶や話をしようとする。 ・中学部の作業見学、「ビーズ店」の学習活動を通して制作や接客を体験し、「働く」ことに触れる。	（１）自分や友達の役割や活動の流れが分かって、自分から活動に取り組む。 （２）友達や教師との活動を通して、自分の要求や気付いたこと感じたことを、言葉や身振りで伝えたり、相手に伝わる伝え方を覚えたりする。 （３）興味や関心を広げ、友達や教師と協力して活動する。

単元名	「３年生、にこにこビーズてん～ちゅうがくぶのせんぱいにプレゼントしよう～」
単元の目標	（１）自分とグループの友達のやることが分かり、制作や接客をする。【知識及び技能】 （２）自分が選んだ物を友達や教師に伝えたり、友達や教師と簡単なやり取りをしたりする。【思考力、判断力、表現力等】 （３）友達や教師と関わりながら、積極的に制作や接客に取り組む。【学びに向かう力、人間性等】
指導計画	・中学部の作業を見学しよう ・３年生、にこにこビーズ店～小学部の先生にお店を開こう～ ・３年生、にこにこビーズ店～中学部の先輩にプレゼントしよう～ ・３年生、にこにこビーズ店～おうちの人にお店を開こう～

＜実践：９月＞

教師の主な支援	児童生徒の様子・エピソード
①前時とつなぐための導入の工夫 ・前時の活動の写真シールを用意し、導入でワークシートに貼る活動の設定 ・前時の様子を踏まえた個別の目標を設定し、ワークシートに提示	・前時の活動の写真が出てくると、どの児童も顔を上げて注目する様子が見られた。ワークシートや写真シールを見て、前時できたことや友達の様子について話す児童が多かった。  ・前時のことを思い出しながら、意欲的にステップアップした目標に向かうことができた。
②児童への見える化・言語化 ・イラスト入りの活動内容カードを作成、掲示 ・めあてとなる姿を写真やセリフで具体的に提示 ・本時で作るビーズの図案と、それをプレゼントする先輩の顔写真の掲示 ・活動量や時間を具体物やタイマーで提示	・カードで次にやる活動を確認して、自分から次の活動に向かう様子が見られた。 ・教師の言葉掛けがなくても、「相手を見る」「どうぞと言う」などのポイントを意識して活動することができた。 ・先輩の顔写真を指さす様子が見られた。 ・活動の終わりが分かり、時間いっぱい活動することができた。

③児童同士のやり取りを引き出す工夫	・活動を繰り返す中で、児童同士で協力して活動する姿が増えてきた。同じグループの友達と一緒に道具の準備をしたり、道具の受け渡しのときに話したり相手を見たりするようになった。
・普段の関係性やコミュニケーションの実態などを考慮したグルーピング ・児童同士が必然的に関わる役割と場面設定の工夫	・グループごとに接客活動を行った。同じグループの友達に「これは僕がやるよ」「袋に入れて」などとやることを伝えたり、友達がやっているのを見て待ったりする姿が見られるようになった。

成果と課題（○成果　▲課題）

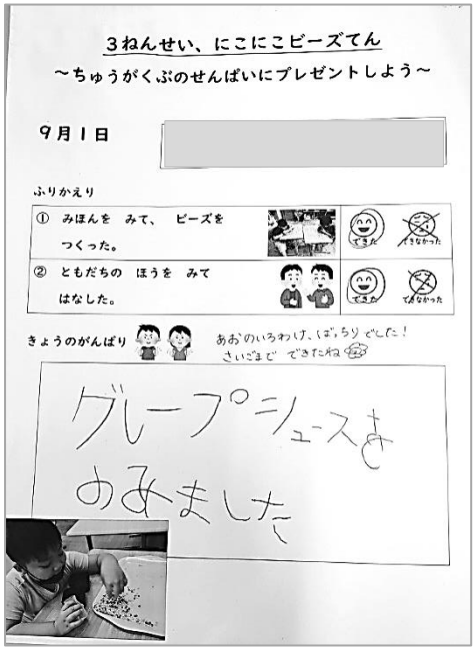
○ワークシートを毎回活用したことで、前時とのつながりを児童だけでなく、教師が確認しながら活動を進めていくことができた（図３）。

○児童同士のやり取りが増えた。教師を介さずに友達を遊びに誘ったり、自分から近くへ行って関わろうとしたりするようになった。

○単元の始めに中学部アイロンビーズ班の先輩にアイロンビーズの作り方を教えてもらい（写真１、２）、先輩達が喜んでくれそうなビーズの図案を考えてプレゼントした（写真３）。作る相手を意識し、意欲的に制作する姿につながった。

▲国語や算数の要素も多く含まれている学習のため、学習内容の視覚化に加えて文字情報や数についても合わせて提示し、児童の気付きや思考を促す支援が更に必要であった。

▲「ありがとうが言えたね」など具体的な言葉での即時評価に加え、「協力できたね」などめあてに関わる言葉での評価をしていく必要があった。



＜図３＞振り返りワークシート

＜写真１＞

＜写真２＞

＜写真３＞

【授業実践２】中学部３年生活単元学習（職業１グループ）：全校授業研究会対象授業

生徒の実態	
・全員が高等部進学を希望している。 ・自分を過大評価したり、失敗や教師の指摘を受け入れられなかったりする。 ・夢が現実的でない人もいるが、将来の生活や就労をモチベーションに、自分のことを頑張ろうとする生徒が多い。 ・高等部進学に向けての意識が少しずつ高まってきている。	
目指す姿（授業デザインシートより）	**年間目標**（生活単元学習　職業・家庭科）
・学校生活や家庭で自分から身の回りのことや家事に取り組む習慣がつく。（生活力の向上） ・自分の課題や次にどうしたらいいか等の目標を考えたり、考えや気付いたことを伝えたりする。 ・分からない、困った、上手くできない場面でどうするといいかが分かる。	・なりたい自分や憧れの先輩をイメージして、働く際や生活に必要な知識や技能を身に付けたり、何が必要か考えたりして活動する。 ・自分の良さや課題に気付いて、目標を考えたり、目標を意識して活動したりする。

＜実践：10 月～11 月＞

単元名	レベルアップ大作戦～働く力レベルアップ！目指せ高等部！～
単元の目標	（１）職業生活に必要な働く力や高等部の先輩と自分との違いを知る。【知識及び技能】 （２）作業学習体験における自分や友達の成果や課題に気付き、次にどうしたらいいかを考えたり、伝えたりする。【思考力、判断力、表現力等】 （３）高等部進学に向かって、目標を意識して活動に取り組んだり、自分から課題を克服しようとしたりする。【学びに向かう力、人間性等】
指導計画	・中学部と高等部の違いについて ・高等部作業学習見学・体験 ・高等部作業学習体験の振り返り ・作業学習の目標発表会

教師の主な支援	生徒の様子・エピソード
①学んだことを実感できる手立て＝体験 （ワークシートにこだわらない） ・動画での振り返り ・作業学習体験での自分の成果や課題について友達や高等部の先輩から他者評価を受ける機会を設定（図４）	・自分の良かった場面や課題が残る場面をじっくり見る生徒がおり、成果や課題を実感できた。 ・成果を友達や先輩から認められたり、自分では気付かなかった良さに気付いて自信をもつ様子が見られた。また、失敗や教師の指摘を受け入れられない生徒も、友達や先輩からのアドバイスは素直に受け入れ、今後に生かそうとする意識が見られた。

②学んだことを生かせる場面設定 ・高等部作業学習体験をする機会設定 ・作業学習とのつながりを意識できる振り返り	・パワーアップ週間（校内実習）の振り返りや高等部作業学習見学を通して、自分の課題やあこがれとする姿を明確にした上で高等部作業学習体験を行ったことで、自分の課題や目標を意識して体験する姿が見られた。 ・高等部作業学習体験で明らかになった課題から、普段の作業学習で頑張る目標を決めた。自分から「目標を意識して頑張ってきます」や「目標を意識して頑張りました」と作業学習前後に教師に話す生徒がいた。 ・決めた目標を未来へのスケッチに記入し、生活全般で意識して頑張ろうとする生徒がいた。
③効果的な掲示物 ・先輩の優れた点をキーワードとともにまとめた物を教室に掲示（図５）	・本単元の間、常に教室に先輩の優れた点をまとめた物を掲示したことで、キーワードを覚えたり、思い出して作業学習で意識したりする生徒がいた。また、１グループ以外の生徒も見て、先輩の優れた点を言葉にするようになった。

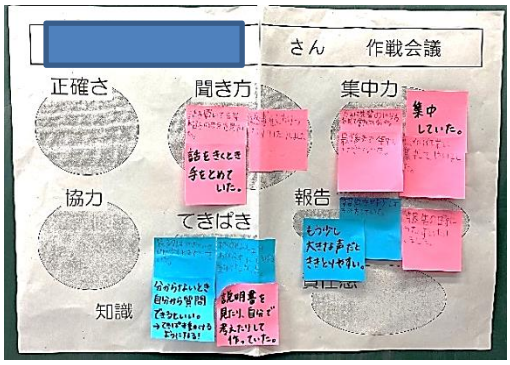
成果と課題（○成果　▲課題）

○高等部の作業学習見学・体験など先輩と関わりながら学習することで、先輩のようになりたいとあこがれる気持ちを強く抱くようになった。かっこいい先輩の姿が、自分の目標を考えるきっかけや高等部にいきたいという意欲に繋がった。

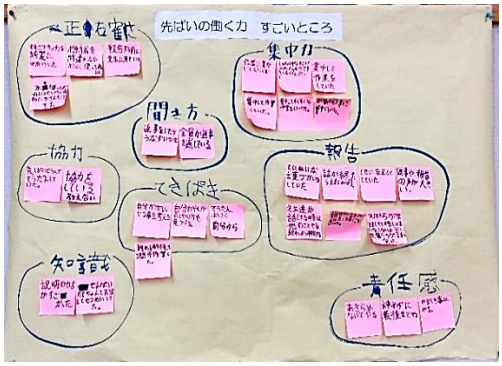
○先輩や友達から自分の良さや課題を教えてもらうことで、自信をもったり、素直に受け入れて課題を改善しようとしたりするようになった。また、先輩の体験談を聞いたことで、失敗に落ち込みやすい生徒が前向きに課題に向き合う様子が見られた。

▲「うなずいて話を聞く」「無駄話をしないで作業」など先輩の働く力における優れた点をたくさん出し合った分、一つ一つ丁寧に確認する時間がとれなかった。中学部段階で身に付けたい力を絞り込み、「どうしてうなずいて話を聞くのか」など、今後、働く力を丁寧に確認する必要がある。

▲決めた目標を忘れたり、他の学習場面では意識が薄れてしまったりする生徒がいる。生徒が学んだことを他の学習場面でも意識して行えるように、学部職員に生徒の目標を共有するなど日常的に即時評価を行えるように環境を整える必要がある。



＜図４＞他者評価をまとめたシート



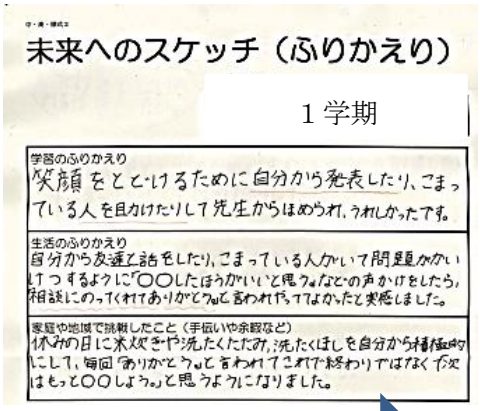
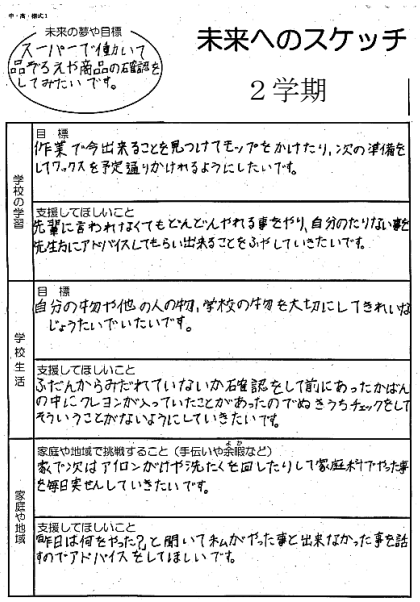
＜図５＞先輩の働く力　すごいところ

【授業実践３】　　高等部　職業科　１年Ｉグループ　:（職業・家庭科ＷＧ授業研究会）対象授業

生徒の実態	
・学習にとても意欲的に取り組み、教師を介さずに自分たちで話し合いを進められる。 ・自分の考えはあるが、話すことへの自信のなさや不安感から友達からの言葉掛けを待つ様子が見られる。 ・返事がすぐに出ないことや、挨拶の声が小さいことがある。 ・働こうという目標や意欲がある。しかし、働くことと夢の区別が生徒保護者共にあまりない。 ・身だしなみや持ち物の管理など定着が課題である。 ・家事に対して課題を出すと意欲的に取り組み、見守りや協力が得られる家庭も多い。	
目指す姿（授業デザインシートより）	**年間目標**（職業科）
・働くために必要な力やルール、マナーが分かる。 ・学校や家庭、寄宿舎での生活で実践しようとする。	（１）「将来の夢や憧れ、なりたい自分」を考えて、自分にできる身近な目標を立て、生活の中で改善しようとする。 （２）校内・現場実習や職場見学などを通して、様々な仕事があることや、働くために必要な知識や技能を学ぶ。 （３）校内実習や友達との関わりを通して、自分の得意なことや課題を知る。

＜実践：９月＞

単元名	知りたい！わたしの進路～見たい！聞きたい！調べたい！～
単元の目標	（１）本校卒業生の進路先と地域の各事業所の理念や仕事内容等を情報収集する。【知識及び技能】 （２）様々な進路先から進路希望やその理由を考えてまとめたり、発表したりする。【思考力、判断力、表現力】 （３）適切な進路選択に向けて自分の成果や課題と向き合い、今後の生活に生かす目標を立てる。【学びに向かう力、人間性等】
指導計画	**今の「自分の力」はどれくらい？** ・実習の評価表を基に、自己評価する。 ・教師の評価と自己評価を見比べる。 **ゆり支援学校卒業生の進路先はどんなところ？** ・卒業生の進路先について概要を知り、分かったことや疑問点をワークシートに書く。 **いろいろな進路先の生活や内容とは？** ・興味のある一般企業や福祉的就労、その他の進路先について調べ、求められる人材についてまとめる。 ・インターネット検索や進路の手引き、事業所のガイドブックやパンフレット、教師への質問等から求められる人材を知る。 **「働きたい」理由と「自分に合う」職業とは？** ・友達や教師からの意見や質問を受けて、進路希望先で働きたい理由を明確にしたり、自分の職業適性を考えたりする。 ・これまでの学習を振り返り、自分の進路希望に向けた目標を設定する。

教師の主な支援	生徒の様子・エピソード
①学習シートの蓄積～授業を通したワークシート活用によるキャリアカウンセリング～（図６）	・自分で長所や短所に気付き、短所についてはどのような努力や支援があればよいか自分で考えた。 ・福祉的就労や一般就労について、卒業生の進路として紹介することで、進路についての理解が深まった。また、自分が目指す職業での求める人材を知り、これからの学校生活で頑張りたい気持ちをもった。 ・友達からの質問を受けることで、改めて自分が希望する職業についての働きたい理由や職業適性について考えを深めた。
②生徒との面談による成果と課題のすり合わせ	・授業でまとめた自分の考えを話したり、自分の課題から目標設定した「未来へのスケッチ」を活用して振り返りをしたりしたことで、自分の目指す方向性や何のために何を頑張るのか生徒が理解した。  未来へのスケッチ（ふりかえり） １学期 学習のふりかえり 笑顔をとどけるために自分から発表したり、こまっている人を助けたりして先生からほめられ、うれしかったです。 生活のふりかえり 自分から友達と話をしたり、こまっている人がいて問題がかいけつするように「○○したほうがいいと思う」などの声かけをしたら、相談にのってくれてありがとう。と言われたりてよかったと実感しました。 家庭や地域で挑戦したこと（手伝いや余暇など） 休みの日に米炊きや洗たくたたみ、洗たくほしを自分から積極的にして、毎回「ありがとう。」と言われてこれで終わりではなく今度はもっと○○しよう。と思うようになりました。 １学期のふりかえりから ２学期の目標へ  未来の夢や目標 スーパーで働いて品ぞろえや商品の在庫部をしてみたいです。 未来へのスケッチ ２学期 学校の学習 目標 作業で今出来ることを見つけてもっとをかけたり、次の準備をしてワックスを予定通りかけれるようにしたいです。 支援してほしいこと 先輩に言われなくてもどんどんやれる事をやり、自分のたりない事を先生方にアドバイスしてもらい出来ることをふやしていきたいです。 学校生活 目標 自分の物や他の人の物、学校の物を大切にしてきれいなじょうたいでいたいです。 支援してほしいこと ふだんからみだれていないか確認をして前にあったかばんの中にクレヨンが入っていたことがあったのでぬきうちチェックをしてそういうことがないようにしていきたいです。 家庭や地域 家庭や地域で挑戦すること（手伝いや余暇など） 家でゆめはアイロンかけや洗たくを回したりして家庭科でやった事を毎日実せんしていきたいです。 支援してほしいこと 毎日は何をやった？と聞いてあんがやった事と出来なかった事を話すのでアドバイスをしてほしいです。

成果と課題（○成果　▲課題）

○生徒が自分の進路実現について、具体的に見通しをもち始めた。

○自分の進路実現に向けて、何を頑張るとよいのかが分かり、様々な学習に意味づけられるようになった。

○友達からの質問に答えることで、自分の考えをまとめたり、回答しながら自己理解を深めたりした。

▲「実際の生活に生かせる目標か」、「本当に自分に合った職業なのか」、自己理解を深めるにはキャリアカウンセリングや授業だけでは図れないため、現場実習などの体験やその振り返りが大切となる。

▲話し合った内容が分かるように、ワークシートを工夫したり、振り返りの時間を保証したりする。

高１　職業科　ワークシート⑥（９／２６）

振り返り ～今回の授業で一番心に残ったこと、感想～

職業で１番心に残ったことは、先輩達の進路です。
理由は、先輩達のやりたいことやとくいなことをしてやっていて自分のやりたいことを見つけるきっかけになったからです。
自分のやりたいことを見つけて、調べてやりたい仕事でもしゅるいがあって、はんばいがあったりして、笑顔になってもらえることを考えてやって、自分が１番やりたいことが見つかったのでよかったです。

高１　職業科　ワークシート⑥（９／２６）

振り返り ～今回の授業で一番心に残ったこと、感想～

・自分に合ってる仕事や、社会について、今後の目標などが良くわかりました。これからもまだまだわからない事がたくさんあるので、もっと知ったりして、自分の力にしていきたいです。１グループでの授業では、かるがるに社会の事がわかったので、おもしろかったです。

高１　職業科　ワークシート⑥（９／２６）

振り返り ～今回の授業で一番心に残ったこと、感想～

１番最初にやった自己ひょうかで自分は全部出来ていると感じても周りからみて出来ていないことがあると知りました。
きになる職業を調べる回では自分が働きたいところがしぼれてよかったです。
今日の学習では友達に質問されたことに上手くこたえることが出来ました。

高１　職業科　ワークシート⑥（９／２６）

振り返り ～今回の授業で一番心に残ったこと、感想～

最初に自己評価を書いて個人的には低くなったけど、
実習評価ではそこそこ良い物をもらえて良かったです
一回就労B等の授業を休んで、就労Aでの仕事の免許をしました。
何の仕事がやりたいかが分からなくて迷えだけど今の所はパソコンや物作り関係の仕事が良いと思っています。
他の人の考えも知れて良かったです。そこそこおもしろかった。

＜図６＞ワークシート：『単元の振り返り』

(4) 評価、改善

授業実践の評価・改善

児童生徒が学びをつなげる授業づくりのための教師の支援について、各学部の成果、課題、児童の変容を情報交換したものを表１に示した。また、職員アンケートの「授業改善・授業づくり」についての結果を表２に示した。

＜表１＞児童生徒が学びをつなげる授業づくりのための教師の支援（共通実践事項）

	各学部で設定した共通実践事項	教師の支援		児童生徒の変容
		成果	課題	
小学部	・前時とつなぐための導入の工夫 ・児童への見える化、行動の言語化	・姿勢や声などの気を付けるポイントを意識できるように動画で前時を振り返った ・前時を思い出せるように学習予定表と作ったものを一緒に提示した ・見通しをもち、安定した気持ちで活動に向かえるように見本や演示を繰り返した	・動画による気を付けるポイント精選の難しさ ・ワークシート記入に時間がかかる ・振り返り方法の仕方 ・話すことが難しい児童への対応（写真や実物提示が難、提示の工夫）	・動画を見て気を付けるポイントに自分で気付く ・友達の様子に気付くことができる ・予定表を見て、動画を使用しなくても次に何をするのかな」と期待感をもっていた ・繰り返し＋αを少しずつ繰り返すことで上達した
中学部	・学びを実感できる体験（ワークシートにこだわらない） ・学んだことを生かせる場面設定（やれるできるという思いを育てる） ・常に意識できるような掲示物（キーワード、時期）	・具体的な課題の受け止めとして実感できるように、高等部の先輩からのアドバイスを得る体験を設定した ・生徒が学習したことや体験したことについて自分で書いたものを教室や廊下に掲示した	・家庭と学校での共通実践が必要 ・生徒にとって身近な先輩をもっと活用する	・作業学習に汎化する姿が見られた ・生徒が学んだ言葉の意味を正しく捉え、他の学習場面で、自分の行動と結び付けて発言できるようになった
高等部	・学習シートの蓄積 ・日常のあらゆる場面に学びのチャンス、つなげる意識をもつ ・生徒との面談による成果と課題のすり合わせ	・授業シート、宿題シートを作成し、家庭ともつなげた ・学びをつなげるために教師が意識的に言葉掛けをした	・学習シートが蓄積になっていないこともある ・学年間や学年を超えた教師間の共有が大切 ・実態によっては面談が難しい生徒もいるため、実施方法の工夫が必要	・生徒の気付きが増えた ・自分の成長を把握するとともに、次の目標に意欲的になった ・日常生活場面で生徒が学びを生かしている

＜表２＞職員アンケートⅠ・Ⅱ結果より（職業・家庭科ＷＧ　一部抜粋）

カテゴリー【授業づくり】

項目	小	中	高	全体	全体増減
⑧「めあて」と「振り返り」の整合性を意識した授業をしている	３．２９	３．１７	３．００	３．１７	＋０．２６
	２．８６	３．８６	３．５６	３．４３	
⑨教師は、児童生徒が学びをつなぐための支援を工夫している	３．００	２．８３	２．８０	２．８９	＋０．４６
	３．１４	３．５７	３．３３	３．３５	
⑩児童生徒は、学んだことを次の学習に生かしている	２．８６	２．６７	３．００	２．８３	＋０．２６
	３．００	２．８６	３．３３	３．０９	
⑪児童生徒は、他教科に学びをつなげている	２．５７	２．５０	２．８０	２．６１	＋０．５２
	３．１４	３．００	３．２２	３．１３	

7　まとめ

(1)　成果

児童生徒の意識の変容

学びの積み重ねを意識した取組みにより、児童生徒の学習への理解が深まり、小学部では好きなものが増えたり、中、高等部では自発的な発言が見られたりした。また「児童生徒が学びをつなげる授業づくりのための教師の支援」の成果や、児童生徒の変容にもあるように、動画の活用により、学習の初めと現在の比較のしやすさから、児童生徒が自身の変容について考える姿が見られた。身近な先輩から得たアドバイスを、日々の学習活動の中で、児童生徒自身が意識するなど、学びを他の場面で生かす姿が見られた。授業実践３では、自分の進路実現について、具体的に見通しをもち始めたことがうかがえる。また、職員アンケート⑪「児童生徒は他教科に学びをつなげている」が 0.52 ポイントと増加していることからも、他の教科に学びをつなげている児童生徒が増えたと考えられる。

児童生徒の学びをつなげる教師の意識の高まり

小学部、中学部、高等部の学部を越えて「職業・家庭科」に関する学習内容について話合ったことで、「職業科」「家庭科」につながる学習内容や系統性、児童生徒の姿の確認、情報交換ができた。そのことは、小学部、中学部、高等部へのつながりを教師が意識することにも有効であった。職員アンケート⑨「教師は、児童生徒が学びをつなぐための支援を工夫している」が 0.46 ポイント増加していることからも児童生徒の学びをつなげる教師の意識が高まっていることがうかがえる。

中学部「職業・家庭科」新設に向けた学習内容の整理と検討

令和３年度中学部職業・家庭科に関する学習内容参考一覧を活用して、中学部の各学年の学習内容と３年間を見据えた学習内容の整理、検討をしたことが、次年度からの「職業・家庭科」新設につながった。生徒や教師のメリットなどから、中学部段階で「職業・家庭科」を新設し、系統立てた学習内容の中で具体的な取組をする意義が明らかになったと思われる。

未来へのスケッチの活用方法の情報交換により児童生徒が自分事として取組む姿に

未来へのスケッチの活用方法や事例の紹介などにより、各学部の成果や課題を共有し、教師の意識が変わってきたと感じる。また、『児童生徒が日々の生活で教師と一緒に取り組んだり、自分から未来へのスケッチの目標を意識して体力トレーニングで努力を重ねたりする姿に結びついた。』という成果を実感する職員がいるなど、児童生徒の主体的な姿が見られた。これは、目標設定や活用の仕方について教師の理解が深められたことによるものと考えられる。

(2)　課題

児童生徒が学びをつなげる姿の教師間の共有

授業実践２の課題から、目標の意識が薄れたり、忘れたりする生徒に対して、学んだことを他の場面でも意識して行えるように、学部職員や関係する職員間で生徒の目標を共有し、日常的に即時評価を行える環境を整えることが大切である。生活全体に学びをつなげるためにも、児童生徒の学びに関わる情報や支援について、教師全員で共通理解をした上で指導にあたる必要がある。

中学部「職業・家庭科」の授業の充実に向けた学習内容参考一覧の継続的な活用と検討

令和４年度中学部職業・家庭科に関わる学習内容参考一覧を作成したが、活用するには見やすさや使いやすさを探ることも大切である。生徒のよりよい学びに向けて授業づくりができるように、引き続き詳細な検討が必要である。また、学年ごとに示した学習内容をそのまま取り入れるのではなく、生徒の実態や学年相応の学びに合わせた学習計画を立てる指標であることを周知し、検討する必要がある。

未来へのスケッチと個別の支援計画、個別の指導計画とのつながり

児童生徒の実態によっては活用方法にさらなる工夫が必要であるが、効果的な活用方法や家庭との連携など継続して検討する必要がある。

また、事例紹介や活用方法など情報共有はできたが、小学部、中学部、高等部への学びのつながりについて話し合いを深めるにはいたらなかった。次年度は目標設定、評価の時期に、定期的に検討を進め、学部間の学びのつながりを確認しながら取り組む必要がある。合わせて、検討する際には個別の支援計画と個別の指導計画の内容を十分に踏まえる必要がある。

８　次年度（２年次）に向けての提言

中学部「職業・家庭科」の実践と検討

来年度の「職業・家庭科」新設に向けて曜日や時期を固定した取組みなどにより、生徒自身も自分から「職業・家庭科」の見通しをもち、授業の準備をするなど、学習への意識が一歩進んだと思われる。学年によっては家庭科の内容が少ないなど、課題が挙げられたため、生徒の実態や生活年齢に応じてバランスよく「職業・家庭科」の学習ができるように十分な検討が必要である。また、高等部の「職業科」「家庭科」の取組み方や家庭、寄宿舎との連携などの取組を参考にしながら実践することも必要である。さらに、児童生徒の学びをつなげるために、中学部の「職業・家庭科」を中心に、小学部や高等部の授業を見合い、検討を重ねていくことも求められる。

各学部の「職業・家庭科」に関連した授業と、各教科等とのつながりの整理

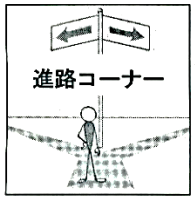
今年度、各教科等で児童生徒たちが学びをつなげる姿が各学部で見られた。社会生活をする上で、必要な力をバランスよく身に付け、日常生活に生かそうとする児童生徒の育成を目指すために、教育課程全体で児童生徒の姿をとらえなければならない。そのためにも、今後、各教科等とのつながりや学習内容について、年間指導計画やデザインミーティングの様式を見直したり、整理したりすることで、児童生徒の学びを学校生活全体で捉え、効果的な指導に結び付けることができるのではないかと思われる。

未来へのスケッチの活用方法と学部間のつながりの検討

今年度、未来へのスケッチを学部内で活用する方法について共有した。来年度はさらに個別の支援計画や個別の指導計画のつながりを確認する必要がある。また、学部間のスムーズな移行に向けて、未来へのスケッチが個人ファイル化することを考えている。小学部から中学部へ、中学部から高等部へ、高等部から卒業後の生活に向けて、児童生徒が主体的に活用するためにはどのようなことができるか、さらに検討を重ねる必要がある。

＜資料１＞児童生徒が学びをつなげる授業づくりのための教師の支援（高等部１年学年通信より）

○高等部共通実践事項：「日常のあらゆるつなげる意識を場面に学びのチャンス　つなげる意識をもつ」手段として、学年通信を利用している。生徒の学びを家庭での般化や生活に生かすことができるように、共通理解しておきたいポイントを授業の様子と一緒に紹介している。



「卒業後の社会生活に向けて～Ⅰ期校内実習が始まります～」

６／６（月）よりⅠ期校内実習が始まります。高等部入学後、初めての実習となります。

実習の目的は

①挨拶やマナー、身だしなみ、時間を守るなど、働くために必要な基本的な力を身に付ける。

②依頼された作業の仕上がりや納期を意識して作業に取り組み、働くことへのやりがいを感じたり、就労へのイメージをもったりする。

この２つです。今回の校内実習をスタートとして高等部卒業まで、働く力や基本的生活習慣、社会人としての常識を学びながら現場実習などを経験し、卒業後の自立と社会参加に向けて様々な力を身に付けていきます。生徒たち自身が校内での実習に真剣に取り組むことはもちろんですが、実習の中では家庭での生活も大変重要です。**①早寝、早起きなどの基本的生活習慣の確立、②充実した余暇時間を過ごす**など、毎日の仕事に集中するための生活の仕方を、学校だけではなく家庭の方でもお子さんと一緒に考えて実践していただきたいです。特に、放課後や休日などの充実した余暇時間の過ごし方は、今のうちに身に付けなくてはいけない部分です。**③良好な人間関係作り、⑤善悪をきちんと判断しての行動、⑥マナーを守った公共施設の利用**など学校の方でも何度も話をしていますが、家庭でも外出する際の確認や家族で話題にすることを繰り返し行ってほしいと思います。そして、次の日に備えてしっかり休養することも今から定着させてほしいです。この機会に普段の家庭での生活を一緒に振り返り、卒業後の社会生活に向けた生活の仕方を一緒に考え、実習期間だけではなく高等部での３年間をとおして実践してみてください。

進路コーナー

寄宿舎での活動の紹介

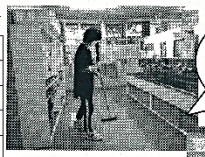
９月に入り、暑い日や大雨の日など天気の状況も日々変化する毎日ですが、生徒たちは体調管理をしっかりしながら元気に学習に取り組んでいます。さて、今回は寄宿舎での生活を紹介したいと思います。寄宿舎生活でどのようなことを学ぶかや、卒業後に向けてどのように力をつけていくのかなどを寄宿舎の先生や実際に生活している生徒などに話を聞いてきました。

＜寄宿舎について＞　主任寄宿舎指導員　佐藤菜穂子先生

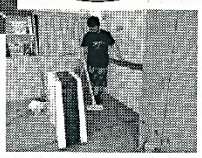
寄宿舎では「ほっとする場、やすらぎの場」として、基本的生活習慣の確立を目指し、集団生活を通して「協力」、「思いやる心」を育て、卒業後の社会生活に必要な力が身に付くように努めています。そのために生徒は、基本的生活習慣の定着を目指し、洗濯や掃除、衣類の畳み方や収納方法、入浴の仕方やマナー等、日々の生活の中で身に付けられるように、取り組んでいます。また、路線バスや電車を利用した自力帰省、帰舎についても、段階的に取り組んでいる生徒がいます。

＜寄宿舎の日課＞

６：３０	起床	着替え、布団上げなど
７：００	朝の会	人員確認、ラジオ体操
７：３０	朝食	手洗い、うがい
８：００	部屋掃除	掃除機掛け、拭き掃除
８：３５	登校	
１５：１０	下校	
１７：３０	夕食	夕食後入浴
１９：２５	自習時間	宿題など
２０：００	夜の会	人員確認、検温
２１：３０	消灯	



「清掃」
共有場所や自室を毎日清掃しています。



職場見学を終えて

今回は、鳥海フォス施設長、廣瀬産業社長の講話からお伝えします。

＜鳥海フォス標語＞・人に愛されること　・人に褒められること
・人の役に立つこと　・人に必要とされること

鳥海フォスでは、一人一人の利用者さんが、自分のペースでじっくりと仕事に向き合う合う姿が印象的でした。また、複雑な作業であっても、繰り返し行うことで、作業の仕方や効率的に動くなど働く上で必要な力が身に付けられると思いました。じっくりと人や物と向き合いながら自分に自信を付け、働く意欲や喜びを知ることが就労継続支援Ｂ型の良さだと感じました。

＜廣瀬産業社長講話から＞社会人になるということ

１．学校を卒業し、親の保護から離れ、一定の収入を得て生活をする。→自立、自活
２．仕事を通じて社会との関わりを持つ
３．自分の意志で物事を決め、自分の言動に責任を持つ→社会から求められている力
４．ルールを守り、他人に迷惑をかけないように行動する→事故、怪我、トラブルは×

上記の４つのお話は、つまりは社会に求められている「社会人像」です。特に、廣瀬産業社長が何度もお話されていたのが「自分の意志で物事を決める」ということでした。そのためには高等部生のうちから「自調自考（自分で調べて自分で考える）」ことを習慣付けることが大切だそうです（「自分で考える」「自分で判断する」「自分で選択する」）。一般就労を目指す場合は、「社会や会社に求められる働く人」に今の自分をどれだけ近づけられるかが鍵になります。

冬休み明けの進路の面談もありますので、以上のお話を参考に是非ご家族でお子さんの進路について話をする機会をもっていただきたいと思います。

令和４年度　中学部　職業・家庭科に関する学習内容参考一覧（案）

職場見学等、内容や目的が段階的に見えるとよい。

	１年生［知　る］	２年生［広げる］	３年生［深める］
職業に関する学習内容	○中学部スタート Ａ（イ） ・レクリエーション、友達を知る、自己紹介 ○未来へのスケッチ Ａ（ア）（イ） ・自分の好きなこと、将来の夢 ・個人目標 ○未来へ向かって Ａ（ア）、Ａイ㋐㋑、Ｃ（ア）（イ） ・食品加工班でワンコインランチ利用 ・高等部校内実習見学 ・福祉施設見学（Ｂ型） （→のちにＡ型、一般事業所へ） ・職場見学 ○	○２年生スタート Ａ（イ） ・レクリエーション、友達を知る、自己紹介 ○未来へのスケッチ Ａ（ア）（イ） ・自分の得意なこと、やってみたい仕事、自己理解 ・個人目標 ○未来へ向かって Ａ（ア）、Ａイ㋐㋑、Ｃ（ア）（イ） ・高等部作業学習・校内実習見学 ・福祉施設、職場見学 ・食品加工班でワンコインランチ調理体験	○３年生スタート Ａ（イ） ・レクリエーション、友達を知る、自己紹介 ○未来へのスケッチ Ａ（ア）（イ） ・自分の長所、短所、自己理解、他者理解 ・個人目標 ○未来へ向かって Ａ（ア）、Ａイ㋐㋑、Ｃ（ア）（イ） ・高等部体験（着替え、体力トレーニング、作業学習、職業科） ・高等部作業学習、校内実習、実習報告会見学 ・福祉施設、職場見学 ・職場体験（１日） ・高等部入学者選考：面接練習
年間	○調べ学習　Ｂアイ　・タブレットの活用、情報モラル 情報機器の活用：１年慣れる→２年調べる→３年プレゼンする。（案） ○作業学習　Ａア（ア）（イ）（ウ）、Ａイ（ア）㋐㋑㋒㋓㋔（イ）㋐㋑㋒　・作業学習、自立活動パワーアップ週間 ○動画での振り返り　Ｂア　・タブレットの活用		
家庭に関する学習内容	○「～衣食住の衣の巻～１」 Ｂウ（ア）（イ） ・きれいな衣服、衣服の手入れ ・洗濯、アイロン（ハンカチ、はちまき） ・裁縫、結び方 ○「～衣食住の食の巻～１」 Ｂイ（ア）（イ）、Ｃア（ア）（イ） ・買い物（楽しむ） ・公共交通機関の利用 ・簡単な調理：準備、電子レンジ、ポット炊飯器の利用、包丁の利用、片付け ○「～衣食住の住の巻～１」 Ｂエ（ア）（イ） ・家庭の中での役割 ・簡単な手伝い	○「～衣食住の衣の巻～２」 Ｂウ（ア）（イ） ・洗濯、アイロン（豆絞り） ・縫い物（ほつれ直し、安全ピンの利用） ○「～衣食住の食の巻～２」 Ｂイ（ア）（イ）、Ｃア（ア）（イ） ・買い物（上手な買い物） ・公共交通機関の利用 ・簡単な調理：包丁の利用（形を揃える等）鍋やフライパンコンロの利用 ○「～衣食住の住の巻～２」 Ｂエ（ア）（イ） ・家庭の中での役割 ・掃除の仕方～掃き方、拭き方	○「～衣食住の衣の巻～３」 Ｂウ（ア）（イ） ・洗濯、アイロン（エプロン、半纏） ・縫い物（ボタン付け）、ミシンの利用 ○「～衣食住の食の巻～３」 Ｂ１段階イ、Ｃ２イ（ア）（イ） ・買い物（良い安い品物、相談） ・公共交通機関の利用 ・簡単な調理：包丁の利用（野菜→肉など切る手順を知る）、バランスのよい食事 ・弁当作り（おにぎり、つめるだけ弁当） ○「～衣食住の住の巻～３」 Ｂエ（ア）（イ） ・家庭の中での役割 ・簡単な家事
	○２年生に向けて Ａア（ア） ・１年会の振り返り ・３年生を送る会	○自分の成長を振り返ろう Ａエ（ア）（イ） ・小さい子どもと遊ぼう	○自分の成長を振り返ろう Ａア（ア）（イ） ・卒業文集制作
年間	○長期休業の過ごし方　Ａイ（ア）（イ）Ａウ（ア）（イ）　・家庭での役割、余暇の過ごし方 ○校外学習　Ｃア（ア）（イ）　・予算内の買い物 ○給食　Ｂア（ア）（イ）　・食事のマナー ○日常生活の指導　Ｂウ（ア）（イ）、Ｂエ（ア）（イ）　・着替え、衣類の整理、清潔、清掃 ○地域貢献活動　Ａ2エ（ア）（イ）、Ｃイ（ア）（イ）　・クリーンアップ、近隣施設、町内との交流 ○ピカピカデー（特活）　Ｂエ（ア）（イ）　・清掃、整理整頓		

		１段階		２段階
Ａ職業生活	ア　働くことの意義	（ア）　働くことの目的、知る （イ）　意欲や見通し、自分の役割、気付く （ウ）　作業や実習等、達成感を得る	ア　働くことの意義	（ア）　働くことの目的、理解する （イ）　意欲や見通し、自分と他者との関係や役割、考える （ウ）　作業や実習等、達成感を得る、進んで取り組む
	イ　職業	（ア）知識や技能 ㋐　知識や技能、知る ㋑　社会の仕組み、知る ㋒　材料や育成する生物等の扱い方、生産や生育活動等、知る ㋓　使用する道具等の扱い方、慣れる ㋔　持続性や巧緻性、身に付ける （イ）　思考力、判断力、表現力 ㋐　作業、実習との関連、気付く ㋑　安全や衛生、気付き、工夫する ㋒　健康管理、気付く	イ　職業	（ア）知識や技能 ㋐　知識や技能、理解する ㋑　社会の仕組み、理解する ㋒　材料や育成する生物等の特性や扱い方、生産や生育活動等、理解 ㋓　使用する道具等の扱い方、理解 ㋔　確実性や巧緻性、身に付ける （イ）　思考力、判断力、表現力 ㋐　作業、実習との関連、考えて、発表 ㋑　安全や衛生、作業の効率性、考えて、工夫 ㋒　健康管理、考える
Ｂ情報機器の活用		ア　情報機器の初歩的な操作、知る イ　情報機器に触れ、他者に伝える		ア　情報機器の基礎的な操作、知り、扱いに慣れる イ　情報機器を扱い、体験したことや自分の考えを表現
Ｃ産業現場等における実習		ア　関心をもったり、調べたりする イ　気付き、他者に伝える		ア　調べて、理解する イ　自己の成長、考えて、発表する
Ａ家族・家庭生活	ア　自分の成長と家族	（ア）自分の成長、家庭生活の大切さ、知る （イ）家族とのやりとり、家族を大切にする気持ち、気付き、他者に伝える	ア　自分の成長と家族	（ア）自分の成長、家庭生活の大切さ、理解 （イ）家族とのやりとり、家族を大切にする気持ちを育み、気付き、他者に伝える
	イ　家庭生活と役割	（ア）家庭における役割、地域との関わり、関心をもち、知る （イ）家庭生活に必要なこと、自分の果たす役割、気付き、他者に伝える	イ　家庭生活と役割	（ア）家庭における役割、地域との関わり、調べ、理解 （イ）家庭生活に必要なこと、家族の一員として、自分の果たす役割、考え、表現
	ウ　家庭生活における余暇	（ア）健康や様々な余暇の過ごし方、知り、実践しようとする （イ）望ましい生活環境、健康及び様々な余暇の過ごし方、気付き、工夫	ウ　家庭生活における余暇	（ア）健康管理や余暇の過ごし方、理解し、実践する （イ）望ましい生活環境、健康管理及び自分に合った余暇の過ごし方、考え、表現
	エ　幼児の生活と家族	（ア）幼児の特徴や過ごし方、知る （イ）幼児への適切な関わり方、気付き、他者に伝える	エ　家族や地域の人々との関わり	（ア）地域生活や地域の活動、調べ、理解する （イ）家族との触れ合い、地域生活に関心、家族や地域の人々と地域活動への関わり、気付き、表現
Ｂ衣食住の生活	ア　食事の役割	（ア）健康な生活と食事の役割、知る （イ）適切な量の食事、楽しくとる、気付き、他者に伝える	ア　食事の役割	（ア）健康な生活と食事の役割、日常の食事の大切さ、理解 （イ）日常の食事の大切さ、規則正しい食事の必要性、考え、表現
	イ　調理の基礎	（ア）簡単な調理の仕方や手順、知り、できるようにする （イ）簡単な調理計画、考える	イ　栄養を考えた食事	（ア）身体に必要な栄養、関心をもち、理解し、実践 （イ）バランスのとれた食事、気付き、献立などを工夫
			ウ　調理の基礎	（ア）調理に必要な材料の分量や手順、理解し、適切にできる （イ）調理計画に沿って、調理の手順や仕方、工夫
	ウ　衣服の着用と手入れ	（ア）場面に応じた日常着の着方や手入れの仕方、知り、実践しようとする （イ）日常着の着方や手入れの仕方、工夫	エ　衣服の着用と手入れ	（ア）日常着の使い分けや手入れの仕方、理解し、実践 （イ）日常着の快適な着方や手入れの仕方、考え、工夫
	エ　快適な住まい方	（ア）住まいの主な働き、整理・整頓や清掃の仕方、知り、実践しようとする （イ）季節の変化に合わせた住まい方、整理・整頓や清掃の仕方、気付き、工夫	オ　快適で安全な住まい方	（ア）快適な住まい方、安全について理解し、実践しようとする （イ）季節の変化に合わせた快適な住まい方、気付き、工夫
Ｃ消費生活・環境	ア　身近な消費生活	（ア）生活に必要な物の選び方、買い方、計画的な使い方、知り、実践しようとする （イ）生活に必要な物、選んだり、物を大切に使おうとしたりする	ア　身近な消費生活	（ア）生活に必要な物の選択や扱い方、理解し、実践 （イ）生活に必要な物について考えて選ぶ、物を大切に使う工夫
	イ　環境に配慮した生活	（ア）環境に配慮した物の使い方、知り、実践しようとする （イ）環境に配慮した物の使い方、考え、工夫	イ　環境に配慮した生活	（ア）環境に配慮した物の使い方、理解し、、実践 （イ）環境との関わりや環境に配慮した生活、考え、物の使い方などを工夫

保健体育科ＷＧ

研究主題

「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成（１年次／２年計画）

１　児童生徒の実態

小学部は、走る、回る等体を動かすことが好きな児童が多く、業間運動（以下にこにこタイムとする）等繰り返しの活動に時間いっぱい取り組んでいる。運動好きではあるが、体力や体の細かい使い方、チームプレイやルール理解等に課題がある。

中学部は、昨年度までの２年間、「児童生徒による学習評価の充実」の研究主題の下、保健体育科の授業実践に取り組んだ。年間を通じて同じ流れの授業、技能ポイントの明示を繰り返したため、生徒も自分の成長や成果を実感しながら取り組んでいる。単純なルールのある競争を楽しみ、水泳や整列等は、繰り返すことで伸びが見られるようになってきた。一方で、経験不足により、苦手な動きが多いことが課題である。

高等部は、運動が好きな生徒が多く、実態別グループや自己選択種目を設定することで、運動が苦手な生徒も意欲的に取り組む姿が見られるようになってきた。学校以外の場で運動する生徒が少ないのが課題である。

２　教育課程上の現状と課題

小学部の体育は週１回２単位時間の授業と毎日 15 分のにこにこタイム、中学部の保健体育は週１回２単位時間の授業と毎日 25 分の体力トレーニング（以下、体トレとする）、高等部の保健体育は週１回２単位時間の授業のみで、毎日 15 分の体トレは日常生活の指導として取り扱っている。

昨年度までの中学部の研究実践では、教育課程編成に向けての提言として、「武道の実施」、「12 年間を見通した単元の検討（小・中・高の学びのつながり、余暇や生涯スポーツへ）」が挙げられ、『児童生徒が学びをつなぐ』教育課程の編成のために、以下の点が課題となっている。

- 中学部・高等部ともに「武道」が未実施、学習指導要領の着実な実施に向けて単元の設定・学習内容の整理が必要である。
- 各学年の学習の積み重ね、小・中・高の学びをつなげる学習内容の工夫、生涯スポーツ・運動習慣へつなげる学習内容の工夫が必要である。
- 保健体育の免許保有者数の学部による偏り、校内・地域資源（人材）の活用、場所や学習用具の不足が課題である。

児童生徒の実態と教育課程上の現状と課題から、今年度（１年次）の目指すゴールを次のように設定した。

３　今年度（１年次）の研究の目指すゴール

(1) 学びの積み重ねが見える学習履歴の蓄積
(2) 学習指導要領に基づく各学部における学習内容の押さえ
(3) 校内体力テストを実施し、弱点項目を学習計画に反映
(4) 校内・地域資源を活用した本物体験を取り入れた実践
(5) 学部間・学年間等のつながりを意識した実践

４　主となる研究対象の教科等

小学部：体育科、中学部・高等部：保健体育科

５　内容と方法

【Ａ：実態把握、Ｐ：単元計画】（４～５月）

○授業デザインミーティングⅠ→・各学部で児童生徒の実態や課題、授業の展開の工夫や手立てについて情報共有
・他学部のＷＧメンバーが参加し、意見交換・情報共有

○体力テスト【１回目】の実施、分析

【Ｄ：授業実践】

(1)　学びの積み重ねが見える学習履歴の蓄積
- 昨年度の中学部の研究成果「授業づくりの５つの視点」を各学部で継続
- 指導に関する児童生徒の変容についての情報交換、指導記録の蓄積

(2)　学習指導要領に基づく各学部における学習内容の押さえ
- 中学部と高等部の武道の実施

(3)　校内体力テストの結果を生かした実践
- 体力テストの弱点項目や苦手な動きを取り入れた学習内容の実践
- 体を動かす習慣づくりに向けた取り組み

(4)　校内・地域資源の活用
- 校内職員（剣道経験者）による武道の実施【中・高】
- 地域の外部講師による本物体験
- 外部からの体育用具の借用

(5)　学部間・学年間等のつながりを意識した実践
- 集団行動やラジオ体操の指導方法の情報共有
- 次の学部や生涯スポーツにつながる学習内容の実践

☆授業研究…校内授業研究会（高等部／９月）
保健体育科ＷＧ授業研究会（小学部高学年／11 月）

【Ｃ：評価、Ａ：改善】

○授業デザインミーティングⅡ（８月）→・前期の反省や課題、年間指導計画の評価や見直し
・授業づくりについて、ＷＧメンバーによる意見交換・情報共有

○体力テスト【２回目】の実施、分析（11～12 月）

○授業実践の評価・改善

Ｐ：学習指導要領に基づいた３年間を見据えた年間指導計画の作成
（次年度の年間指導計画の作成を含む）

６　研究の実際

(1) 実態把握と単元計画

①授業デザインミーティングⅠ・Ⅱの実施

授業づくり・授業改善に向けて意見交換をしたり、アドバイスをもらったりできるように、年度初め（４～５月）と夏休み（８月）に授業デザインミーティングを実施した。授業研究会の対象学部（小学部高学年、高等部）については学部の体育担当だけでなく、他学部の保健体育免許保有者やＷＧメンバー、授業アドバイザー、教育専門監等が参加し、意見交換・情報共有を行った。悩んでいることや意見をもらいたいことを話題にしながら、授業づくりや手立ての工夫について話し合った。

また、「児童生徒の学びをつなぐ」という視点で、今年度各学部で力を入れたいことについてＷＧメンバーで共通理解しながら、授業づくりや検討事項等を話し合った（図１）。

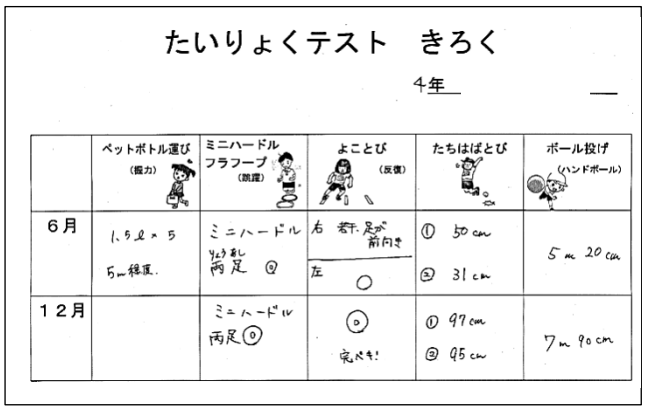
「児童生徒の学びをつなぐために、各学部で力を入れたいこと」（6／22学部 WG より）

【小学部・低】	高学年へのスムーズな接続ができるように、基本的な学習態度（整列、 合図を聞いて動く、座り方等）を身に付け、色々な運動に親しんだり、体力の向上を図ったりする。 →そのために、やることがわかる手立ての工夫（視覚的情報の活用、目標シート、活動の流れの提示）や運動量（時間）の確保を図る。
【小学部・高】	中学部を見据えて、運動の楽しさを感じながら苦手な動きにも挑戦する姿を目指して、スモールステップになるような頑張りシートを活用する。
【中学部】	達成感を得たり、運動する楽しさを知り、生涯スポーツにつなげたりできるように、体力テストの結果を分析し、他の単元の指導に生かす。
【高等部】	好きな運動を見付け、充実した地域生活や生涯スポーツにつなげる単元の設定（スポーツ団体との連携、体力つくり、長期休業中の課題・宿題等の設定）。

＜図１＞各学部の児童生徒の学びをつなぐための実践事項

②体力テストの実施

児童生徒の得意・苦手な動きを把握できるように、５～６月と 11～12 月に校内体力テストを実施した。中学部・高等部は新体力テストの種目（８種目）を実施し、小学部は児童の実態に応じた種目（５種目）を行った（図２）。



たいりょくテスト　きろく

4年＿　＿

	ペットボトル運び（握力）	ミニハードル フラフープ（跳躍）	よことび（反復）	たちはばとび	ボール投げ（ハンドボール）
6月	1.5l × 5 5m 往復.	ミニハードル Yよりも 両足 ②	右 苦手 足が前向き 左 ○	① 50 cm ② 31 cm	5 m 20 cm
12月		ミニハードル 両足 ◎	◎ 完ぺき!	① 97 cm ② 95 cm	7 m 90 cm

＜図２＞小学部高学年：体力テスト（記録シート）

体力テスト「ボール投げ」
（小学部高学年）

⑵ 学びの積み重ねが見える学習履歴の蓄積

①「授業づくりの５つの視点」の共通理解

昨年度の中学部保健体育科の研究成果「授業づくりの５つの視点」を今年度も継続できるように、年度始めにＷＧ研究会で確認し、各学部の実態に応じて継続していくことを共通理解した。

授業づくりの５つの視点
①学習計画、段階表の提示
②運動ポイントの提示
③体育ノートの活用
④動画の活用
⑤ペアやグループワーク

②児童に関する記録の蓄積

次年度や次の学部に引き継ぎできるように、指導に関する児童生徒の実態・変容について、単元ごとに教師側で記録し、蓄積した。

③体育ファイルや掲示物・カードの活用

学びの積み重ねとして児童生徒自身が運動のポイントや成長を実感できるように、体育シートやファイル、掲示物やカードを作成した。

小学部低学年は、児童の実態に 合わせて周回数や達成度が分かる掲示物やカードを準備した（56 ページ授業実践に掲載）。

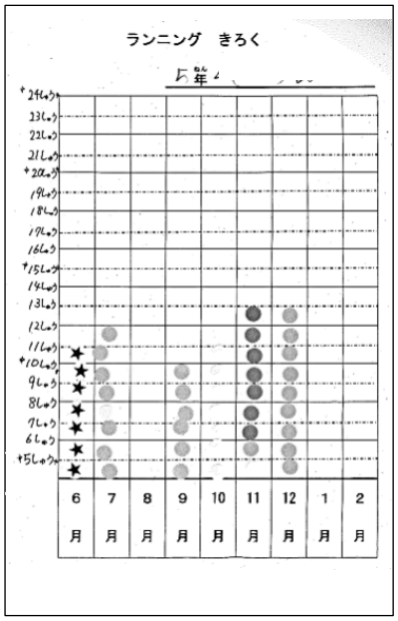
小学部高学年は、今年度より体育ファイルを準備し、学びの足跡としての体育シートを蓄積した。前時に記入した運動ポイントを書き込んだシートを授業の始めに見返したり、にこにこタイムの持久走の記録や頑張りの積み重ねとして活用したりした（図３）。

中学部は、昨年度の反省をふまえ、単元の始めと終わりに体育シートへ記録を記入し、運動量を確保しながらふりかえりができるような活用をした（図４）。

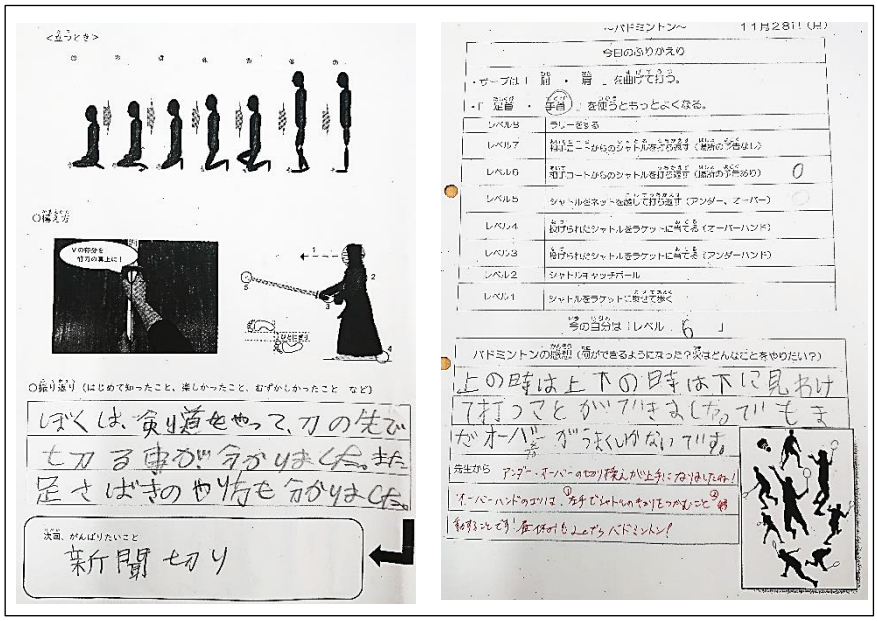
高等部では保健体育ファイルを準備していない学年もあったため、全学年でファイルを準備し、これまでの体育シートを整理した。

前回のポイントの確認
（小学部高学年）

体力テストの結果を
見返す（高等部）



＜図３＞小学部：ランニング記録シート



＜図４＞中学部：体育ノート

(3) 学習指導要領に基づく各学部における学習内容の押さえ

①武道の実施

今年度は、中学部・高等部の武道で剣道を実施した。本校の教員に剣道経験者が多く、地域に協力してくれる指導者がいたことから剣道の実施につながった。

地域の指導者による
剣道の指導
（中学部・高等部）

②学習指導要領の内容の着実な実施に向けて

学習指導要領に記載されている内容を実施できるように、年度初めに年間指導計画（今年度、昨年度）の学習内容について指導要領の内容とすり合わせ、履修状況をチェックした。年度末は、来年度の年間計画（案）をＷＧメンバーで作成しながら３年間（小学部は低学年３年間、高学年３年間）の履修内容を確認し、３年間でほぼ全ての内容を学べるような年間指導計画を作成した。

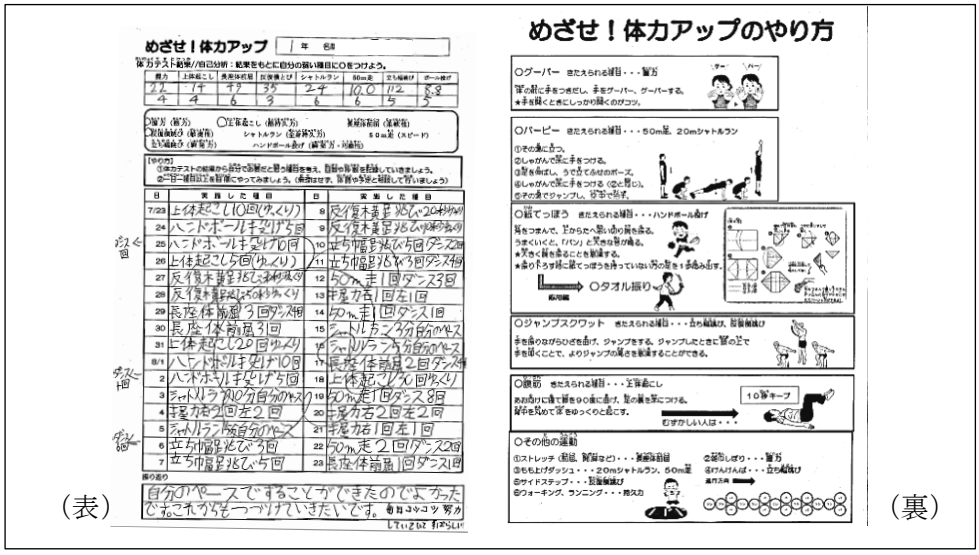
(4) 校内体力テストの結果を生かした取り組み

体力テストは結果が数値で現れるため、伸びが分かりやすい。児童生徒の運動能力の向上を目指し、弱点項目を学習計画に反映させる等、体力テストの結果を活用した授業づくりを行った。

小学部では定期的に体力テストを行い、記録をとった。低学年は、ボディイメージや体の使い方に課題のある児童が多いため、体の各部分を意識したり、正しく体を動かしたりするための授業づくりに取り組んだ（56、57 ページに詳細掲載）。高学年は、ボールを使った運動やゲームに「ボール投げ」を取り入れ、投げる距離を伸ばすための姿勢や腕の動かし方を身に付けるための授業づくりに取り組んだ（58、59 ページに詳細掲載）。

中学部は、体トレを活用し、体力テストを複数回実施した。「体の使い方が分からない生徒が多い」ことが中学部生徒の課題の一つであることから、計測方法や体の使い方を覚える場面を複数回設定した（60 ページに詳細掲載）。

高等部は、体力テストの記録を点数化し、生徒自身が自分の得意・不得意を知るとともに、卒業後の運動習慣のきっかけづくりとして長期休み中に「体力アップ」の宿題を出した（図５）。



（表）　（裏）

＜図５＞高等部：夏休み「体力アップ」シート

(5) 校内・地域資源の活用

各学部、次の領域で校内・地域の人材を活用して授業づくりを行った（表１）。

＜表１＞校内・地域の人材を活用した授業一覧

学部	内容	人材	実施内容	児童生徒の様子
小学部	ボール遊び、ボールを使った運動やゲーム	TDK 野球部 ブラウブリッツ秋田	野球教室 サッカー体験	新鮮なものに影響を受ける児童もいた。喜んで活動していた。
	表現遊び 表現運動	地域のダンス講師	ダンス教室	意欲的に取り組んでいた。その後の授業にも反映できている。
	＜高学年＞ 全内容	中学部教員（保健体育免許保持者）	高学年の体育に参加 児童への体育指導 教員へのアドバイス	児童も教師もすぐにアドバイスをもらうことができ、意欲・運動能力の向上につながった。
中学部	ダンス	地域のダンス講師	ヒップホップダンス	授業以外も踊る姿が見られた。
	武道	校内の剣道経験者 地域の指導者	剣道	服装を見るだけでも意欲につながった。礼儀作法、ルールやマナーを守ることも意識付けできた。
高等部	体つくり運動	高等部教員	ヨガ	生徒のペースに合わせた動きや言葉掛けにより、ゆっくり体を動かすことができた。
	ダンス	地域の ジムトレーナー	ボクササイズ	運動が苦手な生徒も講師の雰囲気に合わせ、時間いっぱい体を動かすことができた。
	保健	養護教諭	手洗い、歯磨き指導	生徒の実態に合わせた専門的な視点による指導で、歯医者への通院につながった生徒もいた。

※その他、北都銀行バドミントン部（高３）との交流、地域のネオホッケーチーム（高ネオホッケー）、体育・保健体育の授業以外では、ブラウブリッツ秋田（サッカー部）、総合的な探究の時間や生活単元学習で TDK 野球部（高３、中１）、ブラウブリッツ秋田（高２）と体育的内容の交流を行った。

※校内では体育用具が不足していることから、地域の学校よりマット（中学部・高等部：器械運動）、地域の指導者より剣道用のタイヤの打ち込み台と模擬刀（中学部・高等部：武道）、地域の公民館よりフェンス（高等部：ネオホッケー）を借用した。

小学部低学年：TDK 野球教室

中学部：ヒップホップダンス

高等部：ボクササイズ

(6) 学部間・学年間等のつながりを意識した取組み

①集団行動やラジオ体操の指導方法の情報共有

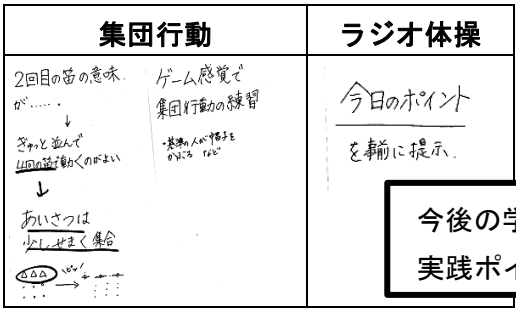
集団行動とラジオ体操は、各学部で共通して実践している。高等部の集団行動の動き方とラジオ体操での体の動かし方を、教科ＷＧ研究会で教員自身が動きながら確認した。

集団行動については小学部→中学部→高等部へのつながりを意識し、各学部で今後実践していくポイントについて検討した。小学部は「これまで３つの笛で動いていたが、４つの笛で動く」、中学部は「これまで教師を基準としていたが、生徒を基準とする」等、高等部につながるポイントを確認した。

ラジオ体操については 13 の動きがあることを確認した。１つ１つの動きのポイントを教師が理解し、にこにこタイムや体トレで「今日のポイント」を伝え、正しい動きを確認しながら体を動かした（図６）。

【研修会（集団行動】
夏休み中の
ＷＧ研究会で実施

【授業実践】
今日のポイント
「体をねじる運動」



今後の学習に取り入れる
実践ポイント（小学部）

＜図６＞小学部：集団行動・ラジオ体操における実践

②学部間の接続や生涯スポーツへの発展を意識した実践

小学部高学年の授業に中学部の保体免許保有教員が参加した。中学部につながる授業づくりとして、中学部の取り組みを聞いたり、中学部を意識した体育ファイルやがんばりシートを作成したりした。

中学部の剣道に、高等部で剣道を指導した教員が参加した。中高のつながりを意識しながら、高等部で行った基礎的な内容を中学部でも取り入れた。

高等部では、余暇につながる学習内容を設定した。家で動画を見ながらできるような運動（ボクササイズ、ヨガ）に取り組んだり、冬休みの体力アップの課題では日常の生活でできる運動についても紹介したりした（図７）。

＜図７＞高等部：家庭でできる運動例

(7) 授業実践

【授業実践１】　小学部低学年（１～３年）　体育科

・児童の実態　☆目指す姿
・体を動かす遊びや、簡単なルールのある遊びを好む。 ・ボディイメージが十分に育っていないため、思うように体を動かすことが難しい。 ☆友達や教師と一緒に体を動かす楽しさや心地よさを味わい、感じた気持ちや言葉や身振り、表情等で表現する。

＜実施時期：６月＞　「器械・器具を使っての遊び」～マット、平均台、跳び箱等～

単元名	いろいろな動き①～マット、平均台、跳び箱～
単元目標	・基本的な器械・器具を使った運動の楽しさを感じながら、その行い方を知ったり基本的な動きを身に付けたりする。【知識及び技能】 ・マットや平均台等を使って運動する楽しさを言葉や身振り、表情等で表す。【思考力、判断力、表現力等】 ・簡単なルールを守って安全に運動する。【学びに向かう力、人間性等】
単元計画	・平均台を使った運動遊び→直進、横歩き、静止して片足立ち ・トランポリン→上下の揺れ ・マットを使った運動遊び→横転がり、膝立ち歩き、前転 ・跳び箱を使った運動遊び→よじ登り、跳び下り、またぎ乗り、またぎ下り ・ハードルやラダーを使った運動遊び→一定のリズムで歩いたり走ったりして飛び越える。

教師の主な支援	児童の様子（○：成果、▲：課題）
①板書の工夫 ・活動内容や約束が分かるように、文字情報に加えてイラストを提示する。	○イラストを活用したことで、文字を学習中の児童も活動内容や活動のおおまかな流れに見通しをもつことができた。
②運動のポイントを意識する工夫 ・各運動のポイントが分かるように、演示に加えてポイントを動物等の動きに例えて伝えたり、イラストを提示したりする。	○マットでの膝立ち歩きを「小人になろう」、平均台の横歩きを「カニさん歩き」等と、児童にとって分かりやすい言葉でポイントを伝えたり、イラストを掲示したりしたことで、それぞれのポイントを意識しながら楽しく運動できた。 ▲ポイントとなる動きの伝え方→今後、「カニさん歩き＝横歩き」等が分かるような段階的な言葉の指導も必要である。
③自分事として取り組み、十分な運動量を確保するための工夫→がんばりシート（図８） ・自分で各運動を盛り込んだサーキット運動の目標周回数を設定する。また、目標を達成できたかどうか評価する時間を設ける。	○自分で目標周回数を設定し、見える場所に掲示したことで、「(目標よりも) 多く回ろう」と意識し、十分な運動量を確保することができた。また、一つ一つの動きに繰り返し取り組む回数も増え、正しい動きの習得にもつながった。 ▲目標周回数を記入することに時間を要する。

授業改善のポイント

・めあての確認と振り返りの仕方の工夫→意欲や主体性の向上が図られたので、より一層の技能面の向上を意識できるような導入と振り返りにする。
・達成感や満足感を高められるような支援の工夫→即時評価に加えて賞状やメダル等の活用。

＜実施：11、12 月＞　「表現遊び／表現運動」～身近な生き物等の真似、ダンス～

単元名	まねっこめいじんになろう
単元目標	・基本的な表現運動に慣れ、楽しく運動したり、表現したりする。【知識及び技能】【思考力、判断力、表現力等】 ・簡単な振り付けをしたダンスをする。【学びに向かう力、人間性等】
単元計画	・親しみのある動物の動きのまね→しろくま(高這い)、ペンギン(膝立ち歩き)、かめ(ずり這い)、あざらし(横転がり)、とびうお(両足ジャンプ) ・ダンス→「ツバメ」「マリオ」

教師の主な支援	**児童の様子（○：成果、▲：課題）**
①めあての確認と振り返りの工夫 ・ゴールを明確にするために、めあてを「○○と△△になって、からだをうごかそう」と習得したい動きを動物に例えて提示した。また、習得したい動きを教師が演示し、ポイントをイラストと文字で掲示した。 ・振り返りで「まねっこめいじん(動きの特徴を捉えて活動した児童)」を紹介し、運動の様子を見合う場面を設定した。	○「まねっこめいじん」である忍者に教師が扮して演示を行ったことで、児童の演示への注目度が高まった。また、ポイントの掲示は、短期記憶に弱さのある児童にとって、習得したい動きを確認することに有効であった。 ○児童の実際の動きと言葉で振り返りを行ったことで、「うまくできた」と達成感を得たり、「次やりたい(発表したい)」と意欲が高まったりした。
②達成感や満足感を高められるような支援の工夫 ・学習の積み重ねや頑張りが見えるように、「みならいカード」(図９）を用意し、毎時間カードにシールを貼った。また、単元終了時に「まねっこめいじん認定証」を渡した。	○シール自体を励みにしたり、シールが増えるにしたがって「まねっこめいじん」に近付いていることを実感したり等、満足感を得ている理由は様々だったが、どの児童も「みならいカード」にシールが貯まっていくことを喜んでいた。また、「まねっこめいじん認定証」を用意したことで、「まねっこめいじん」になれたことに大きな達成感を感じていた。

＜成果と課題＞　○：成果　▲：課題

○文字の読み書きを未習得である児童が多いため、視覚的な支援(イラストや写真、演示等)を工夫したことが、児童が学習に見通しをもったり、学習履歴を確認したりすることに有効だった。
○ゴール(習得したい動き)を明確にしたことで、焦点化された児童の動きや言葉での振り返りができるようになった。
▲高学年や中学部を見据え、国語科の学習とリンクさせながら、文字の読み書きの習得度に応じてノートやシートを活用する機会を設けていきたい。

＜図８＞がんばりシート

＜図９＞みならいカード

【授業実践２】　小学部高学年（４～６年）　体育科　「ボールを使った運動やゲーム」

：　ＷＧ授業研究会対象授業

・児童の実態　☆目指す姿
・９月の記録会（ボール投げ）の様子で、投げる手が顔の位置から振り下ろしている。腕の振りが弱い。 ・自分から進んで運動に取り組めない児童がいる。 ☆基本的な上手投げの動作を知り、体の動かし方を工夫して投げる。 ☆時間いっぱい進んで運動に取り組む。

＜実施時期：10 月＞

単元名	とおくになげよう
単元目標	・上手投げで、投げる手を頭より高い位置から振り下ろして投げる。【知識及び技能】 ・がんばりポイントに関する体の動かし方を工夫したり、友達や教師と運動の楽しさを伝えたりする。【思考力、判断力、表現力等】 ・投げる動作の上達を実感しながら、安全に楽しく運動をしようとする。【学びに向かう力、人間性等】
単元計画	・ボール投げ記録会 ・シャトル投げゲーム ・的当てゲーム「鬼をやっつけろ」 ・道具を使った投げる練習「ロープスロービーム」「ロープスローロケット」「山を越えろ」

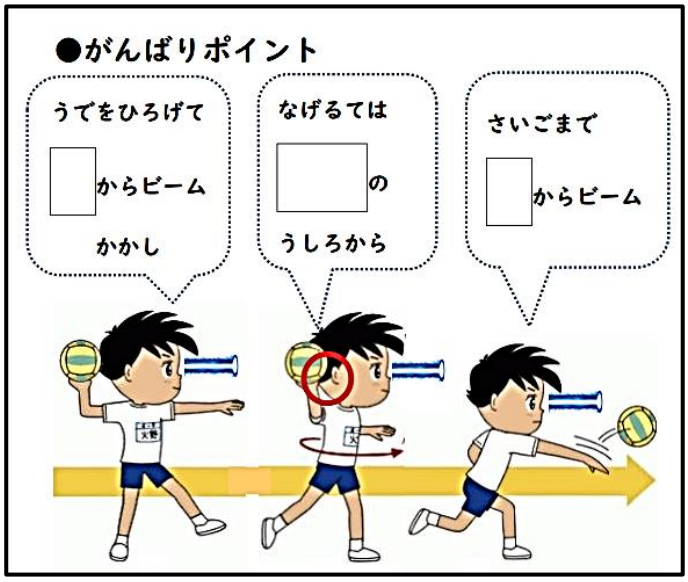
教師の主な支援	児童の様子（○：成果、▲：課題）
①体育ファイルとシートの活用 ・児童が学習の目標を決めたり、振り返ったりできるように、児童にとって分かりやすい運動動作のイラストや、「がんばりポイント」の言葉を端的に示した「がんばりシート」を活用する。	○「がんばりポイント」を意識して投げたり、口ずさんだりする児童がいた。 ▲導入時、「がんばりシート」の記入に時間が掛かった。
②教材教具と環境の工夫 ・全員の運動量を充分に確保できるように、小グループ制にしたり、複数の運動コーナーを設置したりする。 ・「がんばりポイント」を踏まえて練習を行うことで運動能力を伸ばせるように、生活の中にある身近な物で難易度に配慮した教材を使用する。	○小グループ制にしたことで、運動が控えめな児童も運動場所が確保されたり、教師の支援を受けやすかったりしたため、安心して運動に取り組む姿が見られた。 ○複数の運動コーナーを設置し、時間で区切って取り組めるようにしたことで、全員が時間いっぱい新鮮な気持ちで運動できた。 ▲一人ずつ行うコーナーでは、順番待ちのため待ち時間が長かった。 ○投げる動きが苦手な児童も楽しみながらできるようになることを実感して取り組んだ。 ▲児童は遊ぶ感覚で夢中になってボールを投げるため、ねらいとする動きを忘れてしまったり、教師がじっくり教えることができなかったりした。

授業改善のポイント

・授業内での「がんばりシート」の活用方法
・待ち時間を少なくし、運動時間を確保
・活動内容の整理

＜実施：11 月＞

教師の主な支援	児童の様子（○：成果、▲：課題）
①「がんばりシート」の活用 ・導入時、全員が「がんばりポイント」を意識できるように、シートの文面を穴埋めにし、シールを用いる（図 10）。	○全員が短時間で「がんばりポイント」を意識できた。
②運動時間の確保 ・待ち時間を少なくして、十分に運動できるように、一人で運動できるコーナーを設置する。	○一人で取り組めるコーナーを設置したことで、運動時間をさらに伸ばすことができた。
③活動内容の整理 ・「がんばりポイント」を意識して投げる練習ができるように、夢中になって投げることができる自由度が高い運動と、教師がじっくり指導できる運動とで活動を前後半に分ける。	○活動内容を整理し、教師が児童の個に応じて良い動きを身に付ける指導ができたことで、「がんばりポイント」をより意識して投げる児童が増えた。
＜成果と課題＞　○：成果　▲：課題	
○「がんばりシート」で目標が明確となり、児童は単元を通して見通しをもって取り組むことができた。 ○小学部版体力テストの実施から児童の苦手な体の動かし方が分かり、教材教具に反映することができた。また、記録の比較から本人が成長の伸びを実感できた。 ▲小学部児童の一部は、自分でファイルのシートの記入や管理が難しかった。 ▲年度初めに体力テストを行うことで、その結果を基に年間指導計画の組み立てに反映することができれば良い。	



＜図 10＞がんばりシート

ロープスローロケット

＜表２＞ボール投げ記録会の結果

	A（4年男）	B（4年女）	C（5年男）	D（5年女）	E（6年男）	F（6年女）
9月	6.3m	2.0m	9.0m	2.7m	5.6m	4.8m
11 月	8.5m	2.8m	13.0m	4.5m	8.0m	8.0m

【授業実践３】中学部　保健体育科

「体力トレーニング」（ランニング、ダンス、剣道、球技）

・生徒の実態　☆目指す姿
・自分の目標に向かって意欲的に運動する生徒と、運動に苦手意識がある生徒で運動量に差がある。 ☆自分の目標に向かって、休まず運動を続ける。 ☆保健体育の時間で学習した内容を復習し、知識・技能を深める。

＜実施時期：年間通して＞

単元名	体力トレーニング	
単元目標	・目標をもって運動し、走る、跳ぶ、投げる等の基本的な体の動かし方を高めたり、様々な運動種目のやり方を覚えたりする。【知識及び技能】 ・記録向上に向けて体の動きを自分で考えたり、友達の動きを見たりアドバイスを受けたりして運動する。【思考力、判断力、表現力】 ・記録や得点が伸びる楽しさを知り、進んで運動する。【学びに向かう力、人間性】	
単元計画	・屋外でのランニング（１周約 200m）　・体育館でのランニングサーキット ・ラジオ体操　・バドミントン、剣道等授業時間の内容に関連した運動	
教師の主な支援		**生徒の様子（○：成果、▲：課題）**
①自分の記録が分かるように周回数を記録する ・移動式ホワイトボードとマグネットを使って個人の周回数を記録する。		○前回と比較して成長喜んだり、次回は頑張ろうと気を引き締めたりしていた。 ▲自分の周回数を数え間違えたり、教室で記録するまでに忘れたりする生徒がいた。
②保健体育の授業時間と関連づけて学習指導要領８領域の内容を取り扱う ・「水泳」と「保健」以外の６領域について、保健体育の授業と関連付けた運動を短時間でも取り入れる。		○数多くの運動を経験し、生徒が自分の「好き」「得意」に気が付く場面が見られた。 ○保健体育の授業の事前や事後学習として教師が実態把握をしたり、知識・技能の定着に繋がったりした。
③数値の変化を生徒が実感できるよう体力テストを実施する ・１～３学期で１回ずつ、計３回実施する。 ・目指す姿を共有し、２、３回目は実施種目を絞り込んで実施する。		○複数回実施したことで、計測方法を理解し、正確に計測できている生徒が増えた。 ○数値の向上が分かり、体力的な成長を喜ぶ姿が見られた。 ▲数値が下がると、残念がったり「もう１回」と悔しがったりしていた。

＜成果と課題＞　○：成果　▲：課題
○個人の記録を数値化し、前回と比較できたことで、その日の運動について生徒が自己評価した。 ○様々な種目を取り入れたことで、初めての運動に熱心に取り組む生徒や、技能が大きく向上した生徒がいた。 ▲日々の記録を付けたが、変化が分かりにくく、十分に活用できなかった。変化が見えるような記録の仕方と、記録を生かした目標設定や効果的な指導の工夫が必要である。

「武道」～剣道～

・生徒の実態　☆目指す姿
・竹刀や防具に触れたことのある生徒はおらず、「剣道」という言葉自体を聞くのが初めての生徒が多い。 ・剣（長い棒状の物）を見ると振り回したり、攻撃的な言動を取ったりする生徒もおり、安全面への指導や配慮が他の単元以上に必要である。 ☆剣道の伝統的な礼法や所作に触れ、落ち着いて授業に臨む ☆剣道の楽しさを知り、積極的に授業に参加する

＜実施時期：12 月＞

単元名	剣道
単元目標	・伝統的な考え方、技や礼等の名称や行い方を知り、落ち着いて座礼をしたり、大きな動作で面打ちをしたりする。【知識及び技能】 ・ペア同士で相手の良い動きや改善点を考えたり、動き方のポイントを相手に伝えたりする。【思考力、判断力、表現力】 ・技ができる楽しさや喜びを味わい、安全に気を配りながら積極的に練習する。【学びに向かう力、人間性】
単元計画	・礼法（立礼、座礼、黙想、左座右起）　・剣道教室　・リズム剣道 ・面打ち（素振り、模擬刀での打ち込み）・新聞切り

教師の主な支援	生徒の様子（○：成果、▲：課題）
①武道の楽しさに触れ、親しめるよう、指導する内容を精選する。	○講師の先生が用意した危険性の少ない模擬刀を使用することで、恐怖心をあまり持たずに授業に取り組んだ。 ○木刀で新聞紙を切ったときには「できた！」と満足げな表情になる生徒がたくさんいた。
②正しい知識・技能を生徒が身に付けるため、専門家を活用する ・剣道の指導に携わる専門家に依頼し、剣道教室を実施する。 ・体育担当（剣道未経験者）の授業でも技術指導や成り立ちや用具等の知識について、専門家に協力を依頼する。	○専門家が見本を示しながら正確な技術を指導したことで、刀を頭上まで振り上げるようになる等、目に見えて進歩した生徒が多くいた。 ▲本校教員が主導した場面では、タイミングや重心の位置等、動きの改善のためのポイントを生徒に合わせて分かりやすく提示することが難しかった。
③系統性のある指導にするため、高等部との情報を共有する。 ・単元計画を授業担当者間で確認し、内容を検討する。 ・使用する道具や場所について事前に確認し、共有したり、分けて使用したりする。	○事前に高等部の担当者とも打ち合わせを行い、高等部につながるように、基本の礼法と面打ちを取り入れた。 ○事前に木刀や竹刀を購入したり、地域の指導者より借用した模擬刀を融通したりして、運動量の確保や真剣な雰囲気作りができた。

＜成果と課題＞　○：成果　▲：課題
○８領域全てを取り扱い、様々な運動に触れた。特に武道については、専門家に指導を依頼したことで、正しい知識を分かりやすく指導でき、生徒自身が「できた」という思いを感じられた。 ▲単元の最後にまとめとしてワークシート等に振り返りをしたが、毎時間の成長を実感する手段にはなり得なかった。運動の時間を確保しつつ、毎時間の記録の積み重ねが見える方法については検討が必要である。

【授業実践４】　高等部　保健体育科　「球技」～ネオホッケー～　：　校内授業研究会対象授業

・生徒の実態　☆目指す姿
・ネオホッケーへの興味関心が高い。 ・休日の運動習慣が少なく、運動に苦手意識がある生徒がいる。 ・友達と言葉を掛け合いながらポジショニングできる。 ☆友達同士で言葉を掛け合い、連携して個々の役割を果たす。 ☆課題のプレイについて生徒同士で動きを相談して実践する。 ☆自分で状況を判断したり、友達の声を聞いたりして動く。 ☆体を動かすことに楽しさを感じ、休日に運動する。

＜実施時期：８月＞

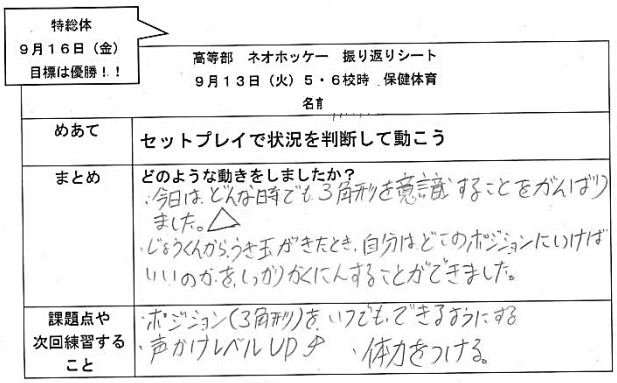
単元名	特別支援学校総合体育大会に向けて　～ネオホッケー～
単元目標	・ネオホッケー競技の楽しさや勝利の喜びを味わい、目的に応じた技術とポジショニングを身に付ける。【知識及び技能】 ・自分とチームの良さや課題に気付き、よりよいプレイのために仲間と相談し判断したことを、目的や状況に応じて友達や教師に伝える。　【思考力、判断力、表現力】 ・ルールやマナー等を守り、自分の役割を果たし、自信をもって運動する。【学びに向かう力、人間性等】
単元計画	・基礎練習（スティックやボールの操作、ボールを打つ際の体の使い方等） ・浮き球の打ち方、捕り方 ・オフェンスとディフェンスの連携 ・セットプレイの動きや役割の確認 ・本番に近い形でのゲームやケース練習等の実践

教師の主な支援	生徒の様子（〇：成果、▲：課題）
①浮き球処理のポイントや見本の提示 ・浮き球が来た際に、ボールを止めてキープしたり、味方が有利な方向に打ったりできるように、浮き球の処理の練習場面を設定した。	〇浮き球処理の練習では、気を付けの姿勢でボールを止めてから、キープする動作が身に付いてきた。 ▲浮き球の落下地点に合わせて移動することが難しい生徒がいた。
②即時評価による自分のポジション・役割の確認 ・周りの状況を見て、自分から動けるように、良いプレイについて即時評価した。	〇ケース練習中に、即時評価を繰り返したことで、似たような場面でも自分からボールに反応できた。 〇生徒同士で言葉を掛け合い、連携して動けた。 ▲動ける範囲が広がったことで、ポジションが重なる場面が見られた。
③伝え合ったり、連携し合ったりするための場面の工夫 ・セットプレイ（シューティングラインからのフリーストローク）では、オフェンスとディフェンスの連携がとれるように、ゲーム形式の練習を設定した。	〇オフェンスでは、１人の生徒がサインを出して打つコースを決め、２人の生徒がこぼれ球をカバーして得点につなげた。 〇ディフェンスでは、相手が打つ場所から見て、ゴールが隠れるように３人で壁を作った。 ▲誰がボールを捕りに行くのか、曖昧になる場面があった。

授業改善のポイント
・ゲーム中の動きが視覚化できるような作戦ボードの活用
・即時評価と、生徒同士の言葉掛け、役割分担の明確化

＜実施：９月＞

教師の主な支援	生徒の様子（〇：成果、▲：課題）
①ポジションの視覚化 ・生徒がゲーム中の動きをイメージ化できるように、作戦ボードを用意し視覚化したり、ポジションごとの動きを言語化して掲示したりした。	〇ゲーム中に作戦ボードを活用したことで、オフェンスでは「三角形を作る」という動きが具体的にイメージでき、実践できた。 ▲ポジションごとの動きについて「行くか行かないかの判断は友達の名前を呼ぶ」、「こぼれ球を壁側に打ち返す」、「とにかくゴールに向かってシュートを打つ」、「すぐ打てる準備をする」等キーワード化した。
②状況判断ができるような、セットプレイの場面設定 ・セットプレイ中の動きを判断できるようにディフェンスやオフェンスの動きを即時評価し、「どう判断して動いたか」発問した。	〇セットプレイでは、ディフェンスとオフェンスに分かれてそれぞれの動きを即時評価したり、生徒の考えを肯定しながら聞いたりしたことで、考えて動けるようになった。 〇発問による課題意識やケース練習を繰り返したことで、友達同士で作戦会議をしたり、お互いに言葉を掛け合ったりして、連携して動く姿が見られた。
③即時評価と具体的な指示 ・本時の成就感につながるように、良いプレイに対して即時評価し、ゲームではポジションごとに具体的に指示を出した。次時への期待感がもてるように、ゲーム中の課題を次回のめあてにした（図 11）。	〇練習やゲーム中の良いプレイを即時評価したことで、自信をもってプレイできた。 〇ゲーム中の指示は、場所と役割を具体的に伝えると自分で状況を判断して動けるようになってきた。ゲーム中の課題を、生徒の言葉でまとめたことで、次時への期待感につながった。
④本番の会場に近い環境整備と、外部講師への指導依頼 ・会場の広さがイメージできるように、地域の公民館からフェンスを借用して設置した。 ・技術や知識の向上に繋がるように、専門知識をもった外部講師に指導を依頼した。	〇本番と同じ広さのコートにしたことで、自分の動く範囲がどこまでか、具体的に確認できた。 〇地元のネオホッケーチームの選手を外部講師として招いたことで、練習の質が向上したり、生徒たちの意欲が増したりした。浮き球の打ち方や、オフェンスの連携の仕方を学ぶと、すぐに実践しようとする姿が見られた。
＜成果と課題＞　〇：成果　▲：課題	
〇振り返りシートを活用したり、上手くいかなかった場面で発問したりしたことで、生徒の言葉で課題を言語化できた。 〇セットプレイでは、自分で状況を判断して動いたり、友達に言葉を掛けて要求したりできた。 ▲卒業後の運動習慣に繋がるような、生徒が必要性を感じて取り組める運動内容の提示。	


特総体
9月16日（金）
目標は優勝！！

高等部　ネオホッケー　振り返りシート
9月13日（火）5・6校時　保健体育
名前

めあて	セットプレイで状況を判断して動こう
まとめ	どのような動きをしましたか？ ・今日は、どんな時でも3角形を意識することをがんばりました。△ ・じょうくんからうき玉がきたとき、自分はどこのポジションにいけばいいのかをしっかりかくにんすることができました。
課題点や次回練習すること	・ポジション（3角形）をいつでもできるようにする ・声かけレベルUP！　・体力をつける。

＜図 11＞次時につながるワークシート

7　まとめ

(1) 成果

①児童生徒の変容について

小学部	・児童にとって分かりやすいがんばりポイントを示したことで、学習に見通しをもって運動に取り組んだ。 ・にこにこタイムで細かい身体の動かし方を繰り返し取り組んだことで、様々な運動、技能の向上につながった。 ・月１のランニング記録会を行ったことで、運動意欲の向上、体力アップにつながった。
中学部	・ラジオ体操の動きに関して、１つ１つの動きを丁寧に、繰り返し扱うことで、正確な動きができるようになった。 ・体トレと授業の学習内容を関連付けたことで、動き方や基本的な操作の向上につながり、記録の伸びや体力向上等が見られた。
高等部	・選択種目を設定し、生徒が自己選択・決定したことで、運動が苦手な生徒や活動に消極的な生徒も最後までやり遂げる姿が見られた。 ・校内・地域の専門家に指導を受け、本物に触れることで、積極的に活動に取り組んだり、自分の考えを深めたりする場面が増えた。 ・目標を設定することで、目標周数を意識して走ったり、回数が増えたりした。

②「児童生徒が学びをつなぐ」ための授業づくり・支援の工夫

ＷＧメンバーでの情報交換・実践共有による授業づくり・授業改善の意識向上

教科ＷＧで保健体育科に関する研究を進めたことで、他学部の実態や取組みを知ることができ、自分の学部の実践に生かすことができた。また、デザインミーティングでの意見交換も授業づくりの参考になり、授業改善を図ることができた。

教科ＷＧ研究会の様子

（「倒立」の指導ポイント）

授業づくりに関するアンケートの結果（表３）から、保体ＷＧ教員の「学びをつなぐ」視点での授業づくりに関しては数値が大幅（0.4ポイント以上）に増加しており、教科ＷＧでの研究実践を通して、学んだことを他教科や家庭生活等につなげていこうとする意識の高まりが見られた。

＜表３＞保健体育科ＷＧ教員に対する授業づくりに関するアンケート結果　～一部抜粋～

項　目	平均値		増減
	5月	12月	
⑩児童生徒は他教科に学びをつなげている	2.70	3.14	+0.44
⑪児童生徒は、家庭生活や寄宿舎生活に学びをつなげている	2.60	3.05	+0.45

※評価基準　４：よくしている　３：ときどきしている　２：あまりしていない　１：ほとんどしていない

体育シートの活用による次の学部や運動習慣への学びのつながり

小学部では、中学部へつなぐ授業実践として初めて体育シートを作成した。シート記入に時間がかかり、運動時間が減ってしまう場面が見られたが、手書きによる記入ではなくシールを貼ることで時間短縮につながり、活用できた。学習履歴や運動ポイントの確認、できた実感の積み重ねとして学習シートを活用できた。

高等部では、卒業後につながる授業実践として、長期休み中の「体力アップ」の宿題を出した。生徒自身が自分事として捉えて取り組み、継続したことで効果を実感したり（柔軟性アップ、できなかった動きができるようになった等)、自分で決めた運動に取り組むことで達成感を得たりすることができた。卒業後を見据え、家でも運動する意識付けとして効果があった。

校内・地域資源の活用による児童生徒の意欲・体力の向上

外部指導者による本物体験は、児童生徒の意欲・運動能力が向上し、運動が苦手な児童生徒も時間いっぱい取り組んだ。単元を始めるきっかけづくり・動機付けとして効果があり、専門的な知識や技術・体の動かし方等指導の面でも学ぶ点が多く、指導の在り方の見直しにつながった。

校内人材の活用については、小学部高学年で中学部の教員が、中学部の剣道で高等部の教員が授業に参加したことで、学部間のつながりを意識した指導ができた。校内には様々なスポーツを経験してきた教員がいる。校内人材を活用しながら指導していくことで、児童生徒の運動技能や意欲を高めるきっかけになった。

(2) 課題

学習指導要領に基づく学習内容の押さえ

学習指導要領の内容の着実な実施を目指したが、運動会や体育祭、特総体の練習に多くの時間が費やされ、時期が決まっていることもあり、他の学習内容を実施できる時期・時数が限られてしまう等の課題が挙げられた。また、高等部では全員で剣道を実施するには道具不足という課題もあり、自己選択種目の３種目の中に剣道を取り入れ、３年間に１回は選択して実施したいと考えている。

学習指導要領の内容を着実に実施するために、毎年やるべき内容、３年スパンでやる内容等、学習内容を精選し、３年間を見据えてバランス良く計画することが必要である。

体力テストの実施時期や活用方法の検討

体力テストは、児童生徒が自分の成長を実感する場面の一つである。今年度、体力テストの結果から苦手としている動きを学習内容に反映させ、結果（数値）の向上を目指した。しかし、年間指導計画作成後に体力テストを行うことから、苦手な動きを学習に取り入れることが難しかった学部もある。また、「弱点項目を向上させるのではなく、得意な項目を伸ばすことも大切」という話がＷＧ研究会で話題となった。

児童生徒にとって自分の成長を実感できる体力テストになるように、項目や実施時期、にこにこタイム・体トレと関連付けた学習内容・活動を検討する必要がある。

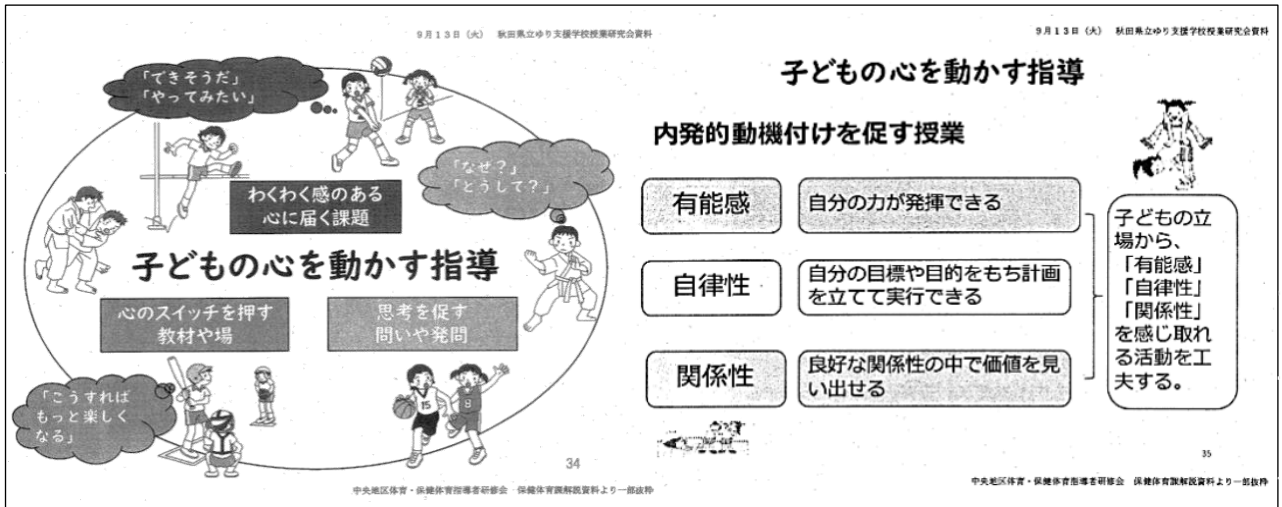
８　次年度（２年次）に向けての提言

児童生徒が自分事として捉え、自分自身の成長を実感できる授業づくり

高等部の体トレが、次年度からは保健体育としての指導となる。学習指導要領の内容の着実な実施に向け、授業とにこにこタイム・体トレの内容を関連付けながら学習計画を立て、児童生徒が今まで以上に「やってみたい」「楽しい」「できるようになった」「もっとやりたい」と達成感や満足感を実感できるような実践を積み重ねていきたい。そのためには、体力や技能面の向上だけでなく、体を動かすことの楽しさを十分に味わえるような授業づくりが大切である。わくわくする課題の設定、自分で試してみる時間の確保、動き方のポイントやコツを考える時間の設定等、児童生徒の心を動かす指導ができるような授業づくり・授業改善を今後も行っていきたい。

また、「児童生徒の活動に対する意欲付けとして、成果を発揮する場や成果を見合う場面があれば良い」という意見がＷＧ研究会で挙がった。特総体の練習であれば、大会の結果が成果を発揮

できる場となるが、学習活動の多くは授業内に完結してしまう。中学部では、ヒップホップダンスを学校祭で発表したことで保護者に成果を見てもらうことができた。また、小学部高学年ではランニング記録表を廊下に掲示して友達の成果を見合うことで、友達よりもたくさん走りたいという意欲が高まった児童もいた。成果を見える化し、運動に向かう意欲をさらに高めていきたい。



校内授業研究会　指導助言資料（助言者：中央教育事務所　久米美樹指導主事）

学びを積み重ね、学校や家庭での運動習慣・生涯スポーツへつなげる学習内容の工夫

児童生徒の実態に応じて学びの積み重ねを意識した学習活動や教材等を工夫したことで、できる動きが増えたり、記録が良くなったりしたことを児童生徒自身が実感できる場面が見られた。この成果が運動習慣や卒業後の生涯スポーツにつながるように、体育・保健体育の授業だけでなく、学校生活の様々な場面で体を動かす活動を設定したり、家庭でもできるような運動・ダンスを授業に取り入れる、動画サイトを紹介したりする等、日常生活に生かすことができるような視点で学習内容を工夫することも必要である。そのために、体育・保健体育の授業に限らず各教科と関連付けた取り組みについても考えていきたい。

また、系統的な視点から学部間のつながりや学びの積み重ねを意識した授業づくりも必要である。中学部を見据えて外でランニングをする（小：高学年）、研究対象となる学習内容を絞り込んで各学部の段階表を作成する等、学びの系統性や積み重ねを意識した実践を充実させていきたい。

校内・地域資源（人材）活用の継続と様々な指導場面との関連

今年度の校内の保健体育免許所有教員は、小学部２名、中学部２名、高等部７名であった（高等部は内４名が保健体育の授業担当者）。免許所有者が各学部にバランス良く配置されることが望ましいが、現実的には難しい。

今年度、ＣＳ（コミュニティスクール）推進委員会で「人材ボランティアバンク（校内）名簿」として、教員の得意なことを集計した一覧表を作成した。次年度も年度初めにＣＳ推進委員と連携しながら名簿を作成し、教員の得意なスポーツを把握したい。そして、校内人材を活用した授業を計画し、今年度のように免許所有教員や専門的な知識や技術を持った教員が他学部で指導できるような弾力的な活用を継続したい。

また、地域のスポーツチームとの交流については、イベントで終わらないようにし、単元の一部としての年間指導計画への位置付けを明確にして交流を行いたい。

寄宿舎

「生徒が学びをつなぐ」日常の生活指導の取組（１年次／２年計画）

１　生徒の実態

寄宿舎では昨年度までの２年間、生徒や保護者の願いを聞き、一人一人の実態に応じて目標を明確にしたおおぞらシートの作成と活用、生徒が考えて生活できる環境づくりに取り組んできた。２年間の取組を通し、目的をもち、自分で考え、意欲的に生活したり、友達と協働して生活したりする生徒の姿が見られるようになった。一方、寄宿舎で身に付けた力を家庭や学校生活などでは、十分に活用できていない生徒の様子も見られる。生徒が学びをつなぎ、寄宿舎以外でも身に付けた力を生かして生活していくためには、日常の生活指導の改善と、これまで以上の保護者、学部職員との連携が必要と考える。

２　生活指導現状と課題

(1) 現状

寄宿舎の生活指導は、日常の生活指導グループを中心とした指導と、おおぞらシート（将来の生活でできるようになりたいことを生徒が記入するシート）を活用した個別の生活指導を柱として行っている。各指導の現状については、以下のとおりである。

日常の生活指導グループを中心とした生活指導

基本的生活習慣の習得と定着を目指し、「食事・健康管理」「入浴・身なり・洗濯」「清掃」の３グループに職員が分かれ、勉強会や日々の生活指導について計画し、指導を行っている。

おおぞらシートを活用した個別の生活指導

生徒が記入するおおぞらシートと､これを基に職員が作成する個別の生活指導計画を活用し、目標や指導方法などを保護者、学部職員と共有し、連携して指導を行っている。

(2) 課題

生徒が学びをつなぐためには、生徒の寄宿舎以外でも対応できる生活力と、やってみようとする意欲を育てることが必要であり、そのための生活指導の課題として以下の３つをあげた。

・職員用の指導テキストはあるが、生徒が使用、または活用できるテキストがない。
・職員主導の勉強会になりやすく、生徒が自分のこととして考えられないことが多い。
・おおぞらシートを活用した保護者、学部職員と連携した生活指導の充実を図る。

３　今年度（１年目）の目指すゴール

(1) 生徒用テキストブック（日常生活の知識や技術をわかりやすくまとめたもの）の作成と活用方法の提示
(2) 生徒主体の勉強会の計画実施
(3) おおぞらシートを活用した生活指導の充実

４　主となる研究対象の場面

日常の生活指導

5　内容と方法

(1) 生徒用テキストブックの作成と活用方法の提示

・指導項目の見直しと指導内容の整理
・テキストブックの内容と様式、活用方法の検討
・テキストブックの作成

(2) 生徒主体の勉強会の計画実施

・実施方法、日々の指導へのつなぎ方の検討
・勉強会の実施・評価・改善

(3) おおぞらシートを活用した生活指導の充実

・おおぞらシートと個別の生活指導計画の作成と実践
・保護者、学部職員と連携した指導

作成したテキストブックを勉強会などの生活指導で活用。
↓
実践・評価・改善を行う。

6　研究の実際

(1) 生徒用テキストブックの作成と活用方法の提示

指導項目の見直しと指導内容の整理（５月～７月）

・寄宿舎研究会で、「学びをつなぐ」を視点とし、日常の生活指導グループ毎に指導項目の見直しを行った。
・指導グループに分かれ、ワークショップを実施、項目毎に必要性・基本・応用に分け、指導内容の整理を行った(図１)。

テキストブックの内容と様式、活用方法の検討（７月～12 月）

・整理した指導内容を参考に、指導グループでのワークショップと全体での話し合いを行い、内容と様式を決定。生徒と職員がどのように活用していくかについて職員で共有した。

テキストブックの作成（12 月～２月）

・下記の内容について、テキストをパワーポイントで作成した。(表１)全職員が作成に関わることで、職員全体の資質の向上も図ることができた(図２)。

＜表１＞生徒用テキストブックの項目

食　事	手洗い・うがい	歯磨き	排　泄	生理の手当て	入　浴	洗　顔
整　髪	衣　服	汗の始末	ひげそり	洗　濯	掃　除	物の管理・整理

日常生活テキストブック（生徒用）【清掃グループ】

必要性	基　本	応　用
・健康にすごせる。 ・気持ちよく暮らせる。 ・社会人として役に立つ。	・掃除をする場所と頻度 ・掃除用具の名称と用途 ・掃除の基本 （掃く・拭く・掃除機） （上から下） （後片付け）	・トイレの掃除 ・お風呂の掃除 ・掃除の便利グッズ ・用具の手入れ

＜図１＞指導項目と内容の一例

・在学中から卒業後まで使える
・勉強会や日々の生活指導で活用できる
・応用は、生徒が知りたいことを教える
・いつでもカスタマイズできる

＜図２＞作成時のポイント

(2) 生徒主体の勉強会の計画実施

実施方法、日々の指導へのつなぎ方の検討（６月）／勉強会の実施・評価・改善（９月～２月）

・実施方法や勉強会を行う上での留意点、日々の指導へのつなぎ方について、ワークショップで検討し、ここで出た意見を基に勉強会を実施した。また、新たに職員用勉強会評価シート（図４）を作成し、主催した職員だけでなく、参加した職員も評価を行い、次回の勉強会に向けた改善点や日々の指導へどうつなげていくかを共有した。

・勉強会毎に生徒用の振り返りシート（図５）も作成し、生徒が自分の学んだことなどを確認できるようにした。今後、学んでみたいことを記入する欄も設け、生徒が何を知りたいのか考える機会になるように工夫をした。理解度や課題を知り、生徒が学びをつなぐための資料として、職員も活用することができた。なお、ワークショップでだされた意見の一部を図３に示した。

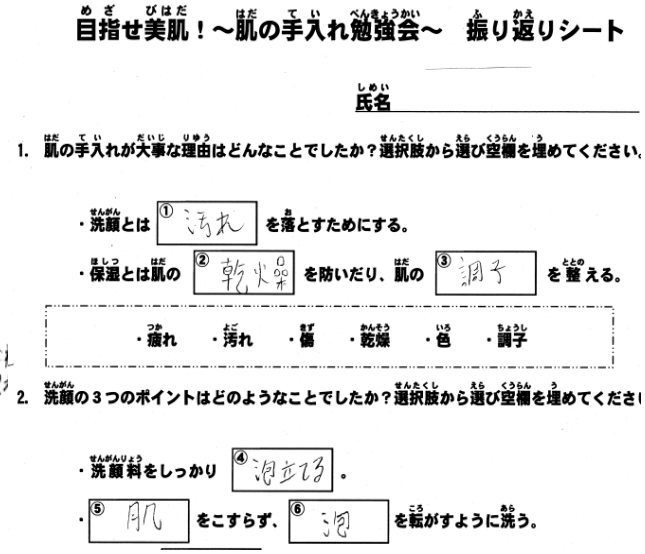
- 事前のアンケートや聞き取りをする
- これが何につながるかも併せて教える。
- 興味関心をもてる工夫。生徒が知りたいことを教える。
- 参加するかどうかや、内容を選べる選択制にする。
- 生徒が講師。お互いに教えあう。
- 自分で調べる。調べたことを発表する。
- 実際にやってみる。体験型の勉強会。
- 実態把握、下準備が大切。

＜図３＞ワークショップの意見の一例

３：できている　２：ほぼできている　１：あまりできていない

実態把握	1	生徒の興味関心、実態を基に勉強会を計画している。	3 (2) 1
	2	ねらいや生徒の目指す姿を明確にしている。	3 2 (1)
勉強会の計画・実施	3	勉強会の内容が生徒の実態にあっている。	(3) 2 1
	4	生徒が主体的に参加するための工夫がされている。	3 (2) 1
	5	生徒が内容を理解できるように工夫がされている。（ツール等）	3 (2) 1
	6	生徒が自身の課題や必要性がわかり参加している。（めあての提示）	3 (2) 1
学びをつなぐ工夫	7	生徒と振り返りや評価をしている。	3 (2) 1
	8	勉強会で学んだことを実践する機会や環境を設定している。	3 (2) 1
	9	生徒が学んだことを家庭や学校で生かしている。（学びをつなげている）	3 2 1
	10	指導内容を職員間で共有し、日々の指導に生かしている。	3 2 1
	＜自由記述欄＞ 計画の段階で振り返りシートに沿った話合いができればより良かったなと思います。		

＜図４＞職員用勉強会評価シート



目指せ美肌！～肌の手入れ勉強会～　振り返りシート

氏名

1. 肌の手入れが大事な理由はどんなことでしたか？選択肢から選び空欄を埋めてください。

・洗顔とは ① 汚れ を落とすためにする。

・保湿とは肌の ② 乾燥 を防いだり、肌の ③ 調子 を整える。

・疲れ　・汚れ　・傷　・乾燥　・色　・調子

2. 洗顔の３つのポイントはどのようなことでしたか？選択肢から選び空欄を埋めてください。

・洗顔料をしっかり ④ 泡立てる 。

・ ⑤ 肌 をこすらず、 ⑥ 泡 を転がすように洗う。

＜図５＞生徒用振り返りシート

【勉強会実践１】ひげそり勉強会

内容	ひげそりの必要性、電気シェーバーとＴ字カミソリの違いと使い方、 電気シェーバーの手入れの仕方
実施方法	男子生徒で希望者を対象、実際にシェーバーやＴ字カミソリを使用し実施した。

指導の工夫

・職員が実際にひげを伸ばし、電気シェーバーとＴ字カミソリの使い方を実演した。興味関心を引き出す工夫として、伸ばしたことで感じた肌の不調、周りの人からどう見られたかなど、実体験を話す。

・当て方やそり方、手入れの仕方を体験できるように、生徒自身の電気シェーバーやＴ字カミソリを使用する。

生徒の様子／変容

・実際に見たり体験したりすることで、興味関心をもち参加する姿が見られた。特に、用具の手入れの仕方は、初めて知る生徒も多く、関心が高かった。

・勉強会の内容を保護者に話し、ひげそり用のローションを準備してきたり、休日家庭でも行う様子が見られたりするようになった。

日々の指導へのつなぎ方

・男性職員を中心に、ひげそりの際に事後指導を行う。

・女性職員、非常勤寄宿舎指導員とも勉強会の内容を共有し、同じ方法で指導できるようにする。

・実施した内容と生徒の様子について、連絡帳等を通し保護者や学部に伝え、連携した指導を行う。

【勉強会実践２】肌の手入れ勉強会

内容	肌の手入れの必要性、手入れの仕方とポイント、便利な用具の紹介
実施方法	事前に勉強会を行った高等部３年生がモデルや講師となり実施した。 泡立てネットなどの便利グッズ使用し、洗顔や肌の手入れ仕方を体験する。

指導の工夫

・高等部３年生が学んだことをアウトプットできるように、モデルや講師として参加してもらう。

・生徒が興味をもてるように、動画やクイズ形式でポイントを伝える。

・学んだことを再確認できるように、生徒用の振り返りシートを活用する。

生徒の様子／変容

・動画に興味を示す生徒が多かった。クイズ形式にしたことで、積極的に発言する姿が見られた。

・自分から洗顔するようになったり便利グッズや化粧水を用意したり、学んだことを実践する姿が多く見られた。

・勉強会後に学部でも洗顔の学習があり、寄宿舎で学んだことを自ら手本として見せていた。

日々の指導へのつなぎ方

・勉強会の内容を職員間で共有し、生徒の取組状況や変容を記録し、継続して指導を行う。

・家庭でも取り組めるように、勉強会の内容と変容を保護者に伝える。

⑶ おおぞらシートを活用した生活指導の充実

おおぞらシートと個別の生活指導計画の作成と実践、保護者、学部職員と連携した指導

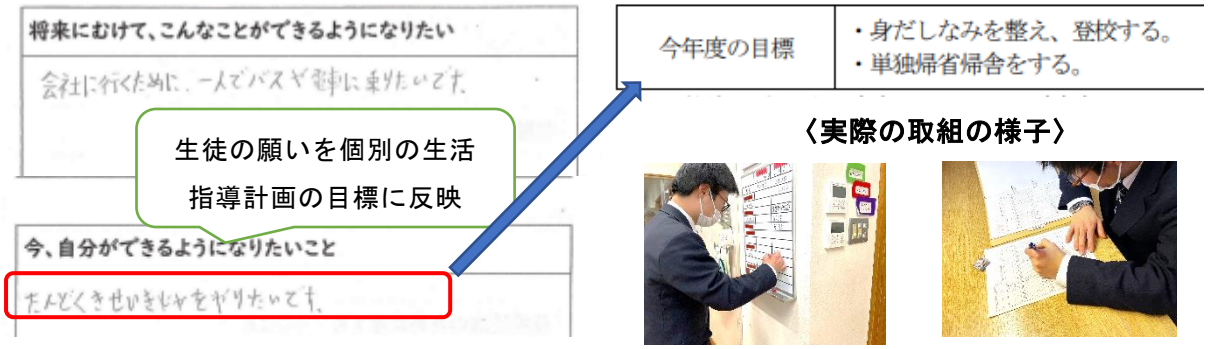
・生徒と話し合い、将来や生活の中でできるようになりたいことや、そのために何をするのかを記入するおおぞらシートを作成した。これを基に、生徒一人一人の実態に応じて目標を明確にし、生徒が意欲的に生活できるように、個別の生活指導計画を立て生活指導を行った。生徒が主体となり作成したおおぞらシートを活用した指導を行ったことで、生徒が自分のこととして捉え、主体的に取り組む姿が見られた。

・保護者や学部職員にも取組の様子や生徒の変容などを伝え、共有した。長期休業中は家庭でも目標として取り組み、連携して指導を行うことができた。

・学部との連携した指導については、寄宿舎生の生活指導だけでなく、通学生対象の寄宿舎生活体験や寄宿舎職員の授業への参加なども行っている。今年度の取組はＰ７４、資料１に示している。

【おおぞらシートを活用した生活指導実践１】　―高等部３年男子生徒（入舎３年目）―

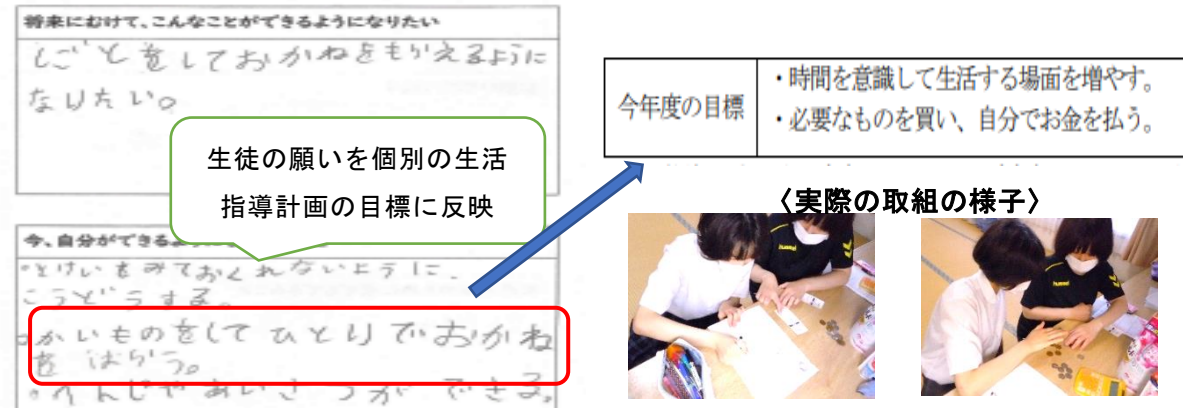
<table>
<tr><td colspan="2">生徒の実態
保護者の送迎で帰省・帰舎している。一人で公共の交通機関を利用した経験がほとんどない。</td></tr>
<tr><td>本人・保護者の願い
・将来会社に行くために、一人でバスや電車に乗りたい。</td><td>今、自分ができるようになりたいこと
・単独帰省帰舎をしたい。</td></tr>
<tr><td colspan="2">個別の生活指導計画年間目標：単独帰省帰舎をする</td></tr>
<tr><td colspan="2">学部・保護者と連携した指導
取組
・練習を行う前に、寄宿舎からバス停までかかる時間、バスの時刻や運賃を生徒と一緒に確認した。
・単独帰省帰舎の手順表と単独帰省・帰舎届の記入方法の見本を作成し、一人で確認しながら準備や用紙の記入ができた。
・実施後に振り返りの時間を設け、必要に応じてアドバイス行った。
連携
・保護者が休日や帰省帰舎日に練習を行った。練習の状況や生徒の実態、課題を学部・保護者と共有し、生徒に必要な指導を確認し、指導方法を検討、改善した。
・単独帰省帰舎を行えるかどうか寄宿舎職員が単独帰省に同行し、見極めを行った。
生徒の変容
・最初は一人でバスを利用することに不安を口にしていたが、慣れてくると時間や日時の変更などにも対応できるようになり、自信をもって行う姿が見られた。
・帰省帰舎だけでなく、休日に友達とバスで出かけたい、電車の利用もしてみたいなど前向きな発言が聞かれ、学びをつなげようとする姿が見られた。
課題
・実習期間中や休日、他の場面で公共の交通機関の利用など、生徒本人は希望していたが、実施までには至らなかった。</td></tr>
</table>



＜図６＞高等部３年男子生徒のおおぞらシートと個別の生活指導計画

【おおぞらシートを活用した生活指導実践２】　―中学部３年女子生徒（入舎３年目）―

生徒の実態 昨年度からおやつなど買い物をする経験を積んでいる。一人での買い物は難しい。	
本人・保護者の願い ・仕事をしてお金をもらえるようになりたい。	**今、自分ができるようになりたい** ・買い物をして、一人でお金を払う
個別の生活指導計画年間目標：必要な物を買い、自分でお金を払う。	
学部・保護者と連携した指導 **取組** ・広告を利用し、物の値段と金種を確認し、お金の支払い方を練習した。 ・値段に見合った金額の支払いができるように、計算機での計算の仕方を教えた。 ・近くの店に買い物に出かけ、金額に応じてお金を出す練習をした。 ・実施後に振り返りの時間を設け、必要に応じてアドバイス行った。 **連携** ・働いて賃金をもらう経験ができるように、家庭でした手伝いに応じてお小遣いもらえるようにした。手伝いをしてもらったお小遣いで、買い物を、経験を積んだ。 **生徒の変容** ・硬貨による支払いが、できるようになった。 ・買い物の経験を積んだことで値段を比べ、予算に合った買い物ができるようになってきた。 **課題** ・紙幣の価値が曖昧で、紙幣での支払いが難しい。	



＜図７＞中学部３年女子生徒のおおぞらシートと個別の生活指導計画

7　まとめ

(1)　「生徒が学びをつなぐ」生活指導への職員間の意識の共有

・「生徒が学びをつなぐ」を視点として、日常の生活指導の指導項目の見直しや指導内容の整理を行った。また、テキストブックの作成や生徒主体の勉強会の実施に取り組んだ。そのことで、系統性、一貫性のある寄宿舎の生活指導の進め方を職員間で確認し、共有することができた。

(2)　生徒の意識の高まりと成長

・生徒主体の勉強会やおおぞらシートを活用した個別の生活指導を行ったことにより、生徒自身が自分の課題や目標を理解し、自分事として捉えて生活する様子が見られた。また、苦手なことに積極的に取り組んだり、学んだことや身に付けたことを寄宿舎や家庭、学校生活などで、生かしたりして生活する姿も見られた。次に取り組んでみたいことを話すなど、学びをつなげていこうとする生徒の意識の高まりと成長を感じることができた。そのことから、生徒主体の勉強会やおおぞらシートの活用は、生徒の主体性を高めることにつながったと推察する。

(3)　生徒一人一人の生活力を育てる生活指導の検討

・今年度はこれまでの生活指導の充実を図りつつ、「生徒が学びをつなぐ」日常の生活指導について職員間での意識を共有し、生徒用テキストブックの作成や生徒主体の勉強会の実施方法など生活指導の見直し、検討、改善を中心に行ってきた。しかし、課題として、作成したテキストブックや勉強会を日々の生活指導に十分に活用できていないことが挙げられる。今後は、今年度取り組んできたことを、日常の生活指導にどのように活用し、生徒一人一人が必要な力を身に付け、身に付けた力を生かして生活できる力を育てるために生活指導をどう行っていくか検討し、実践していきたい。

8　次年度（２年次）に向けての提言

「学びをつなぐ」生活指導の実践

・今年度作成したテキストブックや勉強会、それを基にした日々の生活指導やおおぞらシートを活用した個別の生活指導の実践は、生徒の意欲の高まりなどの成果があった。しかし、「生徒が学びをつなぐ」ためにはテキストブックや勉強会をより有効に活用した生活指導を行うことが必要である。次年度はこの点をポイントにして評価、改善を行い、生徒が学びをつなぐ生活指導の充実を図り、生徒の生活力を育てていきたい。

身に付けた力を生かす場面・環境づくり

・これまで生徒が考えて生活できる環境作りを行ってきた。そのことは、生徒の主体的な姿を引き出せると考える。今後は、寄宿舎の自治会活動や友達と協力して行う係活動などを活用しながら、生徒が勉強会や日々の生活指導で学んだことや身に付けたことを発揮できる場面を設定し、生徒自身が学びをつないで生活できるようにしていきたい。

＜資料１＞学部と連携した生活指導の紹介

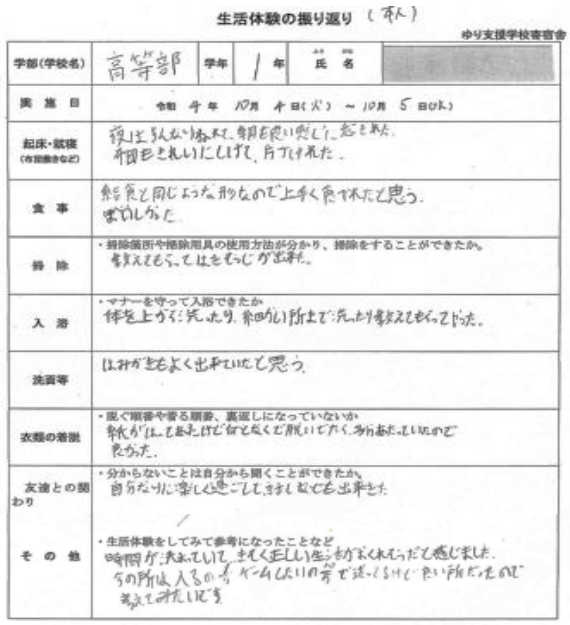
寄宿舎生活体験

・寄宿舎生活体験は、卒業後の生活を想定し、基本的生活習慣の確立と日常生活技術の向上を目的に行っている。実施の流れは、次の通りである。
学部で希望をとり、保護者が「生活体験希望願」を提出し、生徒は事前に、生活体験を通して身に付けたいことなどの具体的な目標を決め、体験をする。体験後は「生活体験の振り返り」を行い、家庭での生活につなげるようにしている。

・今年度は、職業１、２グループの高等部１年生、２年生を対象に体験を実施した。10 月（５名）、12 月（１名）、３月（４名）に行い、目標として、私物の整理整頓や掃除の仕方を覚えたい、時間を見て行動できるようになりたい、自分の身の回りのことは一人でできるようになりたいなど、基本的生活習慣について多く掲げられていた。

・事後の「生活体験の振り返り」では、先輩の様子を見て布団を敷いたり、畳んだりすることができた、制服を畳んでハンガーに掛けることができた、掃除の仕方を教えてもらい棚の拭き掃除ができたなど、前向きな言葉が多かった。

・体験の様子を「生活体験の記録」に記入し、「生活体験の振り返り」と併せて、学部と情報を共有し、生徒への指導・支援の充実につなげている。

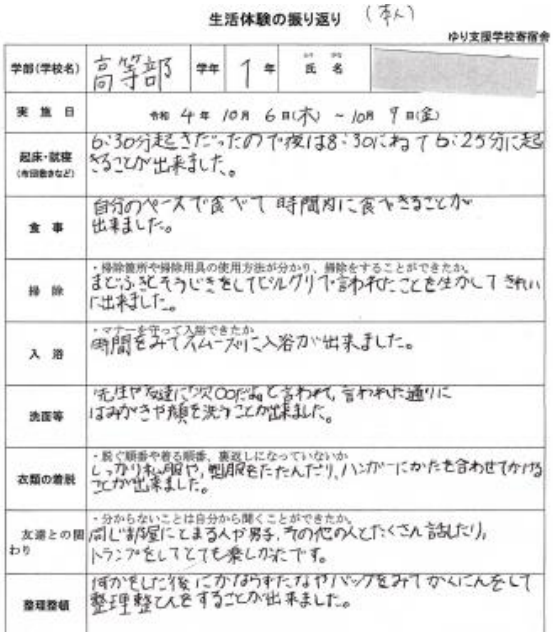


生活体験の振り返り（本人）

ゆり支援学校寄宿舎

学部(学校名)	高等部	学年	1 年	氏名	[redacted]
実施日	令和 4年 10月 4日(火) ～ 10月 5日(水)				
起床・就寝（布団敷きなど）	寝坊した私が悪かった。朝を使い慣れて、起きれた。布団もきれいにしけて、片づけれた。				
食事	給食と同じような形なので上手く食べれたと思う。ぜんぶ食べた。				
掃除	・掃除箇所や掃除用具の使用方法が分かり、掃除をすることができたか。教えてもらってはをもっぱが出来た。				
入浴	・マナーを守って入浴できたか体を上がる先輩より、奥の方い所まで先輩より教えてもらってよかった。				
洗面等	はみがきもよく出来ていたと思う。				
衣類の着脱	・脱ぐ順番や畳む順番、裏返しになっていないか靴がはいてあったけど自分で脱いでたくさん分かあったいたので良かった。				
友達との関わり	・分からないことは自分から聞くことができたか。自分なりに楽しく過ごしてしまいなくても出来た。				
その他	・生活体験をしてみて参考になったことなど時間が決まっていて、まもくまもしい生活がまくれるだと感じました。今の所は入るのが、ゲームしたいのが先で遅くなりけど、良い所だったので考えてみたいです。				

＜高等部３年男子・生活体験の振り返り＞



生活体験の振り返り（本人）

ゆり支援学校寄宿舎

学部(学校名)	高等部	学年	1 年	氏名	[redacted]
実施日	令和 4年 10月 6日(木) ～ 10月 9日(金)				
起床・就寝（布団敷きなど）	6:30分起きだったので夜は8:30にねて6:25分に起きることが出来ました。				
食事	自分のペースで食べて時間内に食べきることが出来ました。				
掃除	・掃除箇所や掃除用具の使用方法が分かり、掃除をすることができたか。まどふきとそうじきをしてビルグリで教わったことをいかしてきれいに出来ました。				
入浴	・マナーを守って入浴できたか時間をみてスムーズに入浴が出来ました。				
洗面等	先生や友達に○○だねと言われて、言われた通りにはみがきや顔を洗うことが出来ました。				
衣類の着脱	・脱ぐ順番や畳む順番、裏返しになっていないかしっかりれん服や、制服をたたんだり、ハンガーにかたを合わせてかけることが出来ました。				
友達との関わり	・分からないことは自分から聞くことができたか。同じ部屋にとまる人や男子、その他の人とたくさん話したり、トランプをしてとても楽しかったです。				
整理整頓	何かをした後にかたづけたりやバッグをみてかくにんをして整理整とんをすることが出来ました。				

＜高等部１年女子・生活体験の振り返り＞

授業への参加、見学

・小学部３年生の生活単元や高等部１年生、２年生の職業・家庭の授業に参加した。
授業の様子を寄宿舎職員間でも共有し、次の指導につなげている。

＜小学部：テーブル拭き＞

＜高等部：衣類の収納＞

＜高等部：掃除＞

研究主題　　一人一人の笑顔があふれ、きらり輝く授業をめざして
～道川分教室のこれまでの実践を生かしながら～

１　はじめに

道川分教室では、令和２年度からの２年間「児童生徒による学習評価の充実～自立活動の授業づくりを通して～」の研究主題の基、重度・重複障害のある児童生徒が学びを実感し、達成感を表す学習評価の在り方を求め、自立活動の授業づくりに取り組んだ。具体的には、研究対象の個別学習を選定し、授業構想や学習評価に係るツール及び映像を活用しながら、職員全員で授業づくりを行った。結果として、個に応じた効果的な支援等を多様な視点で検討・提案することにつながり、児童生徒の変容を導くことができた。表現の仕方は微細な児童生徒であるが、映像を活用した評価で見られた授業時の笑顔からは、学びを実感し、達成感を得ている様子を感じ取ることができた。

今年度は、これまでの研究成果を汎用化させる１年として研究を推進していく。全生徒が学びを実感し、笑顔あふれる授業づくり・授業改善を行い、生徒の確かな成長につなげたいと考え本主題を設定した。

なお、「ゆり支援学校道川分教室」は、今年度をもって閉室し、その教育は秋田きらり支援学校へ引き継がれる（移管する）ことになる。道川分教室は、前身である本荘養護学校時代から、病院への訪問教育における授業実践を積み重ねてきており、今に引き継がれている。研究推進にあたっては、この間の実践で得た知見等も生かしながら進め、重度・重複障害教育における専門性の継承にもつながるまとめとしたい。

２　生徒の実態

道川分教室は、独立行政法人国立病院機構あきた病院重症心身障害病棟に入院している児童生徒を対象に訪問教育を行っており、今年度は中学部１名、高等部３名の生徒が在籍している。

生徒は、脳性まひ等に起因する重度の肢体不自由と知的障害を有しており、日常生活全般において医療的ケアや生活支援を必要としている。周囲からの働き掛けに表情や微細な身体の動きで気持ちを表す生徒、簡単な言葉のやりとりができる生徒など表現の仕方は様々であるが、今までの学習の積み重ねから、表情が豊かになったり、安定した気持ちで過ごしたりするなどの変容が顕著に現れている。どの生徒も友達や周囲の人との関わりを楽しみにしており、一生懸命気持ちを表そうとする様子が伝わってくる。

３　内容と方法

「授業づくり」「授業づくりを支える研修」を研究の柱として進め、授業づくりに係る実践を事例としてまとめる。

(1) 授業づくり

○「授業づくり検討会」を実施し、チームで具体的な授業づくり・授業改善を行う。
- 実態把握と指導目標の設定（アセスメントチェックリスト、道川版自立活動の流れ図による中心課題の導き→個別の指導計画策定）
- 授業構想の検討（道川授業デザインシート・略案による検討）
- 授業改善の視点検討（映像記録、エピソード記録等による評価、変容の確認）
- 目標等の修正（個別の指導計画の改善）

○授業実践に当たっては、以下の観点を基に指導・支援を工夫する（**共通実践事項**）。
- 流れのある題材計画　・言葉掛け　・姿勢づくり　・教材・教具　・授業展開

(2) 授業づくりを支える研修

○総論　「重度・重複障害（病院訪問）教育における授業づくり」

○各論　・リハビリテーション参観（あきた病院　ＯＴ、ＰＴ、ＳＴ）
　　・教材・教具づくり研修　　・ＩＣＴ研修

４　研究計画　　※P92　資料参照

５　研究の実際

今年度のテーマである「一人一人の笑顔があふれ、きらり輝く姿」は、生徒が学びを実感し主体的に活動する中で現れる。活動への期待感、できたという達成感、個々の表現方法による気持ちの表出など一人一人の目指す姿と一致する。「学びを実感し、自分の気持ちを精一杯あらわす姿」を引き出すために、分教室で今まで積み上げてきた成果を基に、次のような実践を行った。

(1) 授業づくり

①　チームによる授業づくり検討会の実施

生徒の実態把握から指導目標の設定、授業の評価･改善を生徒の成長につなげるために、これまでの研究成果である授業づくりに係るツールを活用して全職員で共通理解を図り、生徒の思いや変容に迫った。

＜授業づくり検討会＞（年５回実施）

〇目　的

① アセスメントの評価や自立活動の流れ図の見直しと確認を行い、個別の指導計画、授業の指導内容、題材構成等の検討を行う。

② 生徒の興味・関心や主体性を引き出し、達成感を味わうための教材・教具や教師の関わり方等について分析し、授業の評価、改善に生かす。

③ 学習評価記録の分析や考察を通して生徒の変容や成果と課題を明らかにし、次題材へ生かす支援等の方向性を検討する。

◇授業づくり検討会Ⅰ

・生徒一人一人の実態、卒業後の目指す姿、教育的ニーズ、目標等について確認し、道川版自立活動の流れ図を確認し、それを基に個別の指導計画、個別学習の指導内容等について検討する。

・道川授業デザインシートを活用し、指導主事計画訪問で提示する題材で目指す姿、題材の内容、手立て等について検討する。

◇授業づくり検討会Ⅱ

・指導主事計画訪問で提示する授業の様子をビデオで視聴し、改善点について話し合い指導案（略案）に反映させる。

・題材における生徒の目指す姿について共通理解し、評価記録用紙に反映させる。

◇授業づくり検討会Ⅲ

・指導主事計画訪問を受けた成果と課題の確認をする。また、中間評価（生徒の変容の確認、指導内容・方法の振り返り）を行い、個別の指導計画の見直し等を通して２学期以降の指導・支援に生かす。

◇授業づくり検討会Ⅳ

・授業づくり研修会を実施し、重度・重複障害教育における授業づくりのポイントを学ぶ。

・映像記録、エピソード記録等による評価と改善点について検討する。

・前期の生徒の変容について共通理解を図る。

◇授業づくり検討会Ⅴ

・生徒一人一人の今年度の変容や成果と課題について検討し、個別の指導計画の見直し等を通して３学期の指導に生かす。

② ５つの観点に基づく指導・支援の工夫（共通実践事項）

道川分教室では、平成２４年度から「児童生徒が主体的に活動するためのわかりやすい状況づくりである４つの観点」に基づいて授業づくりを行ってきた。単なる繰り返しではない「流れのある題材計画」が有効であるという昨年度の成果を踏まえ、５つの観点を基に「道川授業デザインシート」を活用して、授業デザインを行った。そこから期待される姿は、次の通りである。

〇流れのある題材計画「単なる繰り返しではない活動の組み立て」

・体験的な活動を題材のゴールに据え、そこに向けて関連する一連の活動を展開することで、意欲が喚起され多様な表現の表出

〇言葉掛け「言葉が相手に伝わる状況づくり」

・伝わりやすい言葉、音環境への配慮等をすることで集中して活動に向かう姿の育ち

〇姿勢づくり「取り組みやすい状況づくり」

・身体の安定、視線や手を動かす等、自発的に活動する姿の育ち

〇教材・教具「意欲を喚起する状況づくり」

・興味･関心のある事物の活用、提示物の精選により､活動しよう､分かろうとする意欲の向上

〇授業展開「見通しをもちやすい状況づくり」

・授業構成の一定化、繰り返し、シンボルの活用等による安心感、期待感の表出

⑵ 授業づくりを支える研修

以下の研修を実施して専門性の向上を図り、授業づくり・授業改善につなげた。

① 外部講師による研修

・期日：令和４年９月 26 日（月）

・内容：授業づくり研修会

講話「重度・重複障害教育の授業づくりで大切なこと～道川分教室・秋田きらり支援学校での実践をもとに～」

・講師：秋田県教育庁特別支援教育課　主任指導主事　菊地　真理　氏

〇授業づくりで大切なこと（授業づくりの基本）
・「理解（実態把握）：学習特性を踏まえる、情報を得る」「目標設定：個別の指導計画への反映、適切な評価」「配慮：教室環境、病院との連携協力、健康・安全、教員間の連携」
〇自身で大切にしてきたこと（分教室で考えたこと）
・「子どもの思いを分かるために」「正しい（子ども）理解ができているのか」「教師の主観の価値」へ迫るための記録や評価の仕方の検討
〇授業の実際で大切なこと
・「何を学ばせたいのか」伝わっているか、教師の言葉遣い、児童生徒の表情と動作をじっくり見る　等

② リハビリテーション参観

年度初めに、あきた病院のＯＴ、ＰＴ、ＳＴを参観し、生徒の身体に関する実態や安全なアプローチの仕方を学び、専門的な視点からのアドバイスを日々の指導に生かした。

＜写真＞あきた病院 PT の様子

これらの取組に基づいた授業実践（個別指導３事例、合同学習１事例）について、以下に述べる。

＜授業実践１＞

感じた気持ちを表現する力を高めるために
～校外学習に代わる活動を通して～

１　生徒の実態（中学部１年、女子）

・ミトコンドリア病。慢性呼吸器障害があり、人工呼吸器を使用。１日３時間程度離脱し、ストレッチャー式車椅子で学習をしている。合同学習への参加も可能となり、友達の声がする方向に顔を向ける。また、手の平にのせた物を握ろうとしたり、指先を動かしてタブレット端末（xylophone、ギター等）で音を鳴らし気持ちを表現したりする。

・保護者は、「色々な体験をしたり季節を感じたりしてほしい」「もっと笑顔や反応がみたい」等の願いをもっており、教育的ニーズを「身近な人との関わりを通して、自分の気持ちを表情や身体の動きで表す」等とした。

２　指導目標及び指導計画【自立活動】

(1)　指導目標

・興味・関心の幅を広げ、感じた気持ちを表情や身体の動きで表す。
・指先を動かし、タブレット端末で働き掛けに応じる。
・様々な働き掛けを受け入れ、自分から指や手を動かして活動する。

(2)　題材設定の理由

・個別の学習では、身体の緊張を緩めリラックスして学習に取り組むこと、諸感覚を活用し様々な音や素材に触れたり、感じたりしながら気持ちを表すことに取り組んでいる。また、教師からの働き掛けを受け止め、受け入れ、手や指先を動かして応じたり、口や表情で自分の気持ちを表現したりする力を高めることもねらいとしている。

・昨年度から「体験」をゴールとした題材に繰り返し取り組んできた。今年度も個別学習で取り組んできた学習内容を基に、お出かけ体験当日の活動を準備することで、ステップアップにつなげたい。また、病棟内で過ごす時間が多いこと、外出機会がないこと等から題材のまとめの学習を身近な地域への「お出かけ体験～道の駅岩城にいこう～」とし、様々な体験を味わうことができる学習としたい。

・バスに乗る（車窓の映像や音）、道の駅で買い物をする、海を感じる（砂、貝殻、波の音等）、港の湯で足湯体験をする等、分かりやすい刺激を学習の中に取り入れることで、感じた気持ちを表情等で表すことが期待できると考え本題材を設定した。

(3)　指導計画

題材名	主な目標	時数
お出かけ体験をしよう 「道の駅岩城にいこう」 （事前学習含む）	・日常の生活では経験し難い外出や体験を通して、社会経験の幅を広げる。 ・バスに乗る、お遣いをする、海を感じる、温泉に入る等の体験で感じた気持ちを表す。	6 時間 （事前） 2 時間 （体験）

３　指導の実際

(1)　働き掛けを受け入れ手や指先を動かして応じたり、口や表情で自分の気持ちを表現したりする力を高めるための工夫

〇流れのある題材計画

・題材構成とねらいに迫る授業展開の工夫（デザインシートの活用）
・見通しや安心感につながる（学びの実感）事前学習の積み重ね
・「安心感」に加え、非日常の心揺さぶられる体験の設定

〇言葉掛け

・即時評価のタイミング
・思いを読み取る「待つ」姿勢
・反応を受け止める教師の寄り添い方

〇姿勢づくり

・車椅子の角度（肘おき、クッション等の使用）

〇教材・教具

・実物（本物）にこだわった映像や音の準備（砂、貝殻、波の音、カモメの鳴き声等）
・持ちやすい教材・教具（チケット、お金）
・再現度の高い環境設定（バス、バス停、マルシェ、焼き物コーナー、港の湯）

〇授業展開

・期待感を高めるメリハリのある活動設定
（「静」と「動」の活動の組み合わせ）
・一つのコーナーに、一つの活動（刺激）の設定

(2) 学習の様子「９月 21 日（水）道の駅岩城にいこう」

学習内容	手立て及び留意点	生徒の様子
朝の会 バスで出発	・病院から道の駅までのコミュニティバスの経路を実際に車窓から録画をし、車のすれ違う音や走行音、車掌のガイド音を聞くことができるようにした。 ・道の駅に着くと「港の湯」とガイド音声が流れた。	 ・事前学習で取り組んできた降車ブザーを鳴らそうと指を動かしていた。
体験① 感じてみよう （道の駅見学）	・焼き物コーナーや農産物直売所（マルシェ）等のお店を見学し、道の駅の雰囲気を感じることができるようにする。	
体験② お遣いしよう （マルシェで買物）	・３種類の野菜を触り、職員に頼まれたさつまいもを選ぶ。指先の動きを確認しながら言葉を掛ける。	・さつまいもに触れ、数秒後手を開きゆっくりと握ろうとしていた。
体験③ 焼き物コーナーで香りを感じる （イカ焼き）	・香ばしい醤油の香りがする焼きイカを顔の横におく。表情や身体の動きを見逃さないようにする。	 ・口をもぐもぐと動かした後唾をごっくんと飲み込んだ。
体験④ 聞いてみよう （波、ウミネコ）	・プロジェクターで、道川海岸の波の音やウミネコの鳴き声を放映することで海岸の雰囲気を感じることができるようにする。	
体験⑤ さわってみよう （砂、貝殻等）	・砂の中に貝殻、流木などを潜めた。手や指先、表情の変化を見逃さないようにする。（全て素材は消毒済み）	・ゆっくりと指先を動かした。

体験⑥ 港の湯に行こう （足湯体験） 体験⑦ 気持ちを表そう （記念写真） おわりの会	・入浴券を５００円で購入することができるように、持ちやすい券や硬貨を準備する。 ・お出かけ体験の終わりが分かるように言葉を掛け、記念に写真を撮る。 ・振り返りをしながら、良い表情をした活動を伝え、楽しかった気持ちを共有できるようにする。	 ・口角を上げ笑顔で帰棟した。

(3) 指導の評価

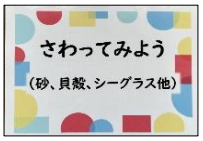
・個別学習の内容を基にした活動の設定が、本人にとって無理がなく分かりやすい刺激になり、気持ちを表しやすかったのではないかと思われる。

○感じてみよう（道の駅にバスで行こう、焼き魚や潮の香りを感じよう、温泉に入ろう）

○さわってみよう（貝殻、流木を拾おう、足で砂に触れよう、砂＋潮水に触ろう）

○聞いてみよう（バスの走行音、波の音、ウミネコの鳴き声、店員さんの声等）

○体験しよう（バスの回数券を渡す、買い物やお遣いをする、温泉のチケットを買う）



・事前学習では、４つの活動を中心に、繰り返し取り組んだ。当日は、安心感をもって取り組み、学びの実感や気持ちの表出へとつながった。

・お出かけ前日の事前学習で「明日はお出かけだね」「明日迎えにくるからね」と言葉を掛けると笑顔で応じていた。「楽しみだね」と気持ちをフィードバックすると顔を教師の方に向け、口を動かし受け止めているような姿も見られた。

・各活動場所には、その場で何をするのかが分かるように掲示をした。本人に伝えながら活動したことで、気持ちを表出する姿が多く見られ、さらに気持ちのフィードバックのしやすさにつながった。

4　指導における成果と課題

(1)　成果

○期待する姿、予想される姿を具体化した、気持ちの表出につながる活動設定

・チームによる丁寧な生徒理解と授業デザインシートの活用

・見通しや安心感につながる姿の確認

○期待感、達成感につながる思い（感じた気持ち）の読み取り

・身体の動きや表情の変化を見逃さないための記録（動画）の蓄積

・満足感、達成感、心の安定等を生む十分な活動時間の設定

(2)　課題

○対話的な学びにつなげる教師の思い（感じた気持ち）の読み取り

・思いを読み取る、待つ、反応を受け止めるための教師の働き掛けと寄り添い方

・気持ちの共有やフィードバックをして終わりではなく、本人の受け止めまでの見届け

5　まとめ

気持ちの表出等が微細な生徒ではあるが、刺激に対して口元を動かす、働き掛けに対して顔を向け聞き入る、指先でタブレットを操作するなど、表情の豊かさや気持ちを表出する力が少しずつ高まってきている。日々の学習に加え、体験をゴールにした流れのある題材への取組を今後も継続し、気持ちの表出をさらに高めていきたい。

＜授業実践２＞

達成感を感じられる授業づくり

～具体的な目標を提示して～

１　生徒の実態（高等部３年、女子）

・本生徒は両側上下肢痙性麻痺のため、寝たきりの状態であるが、頭部を前後左右に動かすことができる。また、両腕は肘が屈曲しているが、右腕を顔面方向へ５㎝ほど動かすことができ、右手は少しだけ握ることができる。

・他者と明瞭に会話をすることができ、童謡や歌謡曲の歌詞を覚えて歌うことができる。また、50 までの数唱ができる。色の名前は分かる。

・人とたくさん話がしたい。頑張る姿をみんなに見てほしい。＜本人＞
様々な体験（刺激）をしてほしい。散歩でもいいので、外の世界の花や木等広い世界を感じてほしい。健康で笑顔を絶やさず過ごしてほしい。＜保護者等＞

・加齢による衰えがあることから、現在の会話機能と身体機能をできるだけ維持していくことが大切であり、そのために右手や首を使ったり、会話を取り入れたりした活動を毎日設定している。自分の活動を褒められるととても喜び、次の活動への意欲へつなげることができる。

２　指導目標及び指導計画【自立活動】

(1) 指導目標

・感触遊びや制作活動に取り組み、様々な素材に触れて経験の幅を広げたり、手を動かして作品を作ったりする。

(2) 題材設定の理由

・カレンダーは毎日の生活に必要な物であり、日々見るため自分が作ったという満足感を得やすい物である。さらに、病院スタッフの目にも留まりやすいため、本生徒との会話のきっかけや学校の授業への理解にも繋がると考える。

・これまでも制作活動には取り組んでおり、作る活動は好きである。しかし、手を自由に動かすことが難しいため、自分で筆を動かしたという実感をもてるように、補助具や描いた事を生徒と一緒に確認しながら授業を進めて行くこととした。

(3) 指導計画

題材名	主な目標	時数
作ってみよう（７、８月のカレンダー)	・右手でつかんだ補助具を動かして絵具を塗ったり、飾りを貼り付けたりする。 ・自分で塗る色を選んで教師に伝える。	６時間

３　指導の実際

(1) 達成感を得られるための工夫

〇流れのある題材計画

・年間を通して取り組め、様々な素材を扱えるように、カレンダーを題材とした。また、生徒にとって分かりやすいように、同じ活動を繰り返した。

〇言葉掛け

・具体的な言葉で、かつ端的に話すようにした。

・具体的な目標を生徒と相談し、決まったことを生徒自身に話して確認した。

〇姿勢づくり

・腕を使って学習することを意識できるようにすると共に、腕の動きを良くするために、授業の前に腕のマッサージや肩を軽く動かす動作を行った。

〇教材教具

・筆を保持できるようにマジックアーム（自作教具名）を制作して活用した。本生徒の眼前で筆を動かし、塗った結果が見えるように、アームの形を変えられる物を使用した。

・塗る紙を眼前に提示すると共に、少ない腕の動きでも結果が分かりやすいように様々な質の紙を使うようにした。

（絵の具の吸収が良いように、コーヒーフィルターを使用）

〇授業展開

・授業の始めに絵のどの部分を塗るのか知らせ、何色を何個（何枚）完成させるのか生徒と相談し、途中で「今〇個できたね」などと生徒と確認しながら授業を進めるようにした。また、振り返りでは、授業でできた物を見ながら一緒に数えたり色を確認したりした。

(2) 学習の様子

学習内容	手立て及び留意点	生徒の様子
1　始めのあいさつ		
2　今日の学習を知る	・具体的な活動や作る色、数を知らせる。	
3　カレンダー作り (1) ２色の中から、塗る絵の具の色を選ぶ	・色の名前や左右の場所から選択できるように、２つの絵の具を並べて提示する。	・空の色や葉の色を問い掛け、色名を正しく答えた。
(2) 星や花火のパーツを貼る	・描いたものや貼ったものをその都度見せて、活動の成果を即時評価する。 ・活動の途中でできたところを生徒と一緒に確認したり、活動を継続するか問い掛けたりする。	・筆が動いていく様子を見ようとした。 ・線を長く引けるようになった。 ・「自分が塗った」「塗れた」と発言するようになった。
4　振り返り	・目標数に対していくつでき	・どのような活動をしたか、何個

5　終わりのあいさつ	たか生徒と一緒に数えて、活動を具体的に振り返られるようにする。	作ったか等、活動を具体的に振り返り、病室に戻っても話すことができるようになってきている。

(3) 指導の評価

・何本の線を引くか生徒と相談し、目標本数を決めることができた。早くできたときは、追加で描くか相談し、「もっとやりたい」という言葉を引き出すことができた。

・授業前に腕のマッサージをしてリラックスさせ、学習で使う身体部位を意識させたことで、右腕の可動域が広がり、筆を上方向だけでなく、左方向へも動かすことが多くなった。

・生徒と一緒に線の数や貼った星の数を数えたが、振り返りに時間をとられ、授業時間を超えてしまうことがあった。

・友達にも意識を向けられるように、普段から他の人を意識できるような言葉掛けをする。

・肘の位置や腕をサポートするためのクッションを準備するなどして、車いす乗車中に腕を動かしやすい姿勢づくりをすることが必要であった。

4　指導における成果と課題

(1) 成果

・本時の目標を具体的に示し、生徒と一緒に考えることで、授業の始めに決めた目標を超えて作ることが増えた。

・授業の目標や活動を、具体的で分かりやすい言葉で伝えることで、授業を振り返った時に感想だけではなく、「〇〇が面白かった」「〇〇をやって、できた」と自分で考えた言葉で話すことが増えた。

・生徒の扱いやすい教具を使い、生徒が見ながら操作（描く、押す、引っ張る）できるようにしたことで、「もっとがんばる」と話し、意欲を見せることが多くなった。

(2) 課題

・本生徒の見やすい左側からの働き掛けが多かった。身体の拘縮をできるだけ防ぐ意味でも教材の提示場所や車椅子の向き、教師の立ち位置にも気を配る必要性があった。

・授業の中で上下左右の位置や数唱、色の名前などを取り上げた。本生徒の得意なことでもあるので、もっと多くの場面で取り上げていくべきであった。

5　まとめ

卒業後は病棟での刺激の少ない生活になってしまう。やりたいことの選択や要望の質問をすることで、自分の気持ちや考えをはっきり伝える機会を多くし、周囲の人に自分の体調や、やりたいことが伝わることを経験させたい。

＜授業実践３＞

コミュニケーションを広げる読み聞かせ活動
～スイッチ教材を活用して～

１　生徒の実態（高等部３年、女子）

・脳性小児麻痺による体幹機能障害で定頸や座位は難しい。
・視力は右眼のみ。時々視線はそれるが、注視や追視をする。興味のある絵本や画像などを見て、目を大きく見開いたり、じっと聞いたりする様子が見られる。
・楽しい気持ちを、笑顔や発声、手や足の動きで表す。自分の意に沿わないときは、口を「への字」にしたり怒ったような声を出したりして伝える。
・左手を使ってスイッチを押したり、音楽に合わせて楽器を鳴らしたりする。
・新しい活動に挑戦したい。＜本人＞
自分から声を出したり、身体を動かしたりして、精一杯自分を表現してほしい。できるだけ人と触れ合って様々な活動に参加して刺激のある生活をしてほしい。＜保護者等＞

２　指導目標及び指導計画　【自立活動】

(1) 指導目標

・マッサージや体操を通して心地よさを感じ、緊張を緩めたり、自分の身体を意識したりする。
・様々な物に触れたり、音や香りを感じたりして自分の気持ちを表情や手・腕の動き、発声で表す。
・教師とのやりとりを楽しみ、提示物に注目したり手や腕を動かしたりして活動に取り組む。

(2) 題材設定の理由

・本生徒は友達との関わりや周囲の人との関わりを楽しみにしており、たくさんの人の前で発表したり、一緒に活動したりすることを楽しみにしている。読み聞かせ活動では、本人の得意な動きを生かしながら教師とやりとりして授業を展開していくことができる。また、スイッチ教材を活用することで主体的に活動に取り組み、操作する楽しさを味わうことができる。友達や周囲の人の前で発表する場面を設けることで意欲が高まると考え、本題材を設定した。

(3) 指導計画　（総時数 28 時間）

題材名	主な目標	時数
お話を楽しもう	・お話を聞いて登場人物が分かり、手や腕を動かしながらペープサートを一緒に作る。	２時間
	・お話に合わせて、繰り返しの部分を握りスイッチで押しながらお話を進め、お話を楽しむ。	４時間
	・スイッチ教材を操作しながら、友達や教師の前でお話を発表する。 ※この活動を、お話の内容を変えながら年間を通して行う。（年４回）	１時間

３　指導の実際

(1) 自分から手や腕を動かし、達成感を味わえるための工夫

〇流れのある題材計画

・ペープサートを作る等の制作や音楽的活動を組み合わせて題材を組み立て、意欲を高めるために友達の前で読み聞かせ（発表）する活動を題材のゴールに設定した。

〇言葉掛け

・本人が気持ちを表せるように、一つの言葉掛けをして本人の反応を待って、次の活動に移るようにする。

〇姿勢づくり

・ＯＴのアドバイスを受けて、顔の向きが安定するように首元にクッションを挟み、隙間を作らないようにした。活動によっては腕を動かしやすいように、脇にクッションを挟んだ。また、右腕の拘縮が顕著なので、無理に動かすのではなく、状態を見ながら可動域を最大限に動かすようにした。

〇教材・教具

・物語の選定にあたっては、季節に合ったもの、本人の興味があるものを意識して本人の反応を見ながら、相談して決定する。

・本人の得意な左手の動きを活用し、繰り返し出てくる言葉を握りスイッチを押して話すようにした。握りスイッチに力が伝わりやすいように、滑り止めシートを巻いて太さを調整した。

・自分が見たい場所に注目しやすいように、絵本の周囲を黒い布等で覆ったり、手元が見えるように鏡を活用したりした。

〇授業展開

・一単位時間の流れについては、始めにマッサージや体操をして緊張を緩め、手や腕を動かしやすいようにした。最後にお話に関連した歌や季節の歌に合わせて楽器を鳴らす活動を設定し、期待感をもてる授業展開を心掛けた。

(2) 学習の様子

学習内容	手立て及び留意点	生徒の様子
1　始めの挨拶、本時の学習について知る。 2　身体を緩める。 3　『だんまりこおろぎ』のお話を聞く。 ①　スイッチを押しながら、教師と一緒にお話を読み進める。 ②　こおろぎの鳴き声を聞く 4　「虫の声」の曲に合わせて楽器を鳴らす。 5　終わりの挨拶をする。	・本人の発声に合わせて挨拶をする。 ・ボディイメージをもたせるように身体の部位を伝えながら、腕や肩に触れるようにする。 ・一人でスイッチを押せるように、必要に応じてクッションを脇などに挟み、姿勢を整える。 ・反応を見ながらゆっくり進める。 ・こおろぎの鳴き声をじっくり聞かせ、表情を見ながら気持ちを読み取って代弁する。 ・どの楽器がいいか問い掛け、表情を見ながら選択させる。 ・タイミング良くスイッチを押したことを賞賛し次時へつなげる。	・声を出し、両腕をたくさん動かして挨拶をした。 ・絵本を提示したとき、ニコッと笑顔を見せて期待感を表した。 ・意図的にスイッチを押した場面と反射的に押した場面が見られた。 ・楽器を鳴らさず、曲をよく聴いていた。

(3) 指導の評価

○授業づくり検討会に指導主事を要請して指導助言をいただいた。また、本校職員にも参加していただき、授業のビデオを基に評価を行った。

・言葉掛けにおいては、体操で身体の部分の伝え方が一定でなかった。言葉をどういう意図をもって伝えるか、ねらいをもって言葉を掛けていくようにする。

・生徒に伝わりやすい言葉掛け。意図をもって言葉を選んで伝える。

・スイッチ教材の形状の妥当性について検討が必要である。握りスイッチの場合、棒の太さや強さ、形は適切か、どう活用してほしいのか教師の意図が本人に伝わるようにする。

・スイッチを反射的な形で鳴らしてしまったり、本人の遊びとして鳴らしてしまったりすることもあるため、それを許容するのか指導目標を踏まえ検討が必要である。

・虫の鳴き声など、音量や音源の場所、タイミングを含めて、音に集中しやすい状況作りをする。

・生徒の反応の捉えについて、やりとりの中で本人がどう解釈しているのか周囲の教師の意見も合わせ、客観的に捉える。

・生徒の思考が一つ一つの活動に向くような教師の意図が伝わりやすい支援をする。

4　今年度の指導における成果と課題

(1) 成果

・本人の思いに近づくために、一つの言葉掛けに対する反応を待って表情の違いを丁寧に読み取るようにしたことで、喜怒哀楽を表現することが増えた。

・本人が身体を意識できるように、言葉を一定にし、しっかり触れるようにしたことで、触れられている部分を意識する様子が見られた。

・音に集中しやすいように、場所やタイミングを見て聞かせたい音を流すことで、音源を探すような様子が見られ、音楽や家族の声、虫や鳥の声などに笑顔を見せた。

・様々な場面でスイッチ教材を活用したことで、生徒の意欲が高まるとともに、教師とのやりとりが広がり、病院スタッフからも「こんなことができるんだ」などの感想が聞かれた。

(2) 課題

・生徒の興味・関心の幅をさらに広げるために、別の角度からアプローチしたり、病院スタッフとの連携の仕方を工夫したりすることが大切である。

5　まとめ

授業づくり検討会で複数の目で実態把握をしたり、活動のアイディアを出し合ったりしたことで、本生徒が意欲や達成感を感じることができる活動を設定でき、生徒の生き生きとした姿につながった。

本生徒は今年度で卒業となるが、好きな活動を通して笑顔が増え、関わりがさらに広がるように、興味・関心を示したことや得意なことなどについて担当保育士や看護師と共有していく。

＜授業実践４＞

道川分教室における合同学習の取組

１　はじめに

道川分教室は、自立活動を主とした指導を行っている。指導の形態は前項までの事例で示した個別指導を基本としているが、指導効果の観点から集団を構成した指導（合同学習）も行っている。

合同学習の授業づくりでは、「集団の中で個が生きる」視点を大切にしてきている（参考：H25～H28研究紀要）。生徒と教師、１対１の関係から出発した情動の共有と信頼関係を基にして、小集団を構成する他の教師や友達と「思い」を共有しながら、個別学習でできるようになってきたことを発揮できるようになれば、学ぶ楽しさやコミュニケーションがさらに広がっていくという考えの基に実践している合同学習について紹介する。

２　生徒の実態等（中学部生徒１名、高等部生徒３名）

・全生徒の合同学習で、体育的な活動と音楽的な活動を週あたり各１時間行っている。
・全員が合同学習の際に、表情が和らいだり、気持ちが高揚したりしている様子が見られることから、期待感を抱いていると考えられる。
・全員車いす上での活動である。

３　指導目標及び指導計画　【自立活動（合同体育）】

(1) 指導目標（個別の目標は個別の指導計画による）

・自分の身体を意識して動かす。
・友達や先生と活動する楽しさを味わい、感じた気持ちを自分なりの方法で表す。

(2) 題材設定の理由

・毎年行っている活動であり、学習内容をイメージしやすい。
・全員が得意な「腕を使って引く」動きの他、個別学習で取り組んでいる、「押す・蹴る」「発声する」「(呼びかけ等に）応える」場面を設定しやすい。
・キッカー、キーパーの対決形式にすることで、関わりながら活動ができる。

(3) 指導計画

題材名	主な目標	時数
「サッカーゲームを楽しもう」～ワールドカップ2022カタール大会～	・ひもやロープを手で引いたり、ボールを手や足で転がしたりして自分で身体を動かす。 ・ゲーム等を通して友達や教師との活動を楽しみ、感じた気持ちを表情や身体の動き、発声等で表す。	６時間

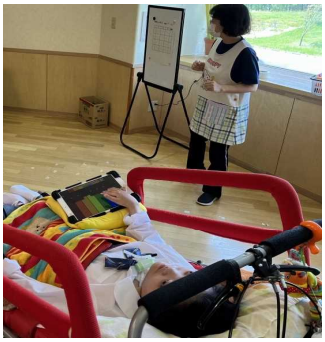
４　指導の実際

(1) 関わる楽しさを共有しながら、個別学習でできるようになってきたことを、集団の中で発揮しながら活動できるための支援の工夫

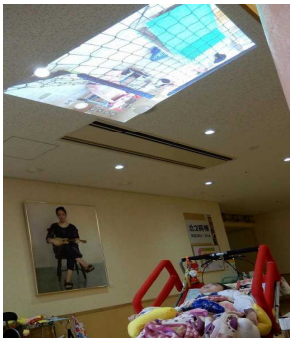
支援の工夫	生徒の様子
担任以外の教師からの呼び掛け（言葉掛けの役割分担） ・導入時等に、Ｔ１が呼名や挨拶の依頼をし、その他指導者は言葉掛けを控えて見守る。	・Ｔ１からの呼びかけにタイミングよく、タブレット端末（アプリ：xylophone）で応えることが多く見られるようになった。 ・新たな活動に抵抗を示す生徒が、担任以外の指導者と一緒に挨拶等の活動を行うことができた。

個別学習で行っている体操等の活用（安心感ある授業展開） ・個別学習で行っている、音楽に合わせた体操に担任と取り組む。	・全員が、聞き慣れた音楽の基、集団の雰囲気の中で身体をリラックスさせる活動に取り組むことができた。 ・音楽を介することで、担任以外の指導者と普段通りに体操に取り組むことができた（一部生徒）。
友達の活動を意識できる活動時の配置（関わりを引き出す姿勢づくり） ・感染対策の基、それぞれの活動を意識しやすい位置取りや教材・教具の配置を工夫する。	・友達を笑顔で指さすなど、友達との関わりを楽しみながら活動する様子が見られた。 ・勝負の結果を理解できる生徒は、対面での対戦を通して「勝ってうれしい、もう一回やりたい」などと気持ちを表現することができた。 ・担任以外の掛け声で紐を引くことができた。
それぞれの見え方を踏まえた、モニターの設置（状況理解につなげる教材・教具の工夫） ・それぞれの姿勢等により異なる見え方に応じたモニターの配置を工夫する。	・ボールを蹴る足元を壁面に投影しながら活動したところ、画面を見ながら意欲的に足を動かすことができた。 ・仰臥位のまま活動の様子を見ることができるように、天井に活動映像を投影したところ、笑顔や発声が見られた。
それぞれの動きに応じた教材・教具の活用（得意な動きを引き出す教材・教具の工夫） ・個別学習等で活用している、ボールを転がすスロープや応援具等を使って活動する。	・ボールを押し出す、紐を引くなどの活動をスムーズに行うことができた。また、「足で蹴る」活動に初めて挑戦できた生徒もいた。 ・物に触れることにやや抵抗のある生徒が、自身の対戦がない場面で自分から応援具を持ち、他生徒の対戦を応援する様子が見られた。

(2) 学習の様子

学習内容	学習の様子
1　挨拶 2　準備体操 3　チーム決め 4　ＰＫ対決 （キッカーVSキーパー） 5　振り返り 6　挨拶	 【タブレットで応える】 【全員で準備体操】 【関わり合いながら】 【ゴールキーパーの活動（引く動作）】

【映像を見ながら】



【天井に投影して】

【スロープを使って】

【応援】

(3) 指導の評価

・複数の指導者の働き掛けを工夫することで、個別学習で身に付けた表現方法で応える、友達を意識して活動に取り組む等、関わりの広がりにつながった。

・教材・教具を工夫したり、ＩＣＴ機器を有効に活用したりすることで集団の中でも自分の力を発揮して活動する姿につながった。

５　指導における成果と課題

(1) 成果

・生徒の身に付けた力の般化につながる活動ができた。

・生徒の見え方に応じたＩＣＴ機器の活用について、他の学習場面でも応用し、生徒の意欲的な活動につなげることができた。

・コミュニケーションを広げるための合同学習の授業づくりの考え方を整理できた。

(2) 課題

・あきた病院内の在籍生徒が一人となる次年度以降、関わり等を広げるための学習内容について検討する必要がある。

６　まとめ

合同学習を通して、生徒のコミュニケーションの広がりが見られた。背景には、「集団の中で個を生かす」視点をもった授業づくりがある。授業づくりにあたっては、個別の指導計画等を活用しながら、個別学習と合同学習のつながりを丁寧にチームで検討した。次年度以降も、生徒の変容につなげるための効果的な指導の仕方について検討を重ねる体制を継続できるよう、引き継いでいきたい。

６　まとめ

(1) 生徒の変容

過年度の研究成果を生かしながら授業づくりを行ったことで、「わかった」「できた」と学びを実感し、それぞれの生徒が個々の表現の仕方で精一杯気持ちを表す姿が見られた。具体的には、「分かってうれしい」等自分の言葉で話す、タブレット端末やスイッチ教材をタイミング良く押す、「うれしい」「もっとやってみたい」気持ちを笑顔や不満気味の表情で表す、教師からの誘いかけに対して、元気に挙手をしたり身体の一部を動かしたりする様子が日常的に見られるようになった。

(2) 「学びを実感し自分の気持ちを精一杯あらわす姿」を引き出すための授業づくりのポイント

チームによる授業づくり検討会

道川分教室では、病院内訪問教育における授業づくりにおいて、障害の重い児童生徒一人一人の思いに寄り添い、思いを共有することを大切にしてきた。そのために、「アセスメントチェックリスト」や「道川版自立活動の流れ図」、「道川授業デザインシート」等を活用して、担任一人の主観だけではなくチームで多角的に実態把握から目標設定、授業実践、評価、改善を行ったことで、児童生徒が学びを実感でき、一人一人が輝く姿につながった。

また、日常的に生徒のエピソードや張り切って活動した映像などを職員間で共有したことで、生徒の表情の変化などに気付き、合同学習の際などに担任以外の教師との関わり（周囲からの賞賛や効果的な言葉掛け等）が広がることにつながった。

５つの観点に基づく指導・支援の工夫　（共通実践事項）

「道川授業デザインシート」を活用し、５つの観点を基に指導・支援を工夫したことで、生徒が学びを実感し、自分の気持ちを精一杯あらわす姿につながった。

〇流れのある題材計画～題材のゴールを明確にすることによる学びの蓄積とステップアップ
見通しや安心感につながる学習の積み重ね

〇言葉掛け～「何をやるのか」「何を学ぶのか」教師の意図が伝わる言葉掛け
教師の言葉掛けから生徒の表出を待つ間（ま）の大切さ
生徒の気持ちのフィードバックと本人の受け止めまでの見届け

〇姿勢づくり～本時の学習活動と関連する動きを意識できる導入の工夫
活動しやすいポジショニング
ＯＴ・ＰＴ等との連携

〇教材・教具～五感に訴え個々の表現方法に応じた工夫
個々の興味・関心や生活年齢等に応じた工夫
個々の見え方に配慮した配置の工夫

〇授業展開～「動」と「静」のメリハリのある活動設定
めあてが分かる導入の工夫とできたことが分かるまとめの工夫

(3) 病院との連携

学校生活の基盤となる健康を維持するために、日々の児童生徒の状態を把握したり、ＯＴ、ＰＴ、ＳＴなど専門的な立場からのアドバイスを活用したりすることで、安心・安全な学習につながった。また、病院生活＝生活の場になる生徒の卒業後に向けて、学校と病院で情報を共有することで教育と医療の両視点から生徒の実態を見つめ直すことにつながり、相互理解が深まった。

(4) 今後に向けて

限られた生活空間で学習する生徒にとって、「一緒に活動する友だち」は、かけがえのない存在である。友だちからの働き掛けを受け止め、自分の気持ちを表現する場が少なくなっている現状であるが、道川分教室で長年培ってきたＩＣＴ機器を活用した学習を通して、今後もたくさんの人とのつながりを大切にしていきたい。

7　おわりに

今年度、本荘養護学校時代から積み重ねてきた授業づくり等の実践の成果を活用しながら、研究を推進してきた。具体的には、「各種ツールを活用した実態把握や指導目標の設定」「５つの観点に基づく指導・支援」「エピソード記録や映像を活用した評価や改善の視点検討」などをチーム（授業づくり検討会）で行ってきた。検証は、特定の研究授業によらず、全生徒の個別学習等を通して行い、汎用化を目指した。結果として、生徒のよりよい変容が見られている。

各実践例等でも述べられているとおり、道川分教室の生徒は、反応が微細であったり、加齢による体力等の衰えが見られたりする実態である。しかし、このような実態の中でも丁寧な授業づくりの中で笑顔があふれ、意欲的に学び、確かな成長を見せてくれている。改めて学びに障害の程度や年齢は関係のないことを教えてくれた生徒に感謝したい。

本研究実践が、多くの子ども達への授業づくりの一助となることを願って、道川分教室最後の紀要を締めくくる。

＜参考・引用文献＞

・特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編　　文部科学省　平成 30 年３月
・平成 22 年度～令和３年度　研究ゆり　第 12 号～第 23 号　秋田県立ゆり支援学校
・重度・重複障害児のアセスメントチェックリスト
　　－認知・コミュニケーションを中心に－ver. 5. 0（広島県立福山特別支援学校）
・『ひとがひとをわかるということ』鯨岡　峻　ミネルヴァ書房

＜資料＞研究計画

主な活動内容				
月	研究会 ※	授業づくり検討会・授業研究	研修	その他
4	○分教室研究会①(21) ・今年度の研究の進め方について ・研究概要の確認			
5	○分教室研究会②(11) ・事例研究の進め方について	○授業づくり検討会Ⅰ(12～16) ・実態把握、教育的ニーズ、実態に基づく中心課題の検討 ・指導目標、指導内容の検討 ・題材計画の検討 ・事例テーマの検討		・訪問担当教員研修会：前期(19)
6		○授業づくり検討会Ⅱ (5/30～6/3) ・指導主事訪問指導案検討 ・授業デザインシート作成		・指導主事計画訪問(24)
7		○授業づくり検討会Ⅲ(11～15) ・映像記録等による評価 ・１学期の成果と課題 ・２学期に向けての改善点	☆「教材・教具研修会①」	
8	○分教室研究会③(19) ・成果と課題の共通理解、後期に向けた授業改善		・教育課程研修会(１) ★「ＩＣＴ機器研修(情報部)」	
9		○授業づくり検討会Ⅳ(20～27) ・映像記録等による評価と改善	★授業づくり研修会「病院訪問教育における授業づくり」(26)	
10				・訪問担当教員研修会：後期(7)
11		○授業づくり検討会Ⅴ(24～30) ・生徒の変容の確認 ・２学期の成果と課題 ・３学期に向けての改善点		
12	○分教室研究会④(13) ・研究の評価及びまとめ			
1	○分教室研究会⑤(23) ・成果と課題の共通理解		★「ＩＣＴ機器研修(情報部)」	
2				
3				

☆本校主催
★分教室主催

秋田県立ゆり支援学校　研究の歩み

※平成27年度まで「秋田県立ゆり養護学校」、平成28年度より「秋田県立ゆり支援学校」となる。

号	年度	研究主題
1	平成11年度	「地域に支えられ、地域に開かれた学校を目指して」～新設校への理解を求めて～
2	平成12年度	「地域に支えられ、地域に開かれた学校を目指して」～新設校への理解を求めて～
3	平成13年度	「一人一人が生き生きと取り組む授業づくりを目指して」～授業づくりに結びつく個別の指導計画の作成を通して～
4	平成14年度	「一人一人が生き生きと取り組む授業づくりを目指して」～授業づくりに結びつく個別の指導計画の作成を通して～
5	平成15年度	「一人一人が生き生きと取り組む授業づくりを目指して」
6	平成16年度	「集団の中で一人一人が生きる授業づくりを目指して」
7	平成17年度	**平成17・18年度　秋田県教育委員会委嘱特殊教育実践研究協力校** 「障害の多様化に応じた教育課程の在り方に関する実践研究」～一人一人の教育的ニーズに応じた支援の充実を目指して～ **☆校内研究**～「集団の中で一人一人が生きる授業づくりを目指して」
8	平成18年度	**平成17・18年度　秋田県教育委員会委嘱特殊教育実践研究協力校** 「障害の多様化に応じた教育課程の在り方に関する実践研究」～一人一人の教育的ニーズに応じた支援の充実を目指して～
9	平成19年度	**平成19・20年度　秋田県教育委員会委嘱特別支援教育実践研究協力校** 「障害の多様化に応じた特別支援学校の在り方に関する実践研究」～一人一人のニーズに応じた生き方指導の在り方を探って～
10	平成20年度	**平成19・20年度　秋田県教育委員会委嘱特別支援教育実践研究協力校** 「障害の多様化に応じた特別支援学校の在り方に関する実践研究」～一人一人のニーズに応じた生き方指導の在り方を探って～

号	年度	研究主題
11	平成21年度	「集団の中で一人一人がのびる授業づくり」～目指す姿を明確にした目標設定と支援の在り方～
12	平成22年度	**☆本校**　　「豊かな生活を送るために～活動する喜びや働く喜びが実感できる授業を目指して～」 **☆道川分教室**「一人一人が周囲とかかわる力を伸ばすための支援の在り方」
13	平成23年度	**☆本校　平成23・24年度　新学習指導要領に基づいた教育課程の編成等に関する実践研究協力校** 「豊かな生活を送るために」～活動する喜びや働く喜びが実感できる授業を目指して～ **☆道川分教室** 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業の創造を求めて」～児童生徒の主観に迫る的確な実態把握とは～
14	平成24年度	**☆本校　平成23・24年度　新学習指導要領に基づいた教育課程の編成等に関する実践研究協力校** 「豊かな生活を送るために」～活動する喜びや働く喜びが実感できる授業を目指して～ **☆道川分教室** 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業の創造を求めて」～自発的に活動する姿を育む状況作りとは～
15	平成25年度	**☆本校** **平成25年度文部科学省委託　特別支援教育に関する実践研究充実事業研究推進校** 「自ら考え、自ら活動する児童生徒の育成」～生徒指導の観点を生かした授業づくりと研修の充実を目指して～ **☆道川分教室** 「集団の中で個が生きる授業づくりを目指して」～分かりやすい状況を作る４つの観点を生かして～
16	平成26年度	**☆本校** **平成25年度文部科学省委託　特別支援教育に関する実践研究充実事業研究推進校** 「自ら考え、自ら活動する児童生徒の育成」～生徒指導の観点を大切にした授業づくりと教育課程の改善を通して～ **☆道川分教室** 「コミュニケーションの深まりを目指した授業づくり」～個々のニーズにあった教材・教具の工夫、改善を通して～
17	平成27年度	**☆本校**　　「人と関わる力を高める授業づくり～自分の気持ちや考えを自ら伝える姿を目指して～」 **☆道川分教室**「コミュニケーションの深まりを目指した授業づくり～４つの観点を大切にした支援の在り方～」
18	平成28年度	**☆本校** 「児童生徒一人一人の人と関わる力を高めるために～気持ちや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり～」 **☆道川分教室** 「人との関わりを広げる授業づくり～自分の気持ちを表し、伝える姿を目指して～」
19	平成29年度	**☆本校** 「児童生徒一人一人の人と関わる力を高めるために～気持ちや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり～」 **☆道川分教室** 「人との関わりを広げる授業づくり～自分の気持ちを表し、伝える姿を目指して～」
20	平成30年度	**☆本校**　「主体的に人と関わる力を高めるために～校内資源や地域資源を活用した授業づくりを通して～」 **☆道川分教室**　「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり～自立活動における個別学習の指導を通して～」
21	令和元年度	**☆本校**　「主体的に人と関わる力を高めるために」 **☆道川分教室**　「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり～自立活動における個別学習の指導を通して～」
22	令和２年度	**☆本校**　「児童生徒による学習評価の充実～各教科の授業づくりを通して～」 **☆道川分教室**　「児童生徒による学習評価の充実～自立活動の授業づくりを通して～」
23	令和３年度	**☆本校**　「児童生徒による学習評価の充実～児童生徒が学びを実感し、学びをつなげる授業づくりを通して～」 **☆道川分教室**　「児童生徒による学習評価の充実～自立活動の授業づくりを通して～」

令和４年度　秋田県立ゆり支援学校　研究同人

校　長　　髙橋　譲
教　頭　　高田屋　陽子　　時田　航　　佐々木　朋広（道川分教室）

【本校】

〈小学部〉

畠山　千恵　　長谷川絵美子　　髙橋真理子　　髙橋　一久　　下村　志穂
伊藤　和美　　熊地　ゆうき　　津田　徹男　　長谷山孝志　　今野　瑞恵
髙橋　真紀　　髙橋　健太　　横山　友香　　廣田　舞花　　佐藤　美鈴
佐藤　瑞枝　　佐藤　由生　　矢野　隼人　　藤澤　知里　　横田　千春
菊地　瞳子　　佐藤　美奈子　　藤原実乃里

〈中学部〉

菊地　正紀　　高橋　直子　　桐田明日子　　東谷いずみ　　山田　瀬里奈
江川　悠介　　塚田　　誠　　伊藤　昌子　　大川　周悦　　佐々木　顕
堀井　千秋　　軽部　亜紀　　大滝　陽平　　高野　　哲　　首藤　将大
小坂　雄介　　加藤　智美　　岡部　萌花　　川村　沙織　　佐々木あゆみ

〈高等部〉

加藤　俊和　　大庭せい子　　大島　由紀　　斎藤　　仁　　佐藤　江美　　三浦　智己
板垣　五月　　渡辺美樹子　　安藤　真貴　　池田　和馬　　諏訪江梨子　　髙橋　成暢
塚本　竹美　　小池成生子　　神田　雄樹　　小番　奈々　　工藤裕美子　　髙橋　直志
吉田　卓也　　冨田　昌裕　　永井　淑子　　佐藤　聖哉　　伊藤　尚子　　松橋　智恵
籠山　誠　　佐藤　美白　　石井　　真　　長谷川善行

〈寄宿舎〉

佐藤菜穂子　　仁平　牧子　　杉田　真子　　西嶋　一就　　川尻恵美子　　佐々木なおみ
小澤美和子　　朝香由美子　　近野　福子　　渡會　妙子　　谷口　大介　　佐藤　弘康
佐々木　恵　　工藤　美香　　佐々木滉太

【道川分教室】

鈴木　　晋　　石垣　幸子　　相場眞里子　　土田　奈緒

◇　令和４年度　研究ゆり　第２４号　◇
令和５年３月発行

〈本校〉
〒０１５－０８８５　　秋田県由利本荘市水林４５６－３
ＴＥＬ　０１８４－２７－２６３０
ＦＡＸ　０１８４－２２－８７０６
ホームページ　http://www.yuri-s.akita-pref.ed.jp/
メールアドレス　yuri-s@akita-pref.ed.jp

〈道川分教室〉　独立行政法人　国立病院機構　あきた病院内
〒０１８－１３０１　　秋田県由利本荘市岩城内道川字井戸ノ沢８４－４０
ＴＥＬ　０１８４－６２－６１３６
ＦＡＸ　０１８４－６２－６１４５
ホームページ　http://www.yuri-s-michikawa.akita-pref.ed.jp/
メールアドレス　yuri-s-michikawa@akita-pref.ed.jp